
ラセン

丹歩々

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ラセン

【Nコード】
N2524Y

【作者名】
丹歩々

【あらすじ】
遙か昔、一人の人間が殺人を犯し、その罪の自責により、自殺した。

その人間の魂は、神の造った「定め」に従い、地獄という場所を用意された。

慈悲深い神は、それらの魂を救うため、再び地上に再生させた。

再生された魂は、また地上界で自由を得た。

はたして、再生された魂は、また繰り返して罪を重ねるのか？ 逆に善行を以って、罪を排除出来るのか？

魂の浄化の闘いが、始まる。

お断り

同一題名

「ラセン」

作者：夢咲 春風

は私、丹歩々の作品です。

ややこしくて、申し訳ございません。

（削除できませんでした。）

第一章・セバスチャン

そこは、罪を犯して死んだ靈魂たちの、償いの場所であった。

その場所には、多くの靈魂たちがあつた。

その靈魂たちは人間の型をしていたが、男でも無く、女でも無かつた。

靈魂たちは、個々に与えられた、黒い球の中にいて、孤独であつた。

その球は、光が完全に遮断された、ゴムのような膜であつた。

靈魂たちがどのようにあがいても、出ることは出来なかつた。

球は、魂たちの、怨念の深さに応じて、廻り続けていた。

ゆっくりと廻る球もあれば、破裂しそうに廻る球もあつた。

靈魂たちはその速度に応じて、歩き、また走らなければならなかつた。

その球は大きくなり、直径が等身大であつた。

靈魂たちは圧迫の恐怖にもいた。

聞こえるものは、外の球の呻きの声だけであつた。

それらが球の中で、自分の呻きと共に、共鳴していた。

外の呻きも、決して休息する事はなかつた。

球の回転に追いつけずに、足を取られ、バランスを崩して転がる靈魂たちがあつた。

転がると突然球体は、内側に鋭いの刃を突起させた。

靈魂たちを立たせるためだ。

地面に横たわる事すら、許されなかった。

その刃の数も、怨みの数に比例していた。

靈魂たちはその度、強烈な痛みを受ける。

鈍い音を発てて、靈魂体に、強烈に突き刺さる。

臭うものは、靈魂に突き刺さる、刃の摩擦の焦げた臭いだけであつた。

さらに、玉の中の気温は、灼熱と極寒が交互にやって来た。

地獄とは”永遠に救われない”と思う認識の中にあつた。

そのような玉が、その場所には数えきれないほどあつた。

常に新しい玉が、川底へ沈んで行くクラゲのように重なりあつて行つた。

それは一つのもの、また二つにくつついたもの、などがあつた。

苦しみだけに集中させられる世界。

そこは神が完全に見捨てた、爬虫類の卵のように、薄暗い平面に置き捨てられた世界であった。

幾年分の時が流れただろうか、その中の一つの球に、変化が起った。

ここにある靈魂達は、球に入ったとたんに前世の記憶は無くなる。

しかし、その球の一つの靈魂に、前世の記憶が、突然沸き起こった。

「ごめんなさい」

と靈魂体が叫んだ瞬間、球が真つ二つに割れ、光が溢れる世界が現れた。

その光り輝く世界には、二本の木が、並んで立っていた。
輝きの源はその木であった。

現れた空間は、平面が無く、木も靈魂も宙に浮いていた。

木が放つ光は、下にも上にも、前にも後ろにも四方を輝かせていた。

その木の大きさは計り知れなかった。

四方に伸びた枝々は、放つ光の眩しさで、どこまで伸びているのか、分からなかった。

その幹は、常に伸び続けていた。

靈魂は、その輝く木の前に平伏した。

その靈魂はなぜ、自分があの玉の中に入ったのか、地上界で犯した罪の記憶が完全に蘇った。

「セバスチャン」

輝く木が語った。

「私は命の木であり、善悪を知る木です。
またアルファであり、オメガでもあります。」

セバスチャンと呼ばれた靈体はその時、地上界を去って直ぐに、この輝く木と対面した事を思い出した。
その時に言われた言葉を思い出した。

「罪深い靈魂よ、
あなたを私の国に、迎える事は出来ません。

あなたの魂に相応しい世界に、行きなさい。

再生は、今は許されません。」

と言われたのを、思い出した。

再度対面した今、靈魂は、輝く木の前で懺悔した。

「木よ、おゆるしく下さい。」

輝く木は、靈魂に言った

「再度の試練です。

あなたの未来から、私に言葉が届きました。

その言葉とは、あなたの来世が、私に「許しの言葉」を叫びました。
ゆえにあなたの球を私は、今割きました。」

（その靈魂はずっと球の中にいて、なぜ未来から声がしたかは、その英知を解明出来る人間はいない。）

靈魂は感慨に答えた。

「ご慈悲ありがとうございます。」

輝く木は、さらに続けた。

「あなたは、前の世で、二つの過ちがあります。

一つは、人間を殺したこと。

もう一つは、天命に背き、あなた自ら、命を絶ったこと。

浄化するためには・・・」

輝く木は、セバスチャンに全てを語った。

そして輝く木は、最後に語った。

「セバスチャンよ、行きなさい。」

次の世で、罪を浄化するのです。」

というとセバスチャンは、この会話の記憶を奪われた。

セバスチャンはその場に倒れて深い眠りについた。

輝く木が与えた救いの場に、セバスチャンは旅立った。

次元を幾つも超えて、新たな救いの人生が始まった。

人間には、到底理解しえない「神の許しの身業」がここに現れた。

輝く木はセバスチャンの再生のため、その靈魂を再び地上に蘇生させた。

セバスチャンの生まれ変わりである「井上佑一」は、もちろん前世の記憶などなく、完全に人間として生きていた。

輝く木は、彼を蘇生させ、再び自由を与えた。

自由を獲得出来たセバスチャンは、また何をしてもいい権利を獲得した。

前世の時のように人を殺し、自らの命を絶つ事も自由である。セバスチャンは自由を獲た替わりに、輝く木は、口出しする事も無くなった。

「神の沈黙」

という地上界の摂理がセバスチャンに入った。

井上祐一（セバスチャン）

その夜、空は多くの星座で輝いていた。

初冬の、そこ冷えする冷氣の中で、星座の配列は崩れる事なく、永遠に型にはまった版画のように鮮明であり、かつ尊厳にゆれ動く事なくそこに鎮座していた。

冷氣は、星座の光りが放つオーラと結合し、威厳ある目に見えない固体のように、地にある全てのものを支配していた。

井上祐一は帰宅した車から降りると夜空をしばらく仰いでいた。

それらの星々の輝きは、悠久の光を祐一に注いでいた。

「何千年前の光を浴びているのだろうか。」

仕事の煩雑さが、祐一に自然の中に溶け込む余裕を奪っていたが、その日は一年係りのプロジェクトがほぼ成功したため、余裕が導くように夜空に眼を行かせた。

祐一は知っている星座の形を追った。

それらの形は懐かしい郷愁の思いを抱かせながら、心の中に溶け込んでいった。

あたかも誰かに抱き締められているかのように、心が落ち着行った。しかし次の瞬間に突然、祐一の心に言い知れぬ「恐怖心」が襲って

来た。

オリオンの中芯から、刃が落ちて来る光景が脳裏に浮んだ。

「疲れているんだな。」

佑一は恐怖心を振り払い、誰もいない、温まっていない、我が家へと入った。

佑一はソファで音楽を聴きながら、ワインを楽しんでいた。そこへ携帯が鳴った。

「私だけど．．」

別れた妻の真由美である。

「リサの運動会、来週の日曜日なんだけど．．
あなた出てくれないかしら．．」

「ああ、願ってもない事だけど．．
君達は．．」

「私達、ちょっと新居の事で出かけるの．．

彼もその日しか時間がなくて．．」
早口にまくし立てる。

もうそうすべきなの、と言いたげな口調である。

「いいでしょ！

貴方の一人娘に会わせてやるんだから！」

祐一のグラスを持つ手が震えた。

「分かった、学校直接でいのかな・・・」

別れた妻の今の夫は、祐一の取引先の男で田中誠という。

別れた妻と誠との出会いは、スポーツサークルであった。

誠は身長が高く、細身で、情に篤く、女性より気が付く男である。

真由美は、佑一と誠が面識がある事は知らずに接していた。

誠は七年前に奥さんを亡くしている。

子供は居なかった。

誠は真由美と一緒に境遇と思っていたらしい。

「私も夫をなくしたの。」

の言葉に誠はだまされた。

「なくした」と言う言葉を誤解させ、真由美はたくみに誠に接近した。

真由美は、独り身になった誠の寂しい心の隙間に入り込んで行った。

誠は三十半ばで、一流商社の取締役営業部長であった。

真由美には魅力のある肩書である。

誠は真由美を愛した。

真由美も初めは、誠を愛した。

祐一達の結婚は十二年で終わったが、真由美は三年前にデザイナーの会社を立ち上げ、社長であり、自立出来るほどの収入になった。その頃から、真由美は祐一をさげすんでみるようになっていった。

祐一は妻の変化に耐えていた。

妻に新しい男が出来た事は、薄々感じてはいたが、まさか取引先の、懇意にしている誠であるとは思ってもいなかった。

妻と離婚したあと、誠から籍を入れた事を申し訳なく告白された時は、祐一は全く冷静でいられた。

「申し訳ございません。」

「いや、気にしないでいいよ。
これが彼女の望みであれば、それでいい。」

祐一は誠に対して好感を持っていた。

祐一に怒りや憎しみは沸いて来なかった。

いや、かえって真由美のさげすみのまなざしから、開放される喜びの方が大きかった。

ただ、一人娘のリサと別れる事だけが、悲しとして残った。

しばらくして、今度は電話が鳴った。

会社の経理主任の、山口亜利紗からである。

「夜分遅く申し訳ございません。

山口です。

部長、今回のプロジェクトの成功、おめでとうございます。」

「ああ、山口君か、ありがとう。

お陰様で何とかかなりそくだよ。」

「本当におめでとうございます。

部長は人一倍、ご苦労なされましたので・・

ぜひ一言言いたくて・・申し訳ございませんでした。」

亜利紗は話しているうちに込み上げてくるものがあつたのだろう。
すすり泣く声が聞こえた。

経理主任といつても、山口亜利紗はまだ三十歳手前である。

スレンダーでスタイルがよく、ロングの髪をなびかせて歩く姿は、
モデルと言ってもおかしくない程である。

社内で、亜利紗に興味が無い男は、ほとんどいなかったが、あまり
の容姿と心の美しさに、皆、高値の華と諦めていた。

独身で、礼儀正しく、おまけに優しい性格なので、浮いた話もあり
そつなはずだが、佑一にそのような話が伝わって来た事がなかった。

「ご家族団欒の中、誠に申し訳ございません。」

「いや・・」

今日は一人なんだ・・」

「お一人・・」

奥様やお子様は・・」

「いや・・」

ちよつとね・・」

「そうでしたか・・」

失礼いたしました。

では・・」

部長、おやすみなさい。」

離婚したことはまだ数人しか知らない。

まあ、知れわたるのは時間の問題だろうと、佑一は離婚した後ろめたさはない。

それよりも妻のさげすみのまなざしの辛さにくらべれば、噂話の主人公になる事など、取るに足らない事と思えた。

祐一へ入った夢

その夜、祐一は不思議な夢を見た。

仕事の疲れとワインの酔いから、熟睡しているのだが、夢が向こうから強引に入りこんだ。

入り込んだ夢は「神」が与える「救いの身業」である。

内容は祐一には覚えさせず、前世で犯した罪の「心理的感情」だけを残させ、そこから、再生させた現世で、救いの行動を起こさせる「神」が与える償いの業である。

神が人間に持たせた「潜在意識」に働きかける業である。

祐一は冬であるのに、汗を流しながら目覚めた。

「この悲しさはなんなんだ。」

虚脱感で目覚めた。

男は木々の間から、ある家族を観察していた。

男は、その日の早朝に、馬に乗った家族の主が山を越えたのを確認していた。

山越えは、帰って来るのに半日はかかる。

一時の時が流れ、主の妻が髪を束ね、川で夫の服を洗いだした。

名前はアンナと言った。

この国のこの地方の人々の服は、一重の襦袢のような衣を、腰に紐で結んだだけの出で立ちであった。

男とこの家の主は兄弟である。

男は長男で、早くに他界した両親の財産を、ほとんど受け継いだ。

この男の名はルドルフといった。

働かなくてもいい程の、財産の相続であった。

ルドルフは独り身であった。

さて弟の方であるが、親から受け継いだ唯一の財産は、町外れのこの土地だけであった。

しかし、堅実な弟は結婚し、妻と二人、質素に生活していた。

子供はいなかった。

弟の名はセバスチャンといった。

貧乏であるのに、兄に頼って来ない弟。

兄はそれが氣にくわなかった。

「何かあるはずだ！」

兄は、その為にほとんど毎日、弟家族の不思議を探るべく、観察していた。

しかし、そこには何の特別はなく、平穩に過ぎる日常だけがあった。それを見続けて行くうち、男は徐々に、嫉妬の念に駆られて行った。嫉妬という悪魔が正当な視界を困惑させつつあった。

そして、とうとうその日、

「羨ましいだろう」

と誰かが、兄の心に囁いた。

うなずいた瞬間、悪魔が兄に入った。

兄は女の前に行くと言った。

「あなたの家で弟を待ちたいのだが。」

女は微笑んだ。

「親愛なるお兄様
さあ、どうぞ。」

女は自分の家に兄を迎えた。

女の本心は、夫を軽蔑していた。

「私は貧しい生活はいやです。

せめてお兄さんみたいなお金持ちの妻になりたい」

そう思っていた。

若くて美しい女の自由を、夫が奪っていると思っていた。

そこに、独り身で裕福な兄が来たのだ。

男の首には、金のネックレスが光っていた。

女にも、平穩の中に潜む、情性の油断という業が入り込んだ。

女は胸の前の服を少しはだけて見せた。

兄が動揺したのを、女は見逃さなかった。

女がわざと見せる、かがんだ胸の膨らみ。

そこから上目遣いに見せる誘惑の瞳。

女は一瞬、きらびやかな宝石を纏^{まと}った自分の姿を想像した。

全てが入ってきたものの策略が進んで行った。

食べ物^が女によって運ばれた。

「弟は毎日、この女を抱いている
お前は兄

あの女はお前を待っている。」

男は女を押し倒した・・

女は抵抗するふりをした。

男は女のばたつかす腕、脚を全身で受け止め、制止させた。

唇で女の露出している肌を舐めまわした。

女は感じ始めた。

憧れの男の胸は厚かった。

抵抗が徐々に弱ってきた。

女は裸にされた。

二人に入りこんだもの達は、笑っていた。

女はその男に身を任せた。

二人は互いの身体を貪りあった。

行為は絶頂に達した。

そこに弟が帰って来た。

星座がきらめく夜空であった。

弟はそれらを眺めながら、家路を急いでいた。

家の近くまでくると、呻き声が聞こえる。

徐々に近づくことに、それが鮮明に耳に入る。

その声に合わせるように、木が揺れてゴトンゴトンとリズムカルに歩調している。

弟は、まさかそこに、自分の信ずべき者達の、不貞が織り成されているとは、夢にも思わなかった。

弟は、飼っていた牛の出産だと思った。

扉を開けた。

弟の落胆は、言葉にならない。

神も弟の人生を哀れんだ。

行為は遮断され、女は泣いた。

男は、その震えながら立ちすくむ弟に笑いかけた。

二人の間に沈黙があつた。

信じていた者が、裏切りに走った現実には、弟は正気を無くした。

その後に弟は激情のまま、無意識に、包丁で兄を刺した。

一刀で血が脇腹から溢れだし、下にいた女に垂れ流された。

女は恐怖で上に乗っていた男を跳ね除けようとばたつかせたが、男は女を抱き締め、放そうとはしなかった。

血が跳ね退ける力を滑らせ、男の脇腹には、女の手跡が幾線も赤く書き込まれた。

呻きと叫びが家の中、また家の周りの草原に木霊した。

弟は三回、男を刺して外に出た。

初冬のきらめく星座の下で、弟は全身に返り血を浴びた姿で、その場に崩れ落ちた。

全てが終わった。

オリオンが極めて輝いていた。

幸せから絶望へ。

悟った瞬間、刃を自らの腹へ、一刀に突き刺した。

弟は、神を罵倒して息絶えた。

その時に祐一はハッと目覚めた。

しかし夢の内容は隠されていたため覚えていない。

恐怖心と虚脱の気持ちで目覚めたのだ。

祐一と亜利沙

祐一はその日、経理主任の山口亜利沙を食事に誘った。

祐一と亜利沙に関係のある人々から、完全に見られる事のない、会社から遠くにある高級フランス料理店を予約した。

祐一はタクシーから降りて店内に入ると、個室に案内された。

まだ時間が早いため、店にはお客が疎らだった。

個室からは、シャンソンが流れ、黒光のするテーブルやイスが高級感を与えていた。

壁の絵画は淡い海辺の油絵である。

程なくすると、亜利紗が到着した。

「遠くまでごめんなさいね。」

「いえいえ

今日はお招きいただきましてありがとうございます。」

亜利沙は満面の笑みを称えた。

コートを脱ぐと亜利紗は白のスーツ姿であった。

ヒールを履くと祐一よりも少し低い位の身長である。

華奢な体付きではあるが、大きな胸と細いウエスト、スカートから

伸びる長く細い脚。

コートを掛ける動作、スーツを脱ぐ時の了解を求めるタイミングなど、全ての行動と言動が、女としての品を漂わせていた。

社内の男達が魅了されるのも、改めて祐一にはうなずけた。

「場所はすぐに分かったかな。」

「はい、タクシーの運転手さんがご存知でいらっしゃいましたので。」

祐一はあらかじめタクシー代を亜利沙に渡していた。

お釣と領収書を手渡しながら、亜利沙はウェイトレスが引いた席に着いた。

「ありがとうございます。」
という気遣いも忘れない冷静さである。

改めて亜利沙と顔を向かい合わせると、その美しさに祐一は赤面する程のときめきを感じた。

「部長、この度はおめでとうございます。」

「いやいや、ありがとうございます。
皆の頑張りのおかげだよ。
特に山口君には助けてもらった。
感謝するよ。」

「いえいえ、私なんかご指示に従っただけです。」

「そんな事はないけど、まあ今日はプロジェクトの成功祝いということで乾杯しよう。」

「はい、部長ありがとうございます。」

二人はワインで乾杯した。

バラード的なシャンソンの音色が会話を滑らかにした。

亜利沙は、祐一すら忘れていた細かい指示に対して、感謝を述べた。

祐一は久しぶりに接する、女性の優しさという魅力、に心を奪われた。

前菜が運ばれ、二人はフルコースを楽しんだ。

見つめ合う二人の心は、時間と共に、より一層、近くなって行った。

「今日のお食事の事は、奥様にご存じなんですか。」

急に亜利沙は悲しい表情で言った。

「山口君、実は僕は離婚したんだ。」

「えっ・・・」

亜利沙は本当にびっくりしたようだった。

そして、悲しみの表情から嬉しそうな表情を作り、一瞬その少し潤んだ大きな眼を、祐一から逸して言った。

「じゃ、私にもチャンスがあるって事ですネ。」

下に逸した瞳が、輝きを持って再び祐一に注がれた。

ワインの酔いで亜利紗は一段と色っぽさを増していた。

祐一はその言葉と表情に、言い尽くせない程の愛しさが沸いて来た。

肩まである髪を亜利紗はかき上げた。

髪から発せられる甘味な香りが、祐一には今まで嗅いだ事のない、天上の最高の香りだと思った。

店から出た二人は、肩を抱き合っていた。

タクシーに乗ってからは手をつなぎ合い、亜利紗は祐一の胸にもたれかった。

祐一は優しく肩を抱いてあげた。

ホテルに到着し、そこで初めて二人は結ばれた。

利沙の透き通る白い肌が、赤く熱を帯びながらベッドの上で官能のまま、なまめかしく、ゆっくりと震えながら動いていた。

祐一は優しく目の前の、愛しい肌に唇をゆっくりと重ねていく。

その度に、亜利沙の小さな唇から、感じるままの喘ぎ声があがって行った。

祐一は唇を全身に這わせ、両手で亜利沙の全身を愛おしむように擦っていく。

それに応えるように亜利沙は華奢な身体をくねらせ、悶えていった。

亜利沙の身体が弓なりになり、のけ反る。

その動作は時間と共に妖艶さを増して行った。

声はその動作と共有するように段々と大きくなる。

亜利沙は決して男を知らない身体ではなかった。

しかし祐一のように、心から愛されていると思ったのは初めてであった。

亜利沙は男女の営みで初めて絶頂という感覚を実感して行く。

祐一が愛しく唇でなぞってくれる場所、また愛撫している手のひらに触られる場所が、全部気持ち良さを通り越した「性感帯」になって行くのを知った。

亜利沙が逝くたび、二人は長く唇を重ねあう。

登り詰めた後、祐一はエクスタシーが引いていく余韻を与えずに、亜利沙を優しく愛し続けた。

亜利沙に対する思いやりが何回も亜利紗を逝かせた。

結合する前に亜利沙は何度登り詰めたか分からなかった。

長い愛撫のあと、祐一は亜利沙の中に入って行った。

結ばれた状態で、祐一は亜利沙を抱き抱えた。

「亜利沙、愛しているよ。」

「祐一さん・・・

愛して・・・

ます・・・」

亜利沙は悶えながら言った。

切ない程の美しい声。

祐一は亜利沙の中を優しく突いていく。

亜利沙は、もう死んでもいい、とすら思えるほどの最高絶頂を生まれて初めて祐一から与えられた。

亜利沙の中に入ってくるものが、奥に入るたび、亜利沙は絶頂に何度も身体をのけ反らせ、歓喜の喘ぎを発した。

その動きは、優しい程にゆっくりしたものである。

あくまでも亜利沙の感情に応えたスピードである。

その日、亜利沙は最高の頂上に達した時に、祐一も逝った。

亜利沙は涙を流しながら、女性が発する声でない叫びをあげて逝った。

祐一も人間が出すことはない「獣」の声を出しながら逝った。

二人はこのように結ばれた。

亜利沙と真由美

二人が結ばれた夜。

祐一にまた、記憶を残さない夢が入った。

祐一の別れた妻である真由美がいた。

場所は公園である。

真由美は八才と幼かった。

真由美は泣いていた。

そこへもう一人、少女が現れた。

三つ違いの真由美の妹である。

妹は姉と遊ぼうとして姉の回りを走っている。

その中で幼い真由美は泣きじゃくっている。

妹は、姉に手を振りながら笑っている。

次の瞬間、猛烈なスピードで走って来た自動車が、妹を跳ねて逃げて行った。

妹は十メートル程、飛ばされた。

すでに死んでいた。

しかしすぐに妹は立ち上がった。

血まみれの妹はその場で回り始めた。

そのスピードは徐々に加速され、光を帯び始めた。

いつの間にか真由美はいなくなっていた。

その光は辺りを輝かせ続けた。

そうすると光の中から、成熟した女が現れた。

亜利沙であった。

亜利沙は満面の笑みを称えていた。

そこで夢は終わった。

事故で亡くなった妹は、亜利沙に生まれ変わっていたのだ。

姉である真由美が、自らの意思で新しい男を作り、結婚生活において、何の罪も犯していない男との結婚生活を、放棄した罪。

その結婚生活を、妹が復活させる事で、姉の姦淫の罪が許された。

「神の身業」は妹を亜利沙に蘇生させる事で、姉の罪を一つ取り除かせた。

後、姉に残された罪は「傲慢」

だけになった。

祐一は幸せな気持ちで目覚めた。

もちろん夢を見ていたことは記憶にない。

隣りには亜利沙がいた。

目覚めた二人は熱い口づけを交わした。

お互いに信頼が支配していた。

ここで神が人間に与える、”記憶に残さない夢”は「潜在意識」に働きかける。

人間が「恐怖心」を持つのは、実は神の「摂理」であるのだ。

真由美（アンナ）に入った夢

真由美が目覚めると、夫である誠がコーヒーを入れてベッドまで持ってきてくれた。

「おはよう、昨日は夜中にうなされて、夢の中で泣いていたけど、どんな夢を見ていたんだい？」

誠が言っている事が、真由美は何の事だか分からなかった。

「えっ、私が夢にうなされて、泣いていたの？」

そう言われれば、眼が腫れぼったい気がする。

「いいえ、私夢は見ていませんよ。」

「そう？ だったらいいんだけど・・・
さあ、リサを起こしてあげなきゃ・・・」

真由美は、心でまた吐いた。

夫の誠に対してある。

「出て行け！」

能無し！」

実は誠は、会社からリストラを受けていた。

要は無職であつた。

真由美はその事を聞いた時に、この夫に対して、嫌氣がさした。

「この男には、将来性を感じていたのにハズレたわ！

どれもこれも、ただ優しいだけ！

私は、パートナーには、名誉を求めるわ、私は社長！私の身の丈に叶って！」

と心で独白した。

この家族は、新しい生活に入っていた。

郊外のまだ自然が残る場所に、広い一軒家を購入した。

リサはまだ祐一の事を忘れられず、誠の事を「おじさん」と呼んでいる。

真由美もあえて誠のことを「お父さん」

と呼ばせる事もしなかった。

すでに夫に対して、軽蔑が生まれていたので、それは当り前の事であつた。

誠はリサを可愛がり、呼び方さえ気にしなければ、どこから見ても親子であつた。

その中に真由美が加われば、どこから見ても、家族であり、再婚同士の家族などとは見られなかった。

その過程で誠は失業した。

家族として成り立つものの中に、一家の長としての威厳がある。

しかし、誠は職が無い。

真由美は会社のオーナーである。

誠は途方に暮れた。

日に日に真由美の誠に対する軽蔑は、激しさを増した。

誠に対する”無視”は徹底されて行った。

昨晚、真由美の中に入った夢はこうである。

女は、目の前にある物々の前で笑った。

自殺した夫が遺した、家畜達のふくよかな蠢く躍動。

それらを、女の動向を気にしながら、世話をする使用人達。

女は心で、自殺した夫に対して呟いた。

「死んでくれてありがとう。」

同時に死んだ夫の兄の「財産」まで女に転がり込んだ。

また女は心の中で、弟から殺された身寄りのない兄に対して呟いた。

「殺されてくれてありがとう。」

女は一人で生きて行くには、十二分なお金を同時に得たのだ。

女は直ぐに、それらを元にビジネスをした。

それが当たった。

あくまでも女はしたたかであった。

裁判での席上にシーンが移った。

「私は犯されました。」

と女に入ったものが言わせた。

「あの日、あなたは行為をしましたね？」

「いえ！していません！

抵抗いたしました。」

「では罪は男にあると？」

「はい！」

裁判官のサンチェスは困惑した。

調査ではあの日

「町中に聞こえる程の喘ぎ声であった。」

「あんな愛の営みは聞いた事がない。」

「夫婦仲は最悪だった。」

などと聞いていたからである。

「あなたは自害した夫を本当に愛していましたか？」

サンチェスは問いた。

入ったものが言わせた。

「心から愛してました。」

「そうですか。」

サンチェスは諦めた。

しかし最後に良心を込めて、女に言った。

「自害した夫に感謝しなさい。」

また殺された義兄に感謝し、永劫に死ぬまで感謝し続けなさい。

富はあなたの物です。」

女は心で笑った。

女に入ったものは地上から天に向かって笑いかけた。

人間はこんなものだ

と天に向かって言った。

女は、転がり込んだ物々のおかげで、遊び墮落した。

心も身体も傲慢に膨れて行った。

使用人達は過酷な労働に泣いていた。

傲慢が、使用人達の「叫び」を遮断していた。

身体は贅沢で肥り、

ある日、とうとう、女はベッドに埋もれて動けなくなった。

贅沢で膨れた身体は、ベッドから身を起こす事も出来なくなったのだ。

女は仰向けのまま、天に向かって叫んだ。

「誰か助けて！」

当然、誰も助けには来なかった。

すると、突然突風が起こり、女のいる屋敷を吹き飛ばした。

そして光り輝くものが、天から現れた。

女はあまりの眩さに、目を開けていられなかった。

それはどのような形をしているのかすら、分からなかった。

光り輝くものが、女に言った。

「傲慢なる者

その元となるもので
清められなさい。」

というと、また突風が起きて、今度は飼っていた家畜の群れを宙に
浮かせた。

それから突風は、一頭づつ、女にめがけて落として行った。

肥えた家畜達が一頭づつ、起き上がれないほどに太った女の上に、
鈍い音を発てながら、落とされて行った。

女はその痛みに耐えられなかった。

「許して下さい。」

と叫んだ時、家畜達の落下は終わった。

突風は治まり、光の存在も無くなった。

すると、辺りが暗くなり、程なくして二人の男が現れた。

一人は別れた前夫の祐一である。

もう一人は祐一が幼い時に、死に別れた弟である。

祐一は繋いだ手を放し、弟を自由にした。

祐一は消えた。

弟はよちよち歩きで、女に近寄り、動けない変型した身体を粘土をこねるように再生して行った。

女はくすぐったい感覚を我慢しながら、再生を待った。

足が動かせるようになった。

すると弟は女の手を取り、地上に立たせた。

弟は女に微笑んだ。

女はやつと安堵感を覚えた。

そこに道が現れた。

二人は手を繋ぎながら、その道を歩いて行った。

ふと手の感覚が、子供のものから、大人の手に変わった。

女が横を確かめると、先程の裁判官のサンチェスが、凜として立っていた。

女はびっくりして、一度目を閉じた。

そして女が再度、横を見ると、誠に変っていた。

誠は笑みを女に投げた。

女はそれには応えなかった。

すると、道が急に途絶えた。

女だけが、誠の手をすり抜け、道筋が無くなり、落ちていった。

夢はそこで終わった。

真由美は虚脱感で目が覚めた。

神の摂理は、真由美の潜在意識に「傲慢の罪」を意識させた。

祐一の死んだ弟を、誠に蘇生させ、希望を失った男に対して、いかに愛せるか、という試練を与えた。

誠の霊は裁判官のサンチェスの蘇生である。

神はサンチェスの魂を一段上げるため、蘇生させた。

真由美の前世である、アンナの姦淫の罪は、死んだ妹を祐一に授け

る事で、すでに許されていた。

後、残る罪は、傲慢、である。

真由美が誠を愛することで、前世の罪は完全に許されるのだ。

神の「救いの身業」が真由美に入った。

真由美は会社に行く途中も、後味の悪い気持ちが支配していた。

何か重大な過ちを犯し続けている感じがしていた。

しかし会社に到着して、皆が社長である真由美に対して、気を使い、ピリピリしている。

真由美よりも歳が上の男達が鼻で動く。

若い男達は、真由美の美貌に見とれている。

若い女子達は、男を思い通りに操る技量に畏敬を感じている。

真由美はそう思っていた。

その様を見ると、それらの気持ちは、一瞬にして去って行った。

「私は無能じゃないわ。」

都心のビルの一、一流企業が並び、高階にあるオフィスから見える景色。

その都会の象徴の窓辺から空を見ながら、真由美は呟いた。

「私は社長よ！」

田中誠

誠は職が無くとも、日中、家に居る事はしなかった。

義理の娘であるリサが、小学校に行くのを見届けると、誠も家を出た。

妻の真由美は、仕事を理由に家を空ける事が多くなっていた。

誠が日中、新居を空ける理由は、もちろん周りの眼を気にしての事もあるのだが、それよりも新居のあの独特の臭いを嗅ぐのが辛かった。

新しい家族が出来て、心機一転、心を弾ませて購入した新居。

頭金は全て誠が払った。

全部の貯金を投入した。

前夫婦では子供が居なかったため、久しぶりに味合う家族団欒の楽しさ。

初めまして味合う子供との遊び。

そついう思い出たちが、新居の臭いの中に想念と連結し、条件反射のように浮かび上がるのだ。

全てが上手く行くと思っていた。

しかし半年後、誠は失業し、無一文になった。

真由美は自分の通帳を持っていた。

決して夫婦共有のものではなかった。

誠はアルバイトをしながら正業を探さざるをえなかった。

誠はハローワークに通い続けた。

誠にとって職は渴望するものであるが、本当に求めているものは、真由美の誠に対する愛の復活であった。

真由美は社長である。

誠はへたな職に就くわけにはいかなかった。

夫としての威厳を取り戻さなければならなかった。

真由美が納得する職に就きたかったが、この時代は不景気である。

誠は出口のない八方塞がりの境遇に、自己のふがいなさで押し潰されそうであった。

竹崎真一

その日もハローワークには、職を求める人々でいっぱいであった。

やっと求人情報を見れるパソコンが空いたのは、20分もしてからであった。

この場所にいる人達には笑顔がなかった。

皆、明日への生活に対して、不安を通り越えた恐怖心で、怯えているように誠には映った。

「僕だけでは無かった。」
と誠は安堵感を得た。

職員との相談は一時間待ちと表示されていた。

誠は求人企業の企業情報をプリントして、時間調整のため表に出た。

全く風が無い、晴天の空であった。

春の陽光が心地よく全ての物を照らしていた。

陽光をさえぎる場所の隅々までにも、それは明かりとしての恩恵を受けていた。

誠は近くの公園のベンチに座り、求人内容を確認していた。

誠は管理職募集の企業を探していた。

それもある程度は名の通った所を選んだ。

真由美が納得する企業じゃなくてはならなかったからだ。

突然そこへ、強い突風が起こった。

公園のブランコが、それに押されるようにギコツ、ギコツと音を立てて揺れた。

誠の手からプリントした、求人紙がすり抜けて行った。

それはゆっくりと舞い上がり、ゆっくりと落ちて行った。

誠はそれを取るために、小走りに落下する方面へ走った。

紙はスーッとある人物の手に収まった。

その人物は、駆け寄ってくる誠に笑みを返した。

風が治まった。

ギコー！

という音を出したブランコは、徐々に振幅を弱めて行き、そして何事も無かったかのように、音を消した。

その人の笑みは春風のように、爽やかであった。

誠よりも、十五くらい年上の、五十歳位の初老の男であった。

その男は、顔に満面の笑みを浮かべ誠を見た。

誠と目が合った。

誠はその笑顔のさわやかさに魅了された。

それと、離れた場所から男を見ると、とても大柄な人だと思った。

誠は丁重に礼を述べた。

「どうもすみません。」

「いえいえ、飛んで行かなくて良かったですね。」

誠は男の近くまでくる途中、何度も深々と頭を下げた。

男も帽子を取り、頭を下げて誠に挨拶を返した。

「はい、どうぞ。」

と笑顔で、紙を誠に渡した。

先程は大柄だと思ったこの男は、誠よりかなり身長は低く、中年にしては痩せていた。

誠自身が背が高いので、一般の男性の身長ではある。

帽子を取って会釈した頭は、髪の毛が頭の真ん中だけ無かった。

痩せてはいるが、腕は太く、顔と一緒に日焼けしていた。

「私もまだ、運動神経はありますね。」

と、誠に人差し指と親指で丸を作り、豪快に笑った。

誠はその豪快な笑いに、心が一瞬に明るくなった。

誠は忘れていた男としてのプライドが、この男を通して、蘇って来るのが分かった。

しばらくは不安な気持ちが忘れられる。
と誠は、男に心で感謝した。

「本当にありがとうございました。」

「失礼ですが、職安の資料ですか？」

「はい、お恥ずかしい話ですが、求職中でして。」

「なんの、全然恥ずかしくくないですよ。
今の社会は弱いものイジメをしますからね。
胸を張りましょう。」

誠は感激した。

ここ数ヶ月、このように励まされた事がなかったのである。

辞めた会社では、出世頭の誠を良く思っていない派閥の連中と同僚達が、社内だけでなく、取引先までにも、ねじ曲げたウワサを吹聴した。

退社の挨拶をしに言っても、お茶すら出ては来なかった。

家で、妻の真由美から

「もうあなたは終わりね。」

と言われた時には、男のプライドが崩れ落ちた。

誠はそれでも、自らの気持ちを奮い起たせていたのだが、そろそろ崩壊寸前であった。

誠は込み上げて来るものを、懸命にこらえた。

「まあ、立ち話もなんですから座りましょう。」

と男は言った次には公園のベンチの方向に歩き出していた。

動作が機敏で、無駄がない。

男はベンチの端に座ると、左手を振りながら誠を迎えた。

二人は、六月のそんなには強くない陽光の中で、しばらく沈黙した。

先程の突風が、うそのように風は再び沈黙し、公園の隅々に咲く花達が、その色彩を競演している。

小鳥達が、何物も攻めてくる物がない安堵感で、間隔を空けながら、穏やかに仲間達と鳴いている。

新緑からこぼれる木漏れ日。

元気に遊ぶ子供達の笑い声。

平安という自然の空間が、二人の周りに存在していた。

誠は名前を告げると、再度先程のお礼を言った。

男も誠に対して丁寧に自らを語った。

「私は竹崎真一と言います。

しがない中小の社長をしています。

田中さん、何処かいいい所が、見つかりそうですか？」

男はベンチの隅に置いたスーツの内ポケットから名刺を取り出すと、誠に渡した。

（株式会社）タケザキ

代表取締役、竹崎真一

と書かれていた。

誠も長い会社勤めの習慣から、名刺を取り出そうとしたが、今は失業中であることに我に帰り、また自らを卑下する気持ちに戻った。

「いやいや、いいんですよ、時期に立派な名刺が必ず出来るでしょうから。」

真一は微笑みながら、誠に言った。

誠は男の言葉で、また救われた。

「社長さんでございましたか。
失礼致しました。」

誠はこの男、竹崎から受けるオーラに、やはりただの人ではなかった、と納得して言った。

竹崎は穏やかな表情を作り、誠に言った。

「いやいや、社長といってもたいしたことはありません。
何か飲みましょう。」

コーヒーでよろしいかな？」

と誠の頷きを確認めると、竹崎は公園の入口にある自動販売機に向かって行った。

誠が小銭を取り出す暇も与えずに、俊敏に歩いて行った。

公園を颯爽と歩いて行く後ろ姿には、威厳があった。

陽光が竹崎の白いワイシャツに反射し、誠に眩しく反射していた。

竹崎は誠に缶コーヒーを渡すと、誠の今ある境遇について聞いてきた。

誠は何故か、この竹崎に対して”警戒心”という感情を持つことが無かった。

いや、それよりここ数ヶ月の、誠自身に降りかかった苦難を聞いてほしかった。

誰にも、気に止められず、聞かれる事すらなかった胸のうちを、吐き出したかった。

誠は一流商社に勤めていたこと、そこで派閥の罾によってリストラされたこと、妻のこと、妻と自分の立場、などを包み隠さず竹崎に伝えた。

その間、竹崎は始終、誠の目を見て、頷き、時に腕組みをしながら聞いた。

誠は、心の中にあつた鬱憤や不安などが、浄化され、心が晴れやかになって行くのを覚えた。

徐々に風が二人をかすかに触るように吹いてきた。

六月の草いきれの香りを含んださわやかな風は、強くなることはなく、一定の旋律で吹いて、彼方へと立ち去って行った。

陽光も徐々に、時間と共に強くなって来た。

「まあ、人には必ずと言っていい程、試練が来る。

誠さん、今がその時だと私は思いますよ。」

竹崎は笑顔で答えた。

何て澄んだ瞳なんだろう。

気持ち優しく包んで、吸い込ませる深海のような瞳。

誠はその言葉と瞳に、また救われた。

「あなたの妻が納得する仕事とは、具体的に何だと思いますか？」

竹崎は誠に聞いた。

誠は一瞬、答えに詰まった。

ストレートに伝えていいものだろうか？

誠は躊躇していた。

竹崎は誠の応えを分かっていた。

「奥さんの肩書に恥ずかしくない仕事とは？
何ですかね？」

それでは奥さんの人生だけに、荷担しているだけです。」

誠はハツとした。

ハンマーで頭を殴られた感じがした。

心の全体を覆っていた”不安””喪失””失望”といった”負の思考”が球体の中に入り込み、そして誠の意識の中で大きな音を伴って、破裂して行くのを覚えた。

「誠さん、全ては貴方の中にあります。」

この世の中では、決して神様が救いの手を差し延べる事はありません。

自らで解決しなければなりません。」

誠の心に何かが目覚めた。

落胆から昂揚する希望の光りが灯った。

「誠さん。」

面接は合格です。」

「はい？」

竹崎は、誠の肩に優しく手を置き、言った。

「井上祐一君は知っているね？」

「は、はい。」

「君が勤めていた時の、取引先の人間だね。」

誠は、突然竹崎の口から出てきた名前にびっくりした。

誠の妻である真由美の、別れた元夫であり、前職の会社での、取引先の会社の営業部長の名前である。

「はい、そうです。」

「祐一君が、田中誠という友達が失意の内にいるから、彼を助けて

くれ。

決してこの事は黙っててくれ。

彼は信じられる、俺の取引先の人間だから。
と言ってきた。

だから今日、君に会ったんだ。

祐一君は、私の大学の後輩だ。

ある日、私の会社に来て、面識もないのに、私に君の事を頼み込んだんだ。

名簿で調べたらしい。

私は同窓会の幹事だからね。

祐一君は僕と一回り違う。

勇気のある男だ。」

誠はその場所に崩れ落ちた。

そして大きな声を張り上げて泣いた。

その声は公園中に響き渡った。

遊びに夢中になっていた子供達も、遊びを止めて平伏して泣く誠を見守った。

竹崎は、嗚咽している誠の肩を、しばらくしてから、優しく抱き抱えてあげた。

「あなた達の関係は、私はそれ以上は知らないが、いい友達を持っただね。」

まるでお兄さんのように、心配していた。」

（後に分かる事だが、この出会いには、深いいきさつがあった事を、竹崎は誠には話さなかった。）

誠は心で祐一に詫びた。

「いうなれば奥さんを奪った形の俺なのに…
そんな俺の為に…」

そして誠は、この竹崎に、自分の人生の行く末を任せようと、その時「決心」した。

「誠君。」

竹崎はポンッと、誠の肩を叩いた。

「明日の午後一時に、私の名刺の住所に来なさい。」

「わ、わかりました。」

竹崎は、歩きだした。

そして突然、振り向くと誠に言った。

「君には浮浪者、ホームレスになってもらう。」

そう笑顔で言っていると、颯爽と去って行った。

誠は度肝を抜かれた。

つき動かされるもの

次の日、誠は市の中心から、電車で一時間ほど離れた駅に向かった。竹崎から指定された場所の最寄り駅である。

車で行かない理由は、電車の方が速いだろう、という予想と、その方が安上がりだと判断したからである。

誠は貧窮していた。

妻である真由美が、投げつけるように与える小遣いを出来るだけ使いたくなかった。

このまま行けば、竹崎から言われる前に、僕は浮浪者になるなど、下り電車の混み合った中で、やっと確保出来た吊り革を持ちながら考えていた。

主要駅でほとんどの人が降りていった。

電車は人がまばらになった。

ネクタイ族は皆無になり、それらしき女性もすかしながらいなくなった。

誠は車両の一番端の、三人掛けの隅に座った。

前には誰も座っていなかった。

電車の正面の車窓から、晩春の情景を、誠に与えた。

先ほどまでは、車窓からは、都会の無機質な造形色が覆っていたが、都会から離れるに連れ、自然の軟らかい、優しい顔を表して来た。

陽光が強く平地を照らしていた。

ビルの人工で塗りつくされた人間味のない色は無くなり、遠く緑の山々が、車窓の画面を、端から順に終わりなく、誠にパノラマのよう
に映し出して行く。

その手前には、稲穂が陽光に抱かれるように、凜として立っている
田園。

風は無く、電車の風圧がかかった稲穂だけ、順番にたなびき、また
毅然と立って行った。

川を渡る橋の下からは、キラキラと陽光が照り返しを誠に与えた。

誠は久しぶりに着たスーツの上着を脱ぎ、ネクタイを緩ませた。

（僕は何に、つき動かされているのだろうか。）

誠は自問した。

（確かに昨日は、奇妙な一日であった。

今の妻の前夫が、僕を心配して、ある男を紹介してくれた。

そして、その男が突然、昨日現れた。

そしてその男が、発した言葉の数々。

「面接は合格です。」

どのような会社かは、分からないが、その男の人物を観るに、そう悪い会社ではなさそうだ。」

（その時は、「この男に、自分の人生を任せてみよう」

と一瞬、思った。

しかし、

「君には浮浪者、ホームレスになってもらう。」
この言葉で、思考が混乱した。

そのような会社がある訳がない。）

しかしその時、確実に、誠が求めているものは、妻の体裁を繕うものであった。

会社を経営する妻の、そのパートナーに相応しい職業と肩書きを求めていた。

「奥さんの人生に負担していないかね？」

（竹崎真一の言葉で、僕は、自分の人生の使命という意味合いを、突き付けられたような気がする。）

真にやりたい事はなにか？)

電車は山の中腹に差し掛かると、稲穂達や、山々の木々を抱きしめるように、内側に旋回して行った。

植物達は、風圧で揺れ動いていた。

(「神様は助けてくれない。」

の言葉はすんなりと誠の心に入った。

その通りだ、神などいないのだから。)

竹崎真一が、笑顔の後に言った言葉。

「自分で解決しなければならぬ。」

当たり前の上に、誠はハツとした。

竹崎の俊敏な行動、仕草、言葉から発せられる気付きの言葉たち。

誠を導くように、竹崎真一は現れた。

昨日は、優しさに溢れたオーラが、誠を積極的な気持ちにした。

妙に竹崎真一の「神と浮浪者」という言葉の組み合わせが、誠には同意語に感じたのだ。

(とりあえず、行ってみよう。)

と昨晚、決心した。

誠は駅に降り立った。

ひと山越えた後にあるこの街は、四方を一面の田園風景で広げていた。

初夏の陽光が、青く規律よく延びた稲に降り注ぎ、地表から沸き上がる、灼熱の照り返しの熱風で、誠の回りを、塵気楼のように漂わせている。

その熱風の彼方に、町並みが揺れながら、存在していた。

誠は上着を肩に乗せながら、ゆつくりと、その塵気楼の幻影的な揺れる道を、ゆつくりと歩いて行った。

ファミリー

誠は汗を拭い、髪型を整えた。

大きな塀の壁が長く続き、その中央に株式会社 タケザキ と書かれた看板が建っていた。

大型トラックがゆくに2台は通れる門を誠は入って行った。

正面に工場が見える。

誠はその大きさに圧倒された。

工場前には大型トラックが五台停まっており、リフトでラッピングされたパレットを積んでいた。

敷地は、ちょっとした学校の運動場の広さはある。

その手前の右側に、レンガ模様の壁の、3階建ての綺麗な建物があつた。

「事務所」と書かれた看板が一階にあった。

誠は気後れする気持ちを振り払い、呼び鈴を押した。

ガラス越しに見える、下足箱の上には、豪華な花瓶に活けられた生花が、色鮮やかに四方に伸びていた。

すると、自動ドアが開き、一人の女性が現れた。

地味な紺色の事務服を着ているが、誠に放った笑顔が美しかった。

クリーム色の髪が腰まで伸びていて、華奢な身体ではあるが、ふくよかな胸、スラリと伸びた長い脚。

美人はこの世にはたくさんいる。

しかし、ここまで笑顔の美しさが、人の心を和ませる女性を、誠は知らなかった。

少しお腹が膨らんでいる。

妊婦と分かった。

（女性は身ごもると、ここまで優しくなれるんだ。）

誠は見とれてしまった。

女性は深々と笑顔を称え、お辞儀をすると、

「田中誠様ですね、当方の竹崎から伺っております。暑かったです、さあ、お入り下さい。」

誠は再びハンカチで汗を拭った。

たどり着いた安堵でいっぱいであった。

事務所内の来客用の椅子に案内された。

事務所内を伺うと、五人の男女が忙しく仕事をこなしている。

誠が腰掛けるとすぐに全員が、「こんにちは。」

と声をかけてくれた。

誠は今までに、多くの会社を訪問して来た。

しかしこの人達の笑顔に勝る企業を、誠は挙げることは出来なかった。

殺伐とした雰囲気がない。

全員が笑みを称え、各自が互いの仕事を手伝い、一つの関係するよ
うなチームワークで仕事をしていた。

ここに仕事をやらされているという、強制は無いように感じられた。

惰性や怠慢は見られなかった。

生きた職場とはこういうものだと思っただ。

それよりも竹崎という男の下に着くものは、こつも活かされるのだ
と、改めてその手腕に尊敬を抱いた。

先ほどの女性が冷たいお茶を運んでくれ、

「少々お待ち下さいね。」

というと、社長室に向かった。

ガラスのついたての奥が社長室で、女性が

「田中様がお見えです。」

と言った次には、

「おー、」

と社長室から飛び出すように現れた。

竹崎は誠に歩み寄りながら、

「場所は分かったか！待っていたよ、さあ。」

と手を取るなり、社長室へと連れていった。

連れていった、というより引きずっていったと言ったほうが当てはまっていた。

このテンポの速さに誠は好感を抱いた。
誠には無い行動力である。

好感は人間力としての魅力に変わり、憧れへと転化していった。

竹崎は社長室の真ん中にある応接テーブルのソファーに誠を促し、正面に座り、満面の笑みを浮かべた。

瞳の奥に、優しさが溢れた笑顔であった。

「早速、誠君の使命なんだけど…」

竹崎は（使命）という言葉を使った。

「ちょっと待って…」

竹崎は立ち上がると、

「アリサさん、冷たいのにして、あと冷えたオシボリもお願いします。」

と社長室のドアを開けたまま言った。

「はあい。」

と先ほどの女性が優しい口調で明るく返事をした。

この口調の裏側にあるほのぼのとした雰囲気からして、明るい職場であることが分かった。

すぐに冷たいお茶とオシボリが、先ほどの女性の手によって運ばれて来た。

「あつ、誠君、紹介しとくよ、こちらはあと三ヶ月だけだけど、受付を手伝ってくれている井上亜利沙さんだ。」

「初めまして、井上亜利沙です。」

頭を少し傾けながら笑顔で誠に深々と頭を下げた。

「ご覧の通り、あと三ヶ月で臨月に入る、それまでの間、

無理を言って手伝ってもらっているんだよ。

旦那さんを口説くのにも苦労したよ。」

竹崎は大声で笑った。

「誠君……」

竹崎は誠を直視すると、ニタツとした笑みを浮かべ、

「君を紹介した井上祐一君の奥さんだ。」

誠は気が動転した。

まさか、こんな事が…。

誠の妻の、前夫の再婚相手が、目の前に現れたのだ。

誠は運ばれてある、冷たいオシボリで顔から流れる汗を何度も拭いた。

しかし、竹崎は、その辺りの人間関係は知らない。

また亜利沙も、まさか目の前にいる男が、祐一の前妻の再婚相手などとは、夢にも思っではいなかった。

竹崎は、誠の驚きぶりを見逃さず、

「誠君、驚いただろう、井上祐一君が初めて訪ねて来た時に、亜利沙さんも同席していたんだ。」

その時に、身ごもっていて、会社を辞めたばかりだったんだけど、
うちは募集広告は出さないからね。

それで手薄な事務を手伝ってもらったことにしたんだ。」

誠は平静を装ったつもりだったが、この竹崎の洞察力に、どこまで
平静を装えたか分からなかった。

また本当の事をこの際、伝えようとも思ったが、亜利沙の祐一との

繋がり深さを考えると、今日は告げないほうが良いと判断した。

「誠君、それとレディーの前でオシボリで顔を拭くのは、いかんよ。オジサンぽいって嫌われるから、なあ、亜利沙さん。」

「
いうと体をのけ反らせて、大声を上げて笑った。」

亜利沙は、

「いえいえ、男性の汗は、女性にしてみればすごくセクシーですよ。」
と二人に笑みを与えながら退出した。

二人は再び対座した。

数秒の時間が流れた。

竹崎は目線を天井に向け、しばらくした後、ピタンっと両手でひざを叩いて、

「とりあえず、会社を案内しよう。
僕について来なさい。」

と言っている最中には席を立ち、誠を外へと促した。

事務所から出て、奥にある工場内に誠は案内された。

手前側の開閉式のドアの前には、「調理室」
と書かれた標札があった。

誠は歩きながら、一回深呼吸をして心を落ち着かせた。

その工場の回りには、モルタル造りの垣根が囲んでいた。

垣根の中には晩春を彩る花々が、整然と花色ごとに咲き乱れていた。

誠の嗅覚に花々の優しい香りが心を和ませた。

花々の一本一本が、陽光の中で、一段と鮮やかに凛とした生命力を育んでいた。

誠は、その花々が、この中で働いている人々の象徴であるような気がしていた。

空には雲一つない晴天であった。

ドアを開け、中に入ると、ガラスケースで仕切られた棚が、数段に分かれていた。

その棚の列には、一列に密封式の寸胴鍋が並べられていた。

それらの寸胴鍋には、近郊の地域が書かれてあった。

その奥に、開閉式の扉があり、手前に消毒液とマスク、あと衛星帽が置いてあった。

二人は入れる準備をすると、戸を開けた。

そこは調理場であつた。

白衣を来た男女が十人ほど、忙しく仕込みの準備に追われていた。

皆、四十歳は超えている年配の人達で構成されていた。

竹崎に気づいた一人が、

「あつ、社長、おはようございます。」

と大声で言つた。

すると全員が竹崎に向かい、

「社長、おはようございます。」

と、手を休め、一人一人が竹崎に対して握手を求めて来た。

「おう、今日も美味しそうな香りがしますね。」

と竹崎が言つと、とうに七十歳は超えていそうな、調理場で一番年配者であるう、痩せて腰の少し曲がつた男が、すぐに合いの手を入れた。

「社長、任せて下さいよ、それよりも我々の仲間を一人残らず連れて来て下さいよ。」

竹崎は親指と人差し指で丸を作り、

「了解。

それで今日は早速、我々の仲間を連れてきたんだ。
紹介するよ、田中誠さんだ。」

誠は困惑した。

ある程度は心は固まりつつあったが、まだ正式にここで働くとは決めている。

雇用関係の具体的説明もまだされてはいないではないか。

ただ自分がここに居るのは、竹崎真一という男に魅力を感じたことと、竹崎が言った言葉に、その答えがどういうものか確認するためであった。

特に（浮浪者）の意味は何なのか、ということが一番聞きたかったことであった。

竹崎が誠を紹介した後、調理場の皆がお互い顔を見合わせ、誠に言った。

「誠っちゃん、あんたスーツ買うのに前借りしたんかい？無理しなくていいんだよ。」

ここでは着れば何でもいいんだからね。」

年配の男がそう言うと、誠のところに歩み寄って来て、握手を求めた。

「これも何かの縁だね、誠っちゃん、お互い頑張ろう。」

調理場の全員が歩みより、それぞれ名前を告げ、握手を交わした。

誠は思った。

この現場にも生き生きさを感じる。

竹崎という男から発せられるオーラが全てに生氣を与えているのだ。

今、皆と挨拶を交わしている最中でも、竹崎はニコニコと微笑んでいるだけだが、常に竹崎の身体からは光る輝きが出ているようである。

「皆、田中誠さんは（一般）なんだ、私に代わってスカウトで活躍してもらおうと思うんだ。」

「なに、（一般）かい！」

先程まで天ぷらを揚げていた、六十歳位の妙に顔が赤い小肥りで背が低い女が言った。

一同、一瞬困惑の表情になったが、すぐに歓喜の表情へと移り、納得するように相槌を打った。

「それは良いわ、今は六月だから、社長がいつも言われる通り、寒くなる十一月までが勝負だからね。
誠ちゃん、頑張ってや。」

と長老がいうと、それにつられるように、

「誠さん、頑張って下さい。」

と合唱のように調理場内に響き渡った。

ここにも、やらされているという義務が感じられない。

誠は、今までの見てきた多くの企業と比較して、ここまでの理想郷としての、従業員の意思疎通とやる気が、確立している会社を見た

ことがなかった。

（彼らが手抜きを決してすることのない、顧客のターゲットはどのような層なんだろうか。）

誠は考えていた。

あと、

「竹崎は自分の事を（一般）と呼んだが、その意味はなんだろうか。」

竹崎は誠の肩を軽く叩きながら、外へと促した。

竹崎が片手を上げて、調理場から出ると、

長老が、

「さあ、みんな頑張るべ。」

と言うと、皆一同に、

「あいよ。」

と返事が返って来るのが、調理場を出ながら誠の耳に聞こえて来た。

誠は一種の高揚感をその言葉から与えられた。

誠は感動した。

調理場の外は、長い渡り廊下になっていた。

その向こうには、また大きく仕切られた工場の一画があった。

長い渡り廊下が終わりに近づくにしたがって、流れ作業にありそうな機械音が、リズムカルに徐々に大きく聞こえて来た。

扉を開けると、それぞれの機械から聞こえる音は、各々の工程に合った響音を交えて、誠の身体を震わせた。

工場は二階建てになっており、竹崎は脇の階段から2階の事務室に誠を案内した。

中には十個ほどのデスクが並べてあったが、誰もいなかった。

しかし、その事務室の奥にガラス張りで隔てられたオフィスがあり、二十人ほどの若い男女が、電話応答に忙しく応えていた。

観ると電話は引っぱりなしに掛かって来ているようだ。

しかし、ここの人達も、嫌な表情や惰性の心情がないように見て取れた。

竹崎は気付かれないように、前方にあるガラス壁に、誠を誘導した。ここから工場全体が眺められた。

「誠君、どうかね、このような工場が今全国で四つある。

今度、東北にもう一つ作ろうと思っている。」

「社長、一体なんの工場なんですか？」

観察すると、六つの工程で製品完成が成り立っている。

竹崎は誠に説明した。

まず二階から二カ所、ベルトコンベアで一つは小さい植木鉢、もう一つはサボテンと盆栽が運ばれる。

それぞれのコンベアは交差する機械の中で、鉢の中にサボテンと盆栽が綺麗に植えられて、手前側のコンベアに乗せられる。

そこで数人が検品作業をする。

すると綺麗に植えられた鉢達は、別の機械の中に運ばれて、鉢の回りにアクリル製のポシエットみたいなものを貼付けられ、コンベアで流れた先には白い封筒を収める人達が、素早くそのアクリルのポシエットの中に入れていく。

また検品があり、また機械の中に運ばれて、また検品。

最後にアクリルの真ん中に取り付けられたボタンからは曲が流れ、それを確認して、あとはパレットに重ねての出荷作業という工程である。

竹崎が誠に説明する表情には、常に製品を慈しむ表情があり、かつその持ち場を任せている従業員への感謝の気持ちこそを事細かに説明した。

「それで、あの封筒に送る人への想いを書いてもらうんだ。完全防水だから手紙は濡れないんだ。」

竹崎は誠に目をやると、微笑んで続けた。

「そしてタイマーがセットされていて、

送る人は手紙を開けてもらいたい日時を指定出来るんだ。
サボテンと盆栽は寿命が長いからね。」

誠は夢物語を聞かされている感覚であつた。

手紙を添えたプレゼントは、どこにもあるが、読んでもらえる日を
指定出来るなんていう話は聞いたことがなかった。

「夢の商品ですね。」

誠は率直な感想を述べた。

「そうだろう。」

ニコツと笑つと誠の肩を優しく叩いた。

休憩の時間を知らせるチャイムが鳴った。

「皆に紹介するよ、さあ。」

というで一階に誠を導いた。

先程の調理場のスタッフは、比較的年配の男女構成であつた。

しかしこの工場内は、下は十代と思える男女から、上は六十を明らかに超えているだろう男女が、均等に配置されていた。

総勢七、八十人はいた。

やはりここでも、人間の心の奥底にある、性悪なものや、邪悪なものを感じられない。

観ると、数分の休憩の終わりを告げるチャイムの時間まで、お互い同士、言葉を掛け合い励ましあっていた。

竹崎がチャイムと同時に、マイクを握ると、社長の存在に気づいた全員が、

「あつ、社長！」

と、皆まるで父親か兄弟を見るように注目した。

竹崎は先程、調理場で話したように、誠を紹介した。

やはり誠は（一般）であつた。

そして（スカウト）で拍手が起きた。

この会社は夢が、従業員を動かしていると誠は確信した。

「ここにあるかも知れない。」

と誠の心に直感が走った。

「善を持つて成せということ…?」

と内なる何かが、誠に言添えた。

「この職場の希望は…本物だ。」

誠の直感に確信が入った。

「使命とは……？」

竹崎が言った言葉が心を支配した。

「やらねば……！」

心が固まった。

従業員達の拍手は鳴り止まなかった。

カリスマ

竹崎と誠は社長室に戻った。

その日、その年初めての冷房が稼動された。

六月の陽光は灼熱のたぎる時間を超え、徐々に優しさを包む姿に変えつつあった。

テーブルに対座する二人に、窓の陽避けのブラインドの隙間から、陽光は斜めに侵入し、中央にあるテーブルまで忍び込んでいた。

「誠君、まあ、ざつとではあるがこれがタケザキという会社の一部だ。」

竹崎は置かれた冷たいウーロン茶を飲み込むと、背中をソファーに寄りかけながら、誠に微笑んだ。

「この他に植物の農園が、全国で十五箇所、
今、見てもらった製品工場が、北海道、関東、近畿、九州と四箇所。

それで今度、東北に新たに製品工場を作る計画なんだ。」

竹崎はゼスチャーを交えて、まるで子供のような高揚ある抑揚した声で話す。

「あとは運送部門、調理部門がある。

本社は東京の銀座だ。」

というと自らのデスクの上に置かれた、小さい箱を誠に持って来た。

「君が来たらすぐに作ってくれ、と事務さんに作らせたものだ。すぐに使って構わない。」

竹崎はその箱を誠の目の前に置いた。

「行く行くは、この名刺が役立つ時が来るだろう。」

名刺を開けると、こう書かれてあった。

株式会社 サコース

会長秘書室

マネージャー

田中 誠

誠は最初、この名刺の意味を理解できなかった。

株式会社 サコースは、誠の前会社などではとても相手してくれるな
い急成長を遂げている会社である。

一部上場企業で常にプラスチックマーケティング部門では、利益率
が日本でトップの会社である。

会長？秘書室？

頭が混乱した。

「誠君、このタケザキ以外にもう一つ私は会社を持っているのだ。」

竹崎はゆつくりと、作業服の内ポケットから名刺入れを取り出して、誠の名刺を渡した。

それにはこう書いてあった。

株式会社 サコーズ

代表取締役会長

竹崎 真一

誠は竹崎を見つめた。

昨日から誠の運命は激動しだした。

それはあの公園で、竹崎と会ってからである。

誠に記憶が蘇った。

誠は腰が砕けそうになるほど、驚愕した。

あのカリスマの企業のトップが、目の前にいるのだ。

激動を与えられた誠の心の許容範囲を、竹崎という男が超えさせた。

誠は身体が震えるのを懸命にこらえた。

サコーズの現社長は、三島一馬という五十八の初老の男である。

その社長交代は突然であった。

五年前、当時四十五歳であった社長の竹崎真一は、自らが育てあげた、サコーズの一部上場を機会に、社長を退くと宣言した。

当時、サコーズはプラスチック加工業で、世界規準の特許権を次々と取得し、世界からも注文が殺到するという昇竜の企業の、突然の社長交代である。

経済界はもちろん、多くのマスコミの注目的となった。

当時、専務取締役であった実弟の竹崎洋二が、エスカレーター式に社長就任となると、誰もが思っていた。

しかし竹崎は、三島一馬という中途入社、取締役としては末席の営業所長を、十人抜きで抜擢した。社長退任の記者会見から、わずか三日後の早業であった。

その時の日本は、ある意味で何も変わりのない平凡な日常が続く、考えれば至上の幸せが続く日々であった。

話題のないマスコミは、この交代劇に飛びついた。

新社長の初老の三島一馬を、苦労人の遅咲きのシンデレラボーイと崇めた。

返す刀の矛先として、崇拜の慰め役としてマスコミは、有りもしない、骨肉の争いと表題した、実弟の竹崎洋二を登場させた。

後の良識ある論調によると、新社長発表までの三日間は、信頼する弟を納得させるため、兄は涙で説明し、納得させたという。

もちろん、断り続けた三島に対しても、一緒の事をした。

現在は、専務取締役である竹崎洋二は、社長の三島一馬を助け、二人三脚でその業績は年を重ねる毎に上向いている。

気に入らないのは、飛び越えられた取締役たちである。

しかし、社長の竹崎真一は臨時取締役会議で言い放った。

「この人事に不満の方は、1時間以内に辞表を提出して下さい。」

社長の言は鋭かった。

顔は普段の穏便から、鬼の血相だったという。

一同はその迫力に愛想笑いを浮かべるしか無かった。

就任会見は、さらに圧巻であった。

経団連会館で行われた会見は、関係省庁、並びに各マスコミが整えたテーブルに、真ん中に新会長の竹崎真一、右に新社長の三島一馬、左には専務取締役の実弟である竹崎洋二が座った。

新会長の竹崎真一は、始終笑顔は見せなかった。

不機嫌に下を見つめていた。

会見は新社長の三島一馬が仕切った。

昨日までとは全く違う世界に放り込まれた環境の中で、新社長は理想とビジョンを、皆にわかりやすく、かつ、意地悪な質問にも丁寧に応えた。

会見が終盤に差し迫り、マスコミは会長に対して、最もこの人に対して、聞きづらい質問をしなければならぬ時が迫っていた。皆、竹崎真一の迫力に押され、中々質問出来ないでいた。

とうとう、一人の若い経済誌関係の男が、勇気を絞って言った。

「お聞き難い質問ですが、新会長にお尋ねいたします。」

会場は息を呑んだ。

「普通は同族であります専務取締役の竹崎洋二さんを、新社長と考えると思うのですが、それをあえて今回の人事に踏み込んだ理由はどこあたりにあったのでしょうか？」

カメラのフラッシュ音がこの時、一斉に集中した。

その言葉を受けた新会長は、今まで下に向けていた顔を上げた。

睨みつけるように、鋭い眼光がその記者に注がれた。

記者たちは、そのオーラに一瞬身を引いた。

その一瞬の、睨んだ写真をマスコミは後に好んでメディアに使った。

新会長は、ゆっくりと立ち上がると、報道陣を睨みつけた。

そして、ゆっくり睨みつけたまま、テーブルに両手を着けて言った。

シャッターは更に、連続撮影でフラッシュを切っていた。

「君達の常識はそんなものかね？」

竹崎真一は、記者たちを、ゆっくりと右から左に睨みつけた。

シャッター音は止まり、皆その表情にたじろいだ。

その時、初めて竹崎真一は笑みを浮かべ、大声で笑った後、説き聞かせるように言った。

「何の事はない、簡単な事です。」

竹崎真一はもう一度、記者たちを見回した。

そして隣に座している、実弟の専務取締役の竹崎洋二に眼を向けて言った。

「弟はまだ若い、経験がまだ足りない。」

竹崎真一は反対に座す新社長の三島一馬を見て、

「その点、新社長の三島さんは苦勞を重ねた思いやりの人物である。

対人に対しての気配りが出来る人である。

私はそういう人に社長になってもらいたいだだけだ。
以上。」

簡潔な応えであった。

記者たちは何も返す言葉が出なかった。

その場で壇上の三人は、固い握手を交わした。

各自とも、表情が柔軟になった。

会場は拍手喝采に包まれた。

シャッター音が、その中に凄まじい光と共にたかれた。

「これで会見はよろしいかな？」

新会長の竹崎真一が言った。

「会長、最後に一言お願いします。」

一人の記者が言った。

「おいおい、まだあるのかよ、執こいね。」

おどけるように新会長が言つと、壇上の三人はもちろん、会場全体が声を上げて笑った。

それまで会場の空気は、張り詰めた冷気が漂う、暗雲漂う冬空のようであったが、竹崎のこの一言で、一瞬に夏の晴天の青空の下に導きだされたような雰囲気になった。

竹崎真一は、そのようなオーラを持っていた。

「すみません。」

会長は退任された後のスタンスは、経営には一切係わらないとの事ですが、何か別の事をお考えですか？」

「君、嫌な事を聞くね。」

竹崎真一は笑って応えた。

会場はまた笑いが溢れた。

「新社長と専務にお願いして、系列会社を作ってもらうよ。」

「えっ！」

記者たちは再び沸き返った。

竹崎はそれを制止するように、

「いやいや、すぐにではないよ。」

皆さんが困った時に出てきますから。」

竹崎真一は笑って言った。

「では、これにて。新サコースをよろしくお願いします。」

と言って会見は終了した。

誠はその事を思い出した。

新聞や雑誌で、凜とした凄みで写っていた写真を思い出した。

そして目の前に、その時の凄みなどまるでない、柔和な竹崎真一がいるのである。

誠は、動揺する心を振り払うように立ち上がった。

「サコーズの会長様とは知らず、大変失礼致しました。」
と言って深々と頭を下げた。

数秒の後に、誠は恐る恐る、頭を上げた。

すると竹崎はポカンとした表情をしていた。

そこには凜として睨みを効かせた、写真のような男の姿は無く、中年の作業服を着た、どこにでもいそうな気の良い工員が、不思議そうに誠を見ていた。

「へえ、誠君、サコーズっていう会社、知ってんの？」

誠は真面目である。

多少の冗談と演技で逆に、誠の気持ちを落ち着かせてあげようとした竹崎の演技であつたが、誠はその、誰でも答えられるであろう質問に、バカ正直に応えた。

「会長、何をおっしゃるんですか。
少なくともビジネスマンで、サコーズを知らない者はいません。」

最近はオリジナルのキャラクターがコマースシャルで人気を博しております。小学生でも知っております。」

「へえ、そうなの？」

バカな前社長が居なくなってから、そんな事もやっているんだ。」

竹崎は身体を揺すりながら、大声で笑った。

「…会長、決してそんなことは…」

「誠君、光が眩しいね、ちょっと待って。」

竹崎は立ち上がると、窓辺の方向に向かいながら言った。

「へえ、僕よりも詳しいね。」

「いえ、会長の前だから言う訳ではありませんが、サコーズが日本より海外で評価されていることが特に特出される所だと思います。」

竹崎はゆっくりとブラインドを上げながら笑顔で応えた。

誠は続けた。

「まず、一般的にはアメリカ始め、ヨーロッパ各国の先進国と取引しようとするのが通例です。」

しかしサコーズは違いました。

東南アジア、アフリカの途上国を重点的に取り引きを始めました。

僕はその気概だけでもすごいと思いました。」

竹崎はブラインドを半分まで上げた。

そして誠の方を振り返って、

「ほう、最高のお褒めの言葉、ありがとう。」

竹崎は大きく一礼した。

そして大声を出して笑った。

そこには確信という喜びが入った分、普段の笑い声よりも大きかった。

（この男は出来る！

核心を突いている。

考えてみれば何百人もいるどの社員も、先進国との事ばかりを私に進言して、途上国の事はおざなりにした態度であった。

先進国など、私が行かなくても勝手に生き延びる。

しかし、企業としてもそうだが、人として心を傾注しなければいけないのは、弱い立場の人々を手助けすることなのだ。

これで二人目だな、途上国に着目した男は。）

竹崎は心の中で、計画の半分が達成したと思った。

欠点は真面目すぎることだが、これは毎日のミーティングでなんとなかなる！

竹崎は結果の模様を頭に描いた。

ちなみにそのもう一人の、途上国に着目した男とは、サコーズの現社長である三浦一馬である。

決断

「まあ、誠君、座つて。」

竹崎は、窓から見える景色を眺めながら言った。

会社の敷地には、芝生が広がり、その真ん中に、青々と繁った葉を持つ大木が、一列に、一定の間隔を保って、並んでいた。

陽光が部屋一面に入り込んでいた。

誠の視界から見える竹崎を、陽光はすっぽりと入るように照らしていた。

竹崎の全身が、陽光の輪の中に入っていた。

その輪は、得体の知れない、尊厳なものに誠は感じた。

それは、見てはいけない封印された絵画、とでもいうような尊厳なものようであった。

長い竹崎の影が、座った誠を覆い隠していた。

竹崎はブラインドを下ろした。

陽光が遮られた瞬間、竹崎の皮膚から放たれていた光りの蒸気も遮断され、輪郭が元に戻された。

誠は、夢を見ている感覚から覚醒した。

竹崎は席に着くと、誠に尋ねた。

「誠くん、先程うちの従業員を紹介しましたが、あの人達の前職は、何だと思いますか？」

「前職ですか？」

「そうです。」

誠は意表をつかれた。

考えてもいなかった質問である。

誠は”試されているのか”と不安になった。

先程の人達の顔を思い浮かべてみた。

まず全員が優しい。

そして仕事に対して皆、一生懸命である。

ということは（愛社精神）が、他社が真似できないレベルにある。それと竹崎は

「うちは募集広告はかけない。」

と先程言っていた。

これにより、サコーズから回って来た人達であることは分かった。

しかし、一律に（前職）と聞かれても分かるはずなかった。

誠は答えを導くヒントを探したが、その解答を引き寄せる、みち糸すら見出だせなかった。

明確な答えを捜せば捜すほど、糸の先端の点すら逃げて行った。

「誠君、意地悪な質問だったね。すまん。」

というと、体を前のめりにして、誠に近づいた。

「誠君、私はあの人達を尊敬しています。もちろん愛しています。」

「は、はい。」

誠は答える義務が無くなったことに、安堵した。

「あの人達の、前の姿になる経緯は人それぞれです。」

竹崎は誠の目を凝視して言った。

その目が、凝縮された哀れみに変わった。

「倒産した中小企業の経営者、無念にも借金を背負った人、最愛の方を亡くして精神的に参った方など。

人生の経緯の中で、そうなった過程は様々です。

また、今の世の中、誰でもそうなる可能性を秘めている。」

突然、窓の外の大木の枝の繁みから、鳥たちがバタバタと飛び立ってこちらに向かってきた。

そして鳥達の影達は、竹崎の背中に吸い込まれてから、まるで彗星のように一団となって、昇天して行った。

「誠君、あの人達は…」

「はい。」

「全員、無職。」

「…はい？」

「全員、浮浪者だったんだ。」

「…浮浪者！」

「ホームレスだよ。」

…なんという事が。

誠はもう一度、先程の人達の顔を記憶の中に呼び出した。

（俺は甘ちゃんだ。まだ住む家があるうちから、心が砕けている。調理場の長老の曲がつた腰には、どれだけの壮絶な人生があったろうか！

揚げ場の小肥りのおばさんの赤ら顔に、想像もつかない秘密があるのだろうに！）

誠は恥ずかしくなった。

しかし、それはすぐに消えた。

その代わりに、身体の芯から熱いものが湧きだし、体内に何かが充滿したのを覚えた。

それは使命感であった。

「驚いたかな？」

「…はい、正直、驚きました。」

「嫌になったかね？」

竹崎は悲しい表情を作った。

「いえ、逆です。」

誠の返事には数秒の間も無かった。

その応えの後、竹崎の目が潤んでいく時間は、秒単位に深くなって行った。

「だから僕は”一般”なんですネ」

「ははは、そうなんだ、誠君と亜利沙さんが”一般”だ。」

「で僕がホームレスの人をスカウトするんですね。」

「やってくれるか？」

「もちろんです。」

「これは仕事というより、人間の使命感に近いものがあるから、苦しいよ。」

「腹は決まりました。」

「まだ誰も歩んだ事の無い道だよ、マニュアルなんて物は無いんだよ。」

「大丈夫です。」

「彼等の中に入るから、ホームレスになってもらうよ。」

「会長、すでに僕の心はホームレスですから。」

「おう、そうか！」

二人は笑った。

徐々にそれは大きくなった。

社長室の外からも、クスクスと押し殺したような笑い声が聞こえた。

二人は立ち上がり、握手を交わした。

竹崎は強く握り絞めた。

誠もそれに応えた。

竹崎は誠の両肩に手をやり、言った。

「愛を持って助けよう。」

「はい。」

誠は力強く応えた。

陽光が二人を祝福するように、影を一つのものとしていた。

二人はすぐに打ち合わせに入った。

「誠君、マニュアルは無い。

だから君が作って行く訳だ。

じゃ、私の意向をこれから話す。」

竹崎の表情は険しくなり、気のいい工員から経営者の顔へと変貌した。

妥協という脆弱な温室の果実ではなく、自然の風雪の産物である流水のように、厳しい表情であった。

竹崎は誠の前に、すでに竹崎本人が作っていた計画書を出して説明した。

「まず、世間が見捨てた人々に再起の機会を与える。

動機は政治屋が動かなければ、我々民間が動く。

ちなみに私は政治家とは、あいつらの事を言わないから承知してくれたまえ。

コンセプトは、”愛を持って人を救う”だ。

次に第一スカウト期間を12月までとする。

要は冬までに生きる意思がある人達を全員救う事、家の無い人々がどうやって厳しい冬を生き延びられるかね？

竹崎は時々、計画書の紙面には無い、本人の感情も話しながら、進

めて行つた。

次にスカウト条件は基本、誠君に一任するが、私の意向は”生きる意思のあるもの”。

誠君は銀座のサコーズの本社に出社して、調理部が作った弁当をホームレスの人達に届け、本社に専用室を設けるから、毎日私に連絡すること。

すでに向こうの役員には連絡済みだ。

当座の資金として、明日、二千万円振り込む。

半分、給料とし、残りはスカウトの資金として使ってくれ。

第二期は、また別に振り込む。
以上。」

「まあ、こんなものかな？」

表情が元に戻り、誠を見つめて微笑んだ。

「会長、報酬は一千万ですか！」

「ダメか？」

第一期がそれだから、二期分も含めると二千万だが……
少ないかね？」

誠は恐縮した。

「いや、あまりに多いので驚きました。」

竹崎は大声を上げて笑った。

「ろくな仕事もしない政治屋たちが、いくらもらっていると思うんだい！それに比べたら安いもんだ！もちろん昇給はして行くよ。君は馬鹿正直だな！」

と言うと、先程以上の厳しい顔で、

「これは仕事を超越した”使命”なんだ。

君は、もうすぐ人々から”こじき”扱いされる。

また夏は酷暑の中、冬は吹雪の中、彼等の生活の中に入らねばならない。

どこに愛する社員を、そのような地獄の中に放り出す馬鹿社長がいるかね？」

竹崎は誠の肩を優しく叩くと、自らの肩を震わせ、号泣した。

徐々に陽光は赤く染まりかけていて、二人を優しく染めていた。

誠はこの人のためという、二つ目の使命感を心に強く刻んだ。

誠ももちろん号泣した。

その後、ミーティングは夕方の日の暮れる寸前まで続いた。

晩春の、晴天の地平線はその姿を赤く染めて、対岸に位置する空面は薄青く、徐々に星座を煌めかせつつあった。

二人のいる室には、落日の熟成された陽光が、華麗に充満しており、熟考の会話の余韻に相まって、二人の頬を赤くメーキングしていた。

「じゃ、明日からスタートしよう。」

「承知致しました。」

再度、二人は握手した。

メーキングされた頬に、安堵の微笑みが加わった。

「ところで誠君、明日から当分、家を空けることになるが、奥さんはいいいとして、子供さんは大丈夫か？」

「大丈夫です。」

妻は社長で、十分に余裕はあります。」

「そうか、今日はたつぷりと娘さん孝行をしなきゃね。」

「ありがとうございます。」

竹崎はデスクに置かれた封筒の束を持って来て言った。

「誠君、この封筒は今日届いた、お客様からのものだ。」

だいたい一日に三十から多い時には百通も来るときもある。

中にはクレームもあるが、ほとんどがお礼の手紙だ。

コピーするから読んどいてくれたまえ。読めば総てが分かるよ。」

「わかりました。」

誠が竹崎と固い握手をして、会社を出たときには、日が暮れかかり、夜の闇はまだ未熟であった。

竹崎の計らいで、タクシーで帰った。

その頃には、空には、きらめく夏の星座が鮮やかに輝き、闇は成熟へと向かっていた。

団欒

家に着くと、妻である真由美とリサが、食事を取っていた。

前もって、面接で遅くなるということを、誠は真由美に伝えていた。

（今日は家にいてくれという、了解であった。）

真由美は名目は社長であるが、今では決定前までの仕事は全部、部下が遂行していた。

真由美は企画の提案と、それらを決定する印鑑を押すだけであった。

よって真由美は気ままに、一人旅をしたりして家を空ける事もしばしばであった。

誠がいなくなった後、リサの面倒をみる時間は、いつでも作れるのだ。

テレビの音しかしないダイニングを開けると、リサは誠の顔を見るなり、駆け寄って来て、抱き着いて来た。

「お帰り、おじさん！」

「ただいま、リサちゃん。

今日はおじさん、お迎え出来なくてごめんね。」

誠は、頭を撫でながら言った。

「うん、大丈夫だったよ、今日はママが、お家にいてくれたの！」

真由美は振り向きもせずに、箸を口に運んでいた。

「そこにあなたの分がありますから、よそつて食べてください。それと今月分のお小遣い、靴箱の上に置いときますから。」

真由美は食べかけの茶碗を流しに持って行き、リビングを後にしようとした。

この間、誠を見ることは無かった。

「仕事が決まったよ。」

今から出張に行く、帰りは何ヶ月後になるか分からない、リサを頼む。」

誠は背中越しに真由美に言うと、リサを席に戻し、

「おじさんはしばらく帰れないけど、お利口さんになっているんだよ。」

とリサに言うと、口をへの字にして、

「早く帰って来てね。」

としたを向いて悲しい表情をした。

真由美はドアに掛かった手を離し、腕組みをしながら振り向き、誠を見て言った。

「会社の名前は？肩書きは？」

矢継ぎ早に質問した。

もし俺が、一流企業の会長室のマネージャーとでも言ったら、この

女はどのようなアクションを興すのだろうか？

「タケザキという小さな会社の人事担当だ、役職はない。」

真由美は呆れたように下を向いて、そして深いため息を一つついた。

数秒たって、顔を上げて言った。

「お給料の事は聞かないわ…」

まあ、頑張ってください。」

と言うと、ドアを大きな音を立てて、出て行った。

誠は考えた。

真由美は誰が見ても美人である。

そのふくよかな体には、女としての妖艶なフェロモンが常に排出されているように、いつ会っても油断を許さない”備えられた美”がある。

顔が小さく、等身に換算すれば八以上はあり、その彫りの深い目鼻立ちから、エキゾチックな雰囲気を漂わせる。

しかし、今日会った、調理場の小肥りの女性の”赤ら顔”とどちらが魅力的な人間か、と尋ねられたとしたら、今は迷わずに後者であると、自信を持って答えられた。

誠は、今日の経験だけで、物事を心眼で見る事を会得していた。

誠は、リサと一緒に食事をし、風呂に入った。

そして一緒に話し、ゲームで遊んだ。

一緒に考え、そしてたくさん笑った。

時間はあっという間に過ぎ、リサをベッドに寝かせた。

誠はリサの寝顔を眺め、将来に祈った。

「心ある女性になるんだよ。」

誠はバックに詰められるだけの下着と、竹崎からもらった資料だけ詰め込んで、ジーンズと長袖のワイシャツ、それと白いテニス帽子を被って家を出た。

闇は成熟しており、日中の陽光の熱は、人々が快適にある分だけ残し、天上へと帰っていた。

天は、夏の星座が支配していた。

それは駅まで向かう誠の足元を、街灯と共に照らしていた。

道すがら、窓辺の向こうから、親子、夫婦の会話や笑い声が聞こえて来る。

それは、窓から洩れる明かりの数だけ聞こえて来た。

誠は駅の前で、深く深呼吸をした。

晩春の凜とした空気が体中に、また心全体に染み渡った。

誠は自らに語りかけるように、心の中で呟いた。

「私に与えられた使命だ。」

手紙、一

その夜、誠は都心近くの下町の安いビジネスホテルに宿を取った。

部屋は和室になっており、入ると四畳半の畳みの真ん中に、布団がすでに敷かれてあった。

誠は全裸になった。

毛布を剥ぎ取り、身体に巻き付けてみた。

「しばらくは、この感触ともサヨナラだな。」

慈しむように、頬で感触を確かめた。

日に干された、陽光の残り香の臭いがした。

それは、生まれた時から嗅ぎつづけた臭いであり、どの人生のステージに於いても、自然から与えられ続けた温もりであった。

「当たり前の中に入っている、自然からの贈り物。」

切羽詰まらなければ分からない、自然かの賜物。

誠は思った。

死ぬ前に嗅ぎたい臭いは？
と聞かれたら、なんの躊躇もなく

「日に干された布団の臭い。」

と答えるだろうと。

確信した。

誠は竹崎から渡された、お客からの手紙のコピーを、鞆から取り出した。

最初は布団の臭いと共に、布団の中に包まって読んでいた。

しかし、一通目の後半からは、知らないうちに正座をしていた。

剥き出しになったモモの上に、大量の涙が流れ、モモを伝って敷布に流れて行った。

時は静かに過ぎ、誠の噤り泣きを、深夜の凜とした空気が、吸収して行った。

宿の外では酔っ払い達が騒いでいた。

手紙・一

突然のお便り、失礼致します。

私は先日、夫をガンで亡くしたものです。

私が二十歳の時、二つ上の夫と結婚をして、そろそろ金婚式（五十

年目）を迎える前の、夫の他界でした。

夫は無口でした。

これといって何も取り柄もなく、定年を迎えた後も、囑託として長年仕事一筋に頑張った人でした。

そんな矢先、夫はガンに侵されました。

苦しい闘病生活のそんな中、去年の私の誕生日に、夫から小さな、盆栽の鉢をプレゼントされました。

「これ！」

と言っていつも渡されるプレゼントですが、毎年楽しみな行事でした。

そしてこの鉢植えが、夫からの最後のプレゼントになってしまいました。

その時には、ガンは末期でした。

三ヶ月後、夫は息を引き取りました。

最後は苦しみを伴っていましたので、その喘ぎ声のうちに他界しました。

最後の言葉は、聞き取れませんでした。

夫を失ってから生活は、あの人の笑顔や仕種を回顧しながらの日々。

私も早く向こうに行きたいという気持ちでいっぱいでした。

そんな寂しい日々を送っていたある日。

あの奇跡の日を、私は向かえました。

私に生きる希望を与えてくれた日。

それは、生きていれば、金婚式の当日でした。

朝食を済ませて、一人でお茶を飲んでいました。

午前八時でした。

いつも夫が出勤する時間でした。

そうしますと、突然リビングの窓辺の方から、夫の声が聞こえて来
たんです。

窓辺には生前、夫からプレゼントされた盆栽の鉢植えしか置いてま
せんでした。

夫は私の名前を呼びながら、

「子、今までありがとう。」

と繰り返しているんです。

驚いて鉢を見ますと、横の膨らんだ所の先端が開いていて、中に封筒が入っているではないですか！

その封筒を取り出すと、録音は止みました。

恐る恐る、また封筒を戻すと、懐かしい夫の声がまた再生されました。

私は咄嗟に、

「あなた！」

と叫び、涙が溢れました。

夫が、最後に伝えた言葉だったと理解出来ました。

さらに、封書を見ますと、私の名前が書いてありました。

裏には夫の名前が書いてありました。

私は涙で濡れた手でハサミを使い、綺麗に封筒を切って、中を開けました。

中には夫が生前書いた手紙が入っていました。

こう書いてありました。

それもあの人の字で。

「子、金婚式ありがとう。」

そして、今までありがとう。」

夫らしい短い文章でした。

タケザキ様

この度は、このような素敵なプレゼントをありがとうございました。

寂しくなったら今では、あの人の声をいつでも聞けます。

あまりにうれしく、どうしてもお礼の一言を申し上げたく、一筆しただけでした。

これからもどうか、皆様へ夢をお与え続けますこと、お祈り申し上げましてお礼とさせていただきます。

- 札幌市より -

誠は次の封筒を開いた。

手紙、二

手紙、二

どうしてもお礼が言いたくて、お手紙します。

僕は住み込みで、料理の修業をしているものです。

僕は中学の時にぐれていて、親に迷惑をかけていました。

就職も、父が頼み込んで、やっと許可してもらった日本料理店でした。

料理の修業はつらく、僕はいつも店の寮を逃げ出す事しか考えていませんでした。

入店して二ヶ月後の僕の十六才の誕生日の日、突然両親が店にやって来ました。

近くまで来たついで、とだけ言っただけで帰ってしまいました。

その時は、はつきり言って、うざかったです。

わざわざ、何にも出来ない俺を見に来やがったんだ！

なんて怒りに近いものがありました。

その時に、

「この店にずっと根付くように。」

と、サボテンの鉢を置いて行きました。

その日、親方が僕を呼んで話してくれました。

「、親が子供を心配するのは当たり前前の事だ。

ご両親は本当はお前を抱きしめたかったろうな。

なぜ、早く帰ったか分かるか？

お前の心が折れるのを心配だったんだ。

優しい言葉をかければ、お前は親に甘えて家に帰るだろう、と心配したんだ。

今は辛抱するか、逃げるかの境目だ。

ご両親、最後に、

「よろしく願います。

と言って泣いていたぞ！

来年、二人を招待する気持ちでやってみろ！」

僕は部屋に戻って、両親の気持ちを思っ泣きました。

それから僕は、一生懸命頑張って修業しました。

そんなある日、突然母が死にました。

交通事故でした。

言えないほど、悲しかったです。

絶対に俺の料理を食べさせてあげるとい夢が、半分失くなりまし

た。

一年が経ち、僕の十七歳の誕生日が来ました。

親方のご好意で、父を店に招待出来ました。

僕の夢が叶う日。

僕は前日から、心を込めて父のために仕込みを始めました。

その時、親方から、

「バカヤロー！」

お二人様分だろうが！

と怒鳴られました。」

その時は（無駄なものにな？）としか思いませんでした。

当日、父は僕に、

「去年送ったサボテンの鉢を俺の横に置いてくれ。」
と言いました。

腕を振るった会席料理が始まりました。

水菓子を、そしておしぼりと日本茶を出し終え、僕の夢が果たされました。

と、その時、

父の横にあるサボテンの鉢から、

「君、お誕生日おめでとう。」

と父と母と一緒に言ってくれているのです。
それも繰り返し、繰り返し。

父は俯いて、大粒の涙を流していました。

僕は何が起きたか分かりませんでした。

すると父が、

「封筒が二つ入っているから、後で見なさい。」

と言いました。

父は親方に、まるで頭を床に付けるかのようにしてお礼を言い、喜んで帰っていきました。

その夜、僕は封筒を開ける前までは、喜びよりも、失敗せずにやり遂げた達成感の方が強かったです。

それから、ゆっくりと封筒を手にしました。

そこには父からと、母からのそれぞれのボールペンで書かれた手紙でした。

去年の誕生日前に書いてくれたものでした。

今は亡き母の手紙には、こう書かれていました。

「ちゃん、今日のお料理、とっても美味しかったわよ、世界一。」

父も、

「美味しかったよ。」

と書いてくれてました。

父も母も、去年から今日の事を見越して書いてくれていたんです。

涙が溢れました。

そして思いました。

「なんて俺は馬鹿なんだろう！

親の気持ちも分からずにグレやがって！」

そしてすぐに気付きました。

親方の

「二人分」

の意味が！

そして、鉢植えのボタンを押すと、母の声がいつでも聞けます。

くじけそうになると、いつも母の声を聞いています。

タケザキ様

この度は、父と母に最高の親孝行が出来ました。

このご恩は一生忘れません。

本当にありがとうございました。

- 福岡市 -

その後、誠は残り全部の手紙を読んだ。

それにはどれにも感謝の言葉と、それに至ったそれぞれの人生が書かれてあった。

誠は「タケザキ」

で働く従業員達の、愛社精神、勤勉、熱意などを新ためて理解した。

「もう一人では泣くまい。」

誠は心に誓った。

「全員で感動の涙を流すまでは。」

夜の闇は、最高の暗闇を過ぎ、徐々に朝の明るさを増しつつあった。

誠に入った夢

その夜、誠に記憶に残らない夢が入った。

夢の主は、ベッドに横たわっていた。

口に酸素吸入機が付けられていた。

口に入る空気は、冷たい水分を多く含んでいた。

回りには沢山の機具があり、それぞれが甲高いセンサー音を響かせていた。

夢の主は、横に少年が立っているのを見つけた。

その少年は、泣きじやくっていた。

黄色い帽子を被り、幼稚園の制服を着ていて、胸に「井上祐一」と書かれた名札をしていた。

涙がポタポタと、黄色いバッグに落ちていた。

（あつ、お兄ちゃんだ。

僕はなぜ、起き上がれないの？

今すぐにでも、お兄ちゃんと遊びたいのに！）

と思った瞬間、夢の主は、

その現場を斜め上の空間から見ていた。

センサー音も、急に足の下に移動した。

横にいたお兄ちゃんも、下に行ってしまった。

しかしすぐに、夢の主は、魂が横たわった肉体から飛び出して、宙に浮いている事を理解した。

お兄ちゃんの後ろで、抱き合うパパとママが見えた。

二人とも泣いていて、パパがママを抱きしめている。

（パパ、ママ、お兄ちゃん！僕はここにいるよ！）

と夢の主が宙から叫んだが、聞こえていないようだ。

すると白衣を来た男が入って来て、さっきまでの夢の主を、じつくりと触っていった。

しばらくして、ゆっくりと、口に嵌められた酸素吸入機を外した。

そして手を合わせて、頭を下げると、部屋から出て行った。

高みから見ていた、夢の主は、何度も何度も家族に叫んだ。

突然、目を開けていられないほどの、眩しい光りの世界が現れた。

その光りは、総ての空間を支配した。

夢の主の回りも、光りの世界に覆われた。

すると、先ほどまで下に見えていたものが、幻影のように消えようとしていた。

夢の主は、パパ、ママ、お兄ちゃんが、段々と平面の写真のようになって、小さくなり、そしてとうとう、点の中に吸い込まれて行ったのを、悲しく確認した。

光りの源は、二本の木であった。

その輝く木の前に、一人の真つ白な一重の服を着た男が、ひざまづいていた。

その男も、少しばかりの光りを放っていた。

夢の主は、男のすぐ後ろにいた。

「サンチェス、あなたの魂を向上させます。
あなたには、蘇生した後、また数多くの苦難が待ってます。」
と輝く木が言った。

すると輝く木、サンチェスと呼ばれた男、夢の主を、覆う透明な球体の輪が出来た。

それからその輪の外で、黒色、灰色、白色の無数の玉が現れ、透明な球体の輪にぶつかって、割れて行った。

中から、人間の型をした裸体者が現れた。

決して透明な球体の輪は、それらの侵入を許さなかった。

裸体者達は、男でもなく、女でもなかった。

多くの球が現れ続け、花火のように、輪に衝突し弾け、あっという間に裸体者達が、ウジ虫のように沸き上がっていった。

裸体達は、無言であった。

いつの間にか、裸体達が、輪を囲ってしまった。

二重にも、三重にもなってあふれた。

サンチェスと呼ばれた男は言った。

「ありがとうございます。」

輝く木が言った。

「苦難の後、私はあなたに、多くの人を救う指命を与えます。

サンチェス、見てみなさい。

輪の外には、あなたに救われたい魂たちが、溢れています。

行きなさい。

行つて魂を救い、勇気を与えなさい。」

と言うと、二つの木は一体となり、輝きを増した。

「ありがとうございます。」

とサンチェスは言う、振り向いて、夢の主に向かい、歩き出した。

ゆっくりと、穏やかな眼差しとともに歩いて来た。

大きく手を広げ、夢の主を抱きしめようとした。

男が、夢の主の中に入った。

夢はそこで終わった。

誠は味わった事のない充足感に満ち、目覚めた。

輝く木の想い

光り輝く木の最終目的は、人間たちを、楽園と言われる幸せな国に導く事である。

楽園は、邪悪な魂が侵入出来ないように、結界が施されてある。

結界は、見渡す限りの大きな川である。

そこには幾つかの門がある。

それぞれの門の前には、光り輝く木が選んだ、善の心しか持たない、み使いたちが立っている。

地上での役目を終えた人間の魂は、み使いの前に導き出される。

そして、どのような霊も、労りの言葉を与えられる。

やがてみ使いは、川を渡らせる為に、船に乗るように、霊に勧める。

み使いは、魂に、

「何事があつても、赦してやるように。」

と、言って送り出す。

そして、楽園に入る為の、最後の試練が待っている。

川には、風も音も流れも無く、明かりが川面を眩しく照らしている。

ゆっくりと船は川岸から離れ、動き出す。

向こう岸は、白い霧の壁に覆われていて全く見えない。

すると、自ら歩んだ下界の生活が、川面に映し出されていく

霊は懐かしさで、映し出される映像に食い入る。

もちろん見たくないステージもあるが、映像は隠さず映していく。

始めは霊の善行が、映し出される。

細にわたり、霊魂たちが忘れていた事まで、細かく記憶されている。

その次に待っている映像は、霊魂たちの悪行である。

ここで発狂するかのように、頭を抱えて船の上で懺悔する者がほとんどである。

その時、懺悔する霊魂は、生前に犯した罪が、その時に許される。

しかし、川面に映し出された者に対して、大声で罵声を浴びせる霊魂がいる。

叫びは、聞くに耐えない罵倒の羅列である。

そこで悔やむどころか、憎しみが甦り、川面に写る者に対して、拳を振るう者もいる。

憎しみが走った瞬間、船がゴムのような軟体物になり、その霊を、

球のように包み込む。

そして、川の奥底にゆっくりと廻りながら、沈んでいく。

輝く木が、最後の悔い改めを与えたにも関わらず、憎しみを抱いて、地に落ちて行く霊魂たちは、後を絶たない。

その昔、セバスチャンも、この川で球になった。

その兄であるルドルフも、セバスチャンの妻であるアンナもそうであつた。

輝く木は、愛の存在である。

セバスチャンの霊魂を、井上祐一として蘇生させた。

次の人生では、

「人をも、自らも殺すなかれ」と祈りを込め、玉を割った。

セバスチャンの妻であるアンナの霊魂を、真由美として蘇生させた。

次の人生では

「自分のように、人を愛するように」と願いを込め、玉を割った。

さて、裁判官サンチェスであるが、彼は玉に囲まれる事なく、川を渡りきった霊魂であつた。

しかし、川を渡った世界では、一番下の層にいた。

神は魂の力を上げるために、誠として蘇生させた。

次の人生では

「行動で人々を助けなさい」

と祈りを込めて送り出した。

蘇生された靈魂たちは、純白に再生させられて、喜び舞うように、螺旋の軌道を描いて、地に放たれる。

地に着く間、次の人生で関わりを持つ靈魂たちが、集まってくる。

その軌道は、うねりを増し、蘇生を喜ぶように光り輝くのだ。

ここで、弟の妻を汚した、セバスチャンの兄であるルドルフであるが、まだ罪に対する苦しみの償いが終わっていないため、蘇生は許されていなかった。

第二章・ホームレス

その都市には、街を象徴する大きな橋があった。

全長、八百メートル、幅、五十メートル。

常に豊潤な川を挟んで、勇壮に立っていた。

用途は、都市開発という生活目的であるがために、高さは特記する程では無かった。

片側だけで、三車線あり、歩道では五、六人が、余裕で並んで歩ける大きな橋であった。

この橋の向こう側の、巨大なビルの間から、朝日が昇りつつあった。

陽光が、その存在を強調して行くに連れて、ビルの方向に、車が徐々に走り出していた。

しかし、橋の手前には、高層ビルはなく、人々が生活するに必要な、商店街が駅を挟んで、幾つもあった。

その大小はあれど、どの地方にもある、縮図である。

そして、そこには、必ずホームレスも少なからず居た。

言い訳の出来ない、弱肉強食の縮図であった。その日の真夏の太陽は、朝から気力をみなぎらせて、地にあるものを焦がすように炙っていた。

すでに橋の上のアスファルトからは、朝露の恩恵を消化させて、陽炎のように、ゆらゆらと揺れる熱気に姿を変えさせていた。

通勤の車や、自転車が、男が歩いて行く逆の方向に、慌てているように走っていた。

男は両手いっぱいスーパーの袋を持って、歩いていた。

橋を歩く者達は、俯いて歩くその男から、逃げるように避けて進んで行った。

テニス帽子を深く被り、ヒゲが伸びて、俯いて歩く男。

長身で痩せており、ジーパンにサンダル、真夏なのに長袖のワイシャツ。

誰が見ても、橋の向こうの人種ではなく、こちら側の人間であることは分かった。

陽光が川の面に照り返されて、男を下からフラッシュを炊くように輝かせる。

男の歩みに迷いが無いため、熱気の揺らめきの中に映る姿は、照り返しのフラッシュバックも手伝って、修行僧のように崇高であった。

男は橋の下にある、八畳程のプレハブの中に、躊躇せずに入った。

途中、河川敷の一画にある、ダンボールの中の住人達に、袋に入っている弁当を渡して行った。

どんなにしゃべりかけても話してくれないが、弁当だけは無言で受

け取った。

閉め切られたプレハブの扉を開けると、二人の男女が、カーペットの床に座っていた。

誠は扉を開けっ放しにした。

人数が加わる事で、法に守られていないこのハウスの防犯が、例え外敵が現れても、安全な人数体制になったからである。

蒸し風呂のような熱気に、人の汗の臭いが混ざった生臭い空気を、橋の影に浄化された清風が、あつという間に押しやって行った。

プレハブの窓には、目隠しで段ボールが貼られてあった。

その隙間から日差しがカーペットにジリジリと威光を示していた。

「おう、誠さん、いつも悪いね。」

歳は五十くらいのお腹の出た男が、片手をあげながら微笑みを持って言った。

「本当よね、今お茶を出すわ。」

と男より十歳くらい若い、痩せぎすの女が慌てて立って、コップとお茶のある棚に向かいながら言った。

差し出した弁当は、皆にはコンビニの賞味期限の切れた弁当を、ラッピングを変えて譲ってもらったのだと言っていた。

本当はサコーズの本社で、タケザキの配送部が、誠に毎朝届ける弁当であるのだが…

誠は靴を脱いで、真ん中にあるコタツ用のテーブルに、袋に入った弁当を置いて座った。

女は振り向いて、相方の男の作業着にふけがこびりついているのを確認すると、

「お兄ちゃん、せっかく誠さんが持って来てくれたお弁当にふけが入るじゃない！」

と背中を叩くと、男は今度は頭を照れ臭そうに掻いた。

「こら！おやじ！入るってば！」

女は誠を見て、声をあげて笑った。

つられて男二人も声をあげて笑った。

女はいつも髪で顔半分、隠していた。

顔面神経痛で、時々覗く顔半分は、頬を中心に引き攣られており、能面のように動かなかった。

二人は兄妹であつたが、その仲睦ましい振る舞いは、夫婦のようにすら思えた。

会話にはいつも笑いが堪えなかった。

この二人がどのようにして、こうなつたかはまだ誠は聞いていなかった。

聞く糸口が掴めなかったのだ。

「誠さん、それじゃいただくね。」

このふけ入りがまた美味いんだ。」

「汚い！ジジイ！」

妹が冗談に、軽く背中を叩いて応える。

二人がこのプレハブで生活するようになって、心の張りが生まれていたのを、誠は感じていた。

まだ二人と深くは話していないため、名前すら分からない。

ただ二人が兄妹であり、妹は兄の事を「あきら」と呼び、兄は妹の事を「あけみ」と呼んでいた。

誠もそこではそう呼ぶようにしていた。

しばらくすると、二組の男女が数分後に入ってきた。

「おはよう、おっ、誠さん来てたんだ。」

四十代半ばの、背の低い痩せた、目が大きくて窪んだ男が、先程まで漂っていた生臭い臭気を持ち込んで、誠たちの輪に加わった。

「皆、おはようございます。」

これ四人からの差し入れです。」

と言って連なって入って来た女は、先程の男よりさらに身長は低く、さらに痩せていた。

歳は男と一緒にであった。

二人は一緒の灰色の作業服を着ていた。
朝からの厳しい熱さに、服は水を浴びたように、今にもカーペットにしたたり落ちるようであった。

労働から解放された満足感からか、二人の顔に作ったシワの線を、更に笑顔の深い溝を作って、輪に加わった。

「川夫さん、川子さん、身体拭くタオル洗つといたから、どうぞ。」
と、あけみは二人の前に、川で洗って干したタオルを置いた。

ここでは、お互いが手に入るもの、または手助け出来るものを提供して、生活していた。

もちろん、過去の人生は、暗黙の了解として問わないルールが出来上がっていた。

この男女は夫婦であり、名前が川崎であることは、二人の会話の情報として皆は知っていた。

呼び合う名前が、男が川夫、女が川子なのは、単純に、川崎さんの夫で川夫、奥さんで川子。
皆、熟考することなく、単純にそう呼んでいた。

ここでは、名前すら存在価値は無いのである。

それからすぐに入ってきたのは、ここには場違いなほど綺麗な品のある、二十代後半の女であった。

身体はどちらかというところぽっちゃりとしていて、肉付きがいいが、ウエストが細く、お尻が大きいので、くびれが目立ち、すけ口の湿りが色気を引き立てていた。

身長は夫婦の川夫より高く、女の色気を漂わせていた。

「皆さん、おはようございます。」

今日は昼間は地獄の熱さですよ。

あきらさん、あけみさん、誠さん、注意して下さいね。」

「ローザちゃん、大変やったね、はい、ロング君と一緒にしとい
たから。」

あけみは座ったローザの前にタオルを置いた。

「あけみさん、いつもすみません。」

続いて入って来た男は、肩まで髪の毛が伸びており、挨拶する前に、皆の輪の中にはいり、

「いやいや、大変でしたよ！夜中なのにすっげえ熱帯夜、これから
の人は倒れないで下さいね。」

これ、川夫さんたちと僕たち四人からの差し入れです。」

と、輪の中心にあるテーブルに、パックに入っただけのものを置いた。

「おう、皆さんありがとうございます。」

と先にプレハブにいたあきらたちが言うと、作業服を着た四人が軽く頭を下げた。

ロングと呼ばれた男が、

「ほんと、ハンパないっすよ、これですもん。」

とそのひよる長い身長の、細い首に付けていたタオルを外して絞る真似をした。

「あれ？でない？」

「あんた！馬鹿じゃない？この熱さでしょう！汗だって蒸発するの！わかった！」

ロングは淋しそうな目をして下を向いた。

「皆さん！本当に馬鹿でしょう！すみません！」

とローザが言うと、一同に大爆笑を与えた。

この二人は恋人同士である。

話では、女はクラブのホステスであつたこと。

男はバーテンダーで、そこで二人はいい仲になったとのこと。

呼び名は、男はロングの髪の毛からロング、女はホステス時代の源氏名からローザと呼ばれていた。

「さあ、皆揃ったところで食べますか！頂きます！」

とみな談笑の内に食べはじめた。

灼熱の太陽は萎えることなく、地表を炙りつづけていたが、河原に生わった木々や草花を元気に、鳥たちは囀り、虫たちは元気に飛び回っていた。

蝉が途切れる事なく、鳴いていた。

食事が終わると、後から入って来た四人は、近くの公園から汲んできた水で、身体を拭いて、深夜の仕事のために睡眠に入り、あきらとあけみの兄妹は、昼の仕事に向かった。

もちろん橋を渡る事はなかった。

誠は橋向こうのビルに、清掃のバイトがあるという事になっていたため、橋の向こう側に歩いて行った。

誠専用の執務室がある、株式会社サコースの自社ビルへと向かって行った。

誠はホームレスになって、一ヶ月が過ぎていた。

駅に通じる道は、歩道と車道が並行して並んでいた。

そこに、右に北口、左に西口と別れる分岐点がある。

そこはホームレスの人種も分かれる、選別の場所でもあった。

歩道にはみ出すことのないように、右にいるホームレスたちは新聞紙だけが持ち物である。

ここにいる者たちは、目が宙に浮き、口からはよだれをたれ、中にはパンツ一つで寝ている者もいて、いつ自らが汚物を排出したか分からない者までもいる。

もはや生きる気力も無い者が、集まっていた。

クリーム色の壁が、何も答える訳もなく、滑らかな表面にすがりつくホームレスたちを、よだれを潤滑油として、滑り落としていた。

生きる氣力を捨てた人々が集まる地帯である。

左側の人たちは、何かしらの持ち物を持っていて、ダンボールで人が座れる位の高さで、家を形成していた。

ダンボールハウスと呼ばれるものである

ダンボールハウスを作る行為は、個人の生活を確保するという事であるが、本当の理由は、通行人からの視線を阻止するためである。

上からの目線に晒され、自らへの侮蔑が心に充満する。

例えばそれが子供の眼であつても、心に蘇生された卑屈は充満のアリ地獄から、はい上がれない。

憐れみの眼差しであつても、屈折した心が屈辱と理解する。

人の一瞥の数だけ、卑屈に苛まれる。さいなま

屈辱は、恐怖心になる。

ここまで来れば、人を殺す手段は、一秒の一瞥だけで充分であつた。時代は、これらの人達を助ける行政上のシステムを、持っていなかった。

いや、かえって助けるどころか、行政機関は「山狩り」と称する「段ボールハウス」の一斉撤去を、定期的に行っていた。

それは美観を理由にした、政治家たちの市民へのカモフラージュであつたが、当の浮浪者たちは決して驚きはしなかつた。

また手際よく段ボールを繋ぎ合わせ、数分でハウスを作ればいいだけであつたからだ。

誠は最初に、左の段ボールの住人の場所で生活を始めた。

誠も一ヶ月の間に、二回、ハウスを崩された。

その度に、先程のプレハブにいた、兄妹の”あきら”が誠のハウスを作ってくれた。

あきららは誠だけではなく、プレハブの他の二組のハウスも作つてあげた。

この三組の浮浪者たちは、一番奥まつた一画に、まとまって生活していた。

そこへ誠が加わつた後、誠は橋の下に、近くの建築会社からもらったと言つて、プレハブを用意した。

そして誠は、その三組の男女を招き入れた。

その日から、山狩りに苦しめられることは無くなった。

人の目線に苦しめられることも無くなった。

日雇い労働でわずかなりともお金が手に入る。

それぞれが好意に甘える事なく、懐中電灯、カセットコンロ、布団、茶碗など提供していった。

近くの公園の水道で、洗濯や身体を拭く事が出来た。

贅沢からはもちろん嫌われていたが、そこには最低限の生活があった。

皆に少しの笑顔が戻った。

しかし、正常者としての再起には、いくつものハードルがあることは皆、分かっていた。

山狩り

誠は、サコーズ本社ビルの裏にある、警備室から手続きをして中へ入って行った。

人目がつからないように、また怪しまれないように、サコーズと胸に書かれた作業着を着て、入るようにしていた。

誠の執務室がある三階は、フロア自体が資料室などがある無人の階であった。

なるべく人目に晒されにくい配慮がされていた。

十畳ほどある執務室に入ると、誠はブラインドを上げ、早速受話器を取った。

朝日が、ビルの谷間を抜けて、部屋のあらゆる場所に拡散して、白いデスク上で、光りが反射し、誠の焼けたヒゲ面を輝かせていた。

電話で竹崎に毎日、報告をするのだが、いつも誠に対する、健康と娘のことで話は終わってしまう。

今、竹崎の下で働いている元ホームレスたちは竹崎本人とボランティアの人達が直接、回って救済した人達であった。

誠のように、実際にその中に入って救済したものではない。

「誠君しか現場は知らないんだから、任すよ。」

というのが竹崎の口ぐせであつた。

コードレスを持つ手は汗ばんでいて、先程点けたクーラーの涼風が、徐々に、真夏の灼熱の塊を飲み込んでいった。

誠は、毎日の義務である、竹崎専用の携帯に電話した。

すでに竹崎には、六人の事を伝えていた。

「まだ、皆には伝えていませんが、先日お話しした三組の男女を、救済しようと思います。」

「分かりました。」

まあ、人生のちょっとしたズレの修正をお手伝い出来るといいね。」

竹崎はいつもの優しい口調で言ってくれた。

「誠君の初めてのスカウトする人達だ、誠意を持って迎えよう。」

「ありがとうございます。」

「それとその人達に伝えて欲しいのは、復帰すること、復帰する前の付けを清算しなければならない、という事だ。」

これが案外と勇気がある。

例えば、もしホームレスになった理由が、借金であつたならば、名前と住所の登録をする事で、借金の債権者が現れるだろう。

そこで改めて自己破産をしてもらい、その費用を会社の経費として損金扱いにする。

復帰する事への、不安を無くする言葉を伝えて欲しい。

その人達には、我々には理解出来ない、葛藤があるはずだからね。」

誠は久しぶりに、仕事でやり遂げるといふ充足感に浸った。

また、やっと竹崎の期待に応えられそうな事に、心から沸き上がる喜びを味わった。

誠は今日にでも、（正規の仕事と社宅、市民権の復権、それを会社がバックアップすること等など）を皆に伝えてあげようと思った。

誠は危うく、有頂天になりかけた。

傲慢の毒薬が入りかけたその時、竹崎は、察するように言葉を続けた。

「それでだ、誠君。」

「…はい？」

竹崎の声が急に低くなった。

「君の言う、段ボールハウス組みの人達は、まだ良いとして…

新聞紙組みの、ハウスを作る気力も失せた人達だが…」

竹崎は間を置いていった。

「どうする？」

その口調は、優しかったが、重たかった。

誠の心に、鮮やかな気付きが与えられた。

（目先だけに囚われていたな！まだまだ俺は甘ちゃんだ。
俺自信が、新聞紙組みの人達を、見捨てていたじゃないか！）

竹崎の言葉は、全く威圧が無かった。
しかし鋭かった。

数秒の時間が空いた。

竹崎は応えを待っていた。

試しの時間は、数十分にも感じた。

誠は言葉が出なかった。

「まあ、慌てなくてもいい、じっくり考えてくれたまえ。
いや、無理であるならばそれでいい…

現場を知っているのは、誠君しかないのだからね…」

「は、はい、最善を尽くします。」

「身体には注意して。」

と言うと、電話は切れた。

なんて俺はいい気になっていたのだろう。

ホームレスで、また浮き上がりたい人達はある。

その人達を見出だすことは、心ある人であれば出来るはずだ。

ボランティアの人達で事足りる。

俺でなくてもいいのだ。

しかし、竹崎は俺に任務を任せてくれた。

「上下、左右、

全体を観なさい！」

と、いうことか！

誠はその時に、竹崎の”使命”という任務を理解した。

真の慈愛とは、こういう事か！

誠は改めて、竹崎の真意と心意気を感じいった。

夕方になり、誠は、三組の男女が集う時間に合うように、サコーズを後にした。

いつものように、朝と夕方に、サコーズの食堂に運ばれている、タケザキからの弁当を持って。

プレハブに向かう橋の歩道では、その日たぎり尽くした太陽が、徐々にその姿を落としつつあった。

天は、脇役を変えて、その灼熱に耐えた褒美として、清々しい清風と、地平を機転にして、紅い夕焼けを用意していた。

体感には優しい風を送り、視覚には自然が描いた、荘厳なスケッチを人々に与えていた。

橋の上での、車や人々の往来は、変わらず激しかった。

しかし、人々は朝よりも、多少の笑顔があった。

誠は新たな課題を竹崎からもらったが、とりあえずは皆にどのよう

に話すか、考えていた。

心が躍っていた。

しかし、プレハブに近づくにつれ、人だかりが出来ていた。

誠は慌てた。

不安がよぎった。

何があったのだろうか？

小走りになった。

両手に持つ弁当を入れた袋に、汗がしたたり落ちた。

近づくとも車が三台、わずかな土手のスペースに停まっていた。

パトカーが二台、白い車が一台。

その白い車のボディには 役所と書かれていた。

橋の歩道から、やじ馬達が徐々に人数を増やし、下の様子を見ていた。

誠は身構えた。

ひょっとして”山狩り”がこのプレハブに焦点を合わせたのだろうか？

誠はやじ馬達を掻き分けて、プレハブに下りる土手へと出た。

案の定であった。

市の職員らしき、ワイシャツにネクタイ姿の男と、あきらが口論となっていた。

その横で警官が三人、腕組みをして立っていた。

あきらら興奮し、身体が小刻みに震えていた。

その身体にしがみつくように、妹のあけみが制止していた。

あけみの必死さに、顔面神経痛で吊り上がった顔の半分がさらけ出

されていた。

やじ馬たちの中には、その顔を見て、立ち去って行く者がいた。

役人と警官は、どうせ手出しはするまい！

という態度で笑みを浮かべ俯瞰ふかんしていた。

誠は、手に持っていた袋の中から、一番上の弁当を取り出した。

そして弁当の輪ゴムに、自分の名刺を挟んだ。

下では、寝ていた残りの二組のカップルも起きてきて、威嚇する態勢を取るうとしていた。

誠は慌てて皆を制止し、役人と警察に近づいて言った。

「このプレハブは私の物です。

近くの建築業の方からもらった物ですが、何か？」

「いや、市の条例で、この場所に建物を建てる事は、禁止なんですよ。

で、一週間待ちますので、その後、このプレハブは撤去します。

それを伝えに来たんです。」

三十歳くらいの背の低い、少し小太りの髪を七三に分けた役人は、笑って応えた。

その眼には、有無を言わせない、という威厳と傲慢が感じ取れた。

青いネクタイが風に揺られていた。

「おい！こらあ！

俺達は何悪いことしたって言うんだ！

悪臭も騒ぎも出しちゃいねえやあ！

あん！

お前らはそれでも人間か！」

「あんた！お止めよ！」

仲間で一番若いロングが言うと、恋人のローザが止めた。

「私達は日雇いですが、ちゃんと仕事しています。
人様に迷惑はかけていません！」

川子が、あきらの横に並んで懇願する。

夫の川夫が、妻の横で相槌をうつ。

誠は、皆と役人の間に割って入り、

「おっしゃる事は分かりました。

この弁当は、橋向こうのコンビ二のご主人達から、その日の賞味期限が切れたものを頂いているものです。

一つ僕の分をあげましょう。

決して私達が回りの人達から嫌われていない証拠です。」

誠は、役人の手を取り、裏に忍ばせた名刺を渡した。

体格のいい警官達が、身構えたが、誠は目配せをして凜とした態度で、無抵抗を示した。

役人は面倒くさそうに、名刺に眼を通した。

が、次の瞬間には、突き出していた顎は引かれ、腕は下に置かれた。

「明日、役所に伺いましょう。」

私達が、誰にも迷惑かけていないと言うことを、知って頂きたい。」

誠は役人の手に、弁当を載せた。

笑みを浮かべて、役人を見つめ続けた。

役人は、すぐに視線を下に移した。

「明日、役所に十時に伺いましょう。」

今日の所は、これで勘弁して下さい。」

「分かりました。では明日、お待ちしております。」

役人達は、先程までの慇懃な態度とは打って変わって、丁寧に頭を下げて、足早に去って行った。

あきららは、役人達が見えなくなると、その場にひざまづいて、大きく肩で息をした。

「あきらさん、大丈夫ですか？」

誠が振り向いて駆け寄ると、皆も駆け寄って来て、あきらを気遣っ

た。

「とりあえず中にはいりましょう。」
とローザが皆を促した。

ホームレスに落ちた人達は、面が割れるのを嫌う。
皆、すぐさまプレハブに入った。

役人達が帰ると同時に、やじ馬達も姿を消した。

あけみは兄に、お茶の入ったコップを差し出し、あきらは一気に飲みほした。

「ふう！落ち着いたよ。」

あきらの眼に安堵が戻った。

「あいつら急に来やがって！名前と住所を聞きやがったんだ。」

「名前と住所？」

川夫が、呆れたように表情を強張らせた。

「馬鹿じゃないの？ホームレスに名前と住所を聞くなんて！」
ローザが言っと、

「ほう！ローザちゃんだったら何て言うの？」

「決まっているでしょ……！」

質問して来た、彼氏であるロングに何か言おうとしたが、

「その時はね…？」

ロングの次の一言が、ローザの怒りを買ってしまった。

「何ですか？」

ローザはその瞬間、バシッと！

いつものよりも強く、ロングの後頭部を平手打ちにした。

「この真面目な時に、馬鹿な事！言ってんじゃないわよ！」

皆、その平手打ちの大きさに一瞬、引いてしまった。

ロングが頭を抱えて、怯えた子犬のようにローザを見ている。

ローザは鬼のように腕組みしながらロングを睨みつけている。

しばらくの沈黙があり、皆が笑いをこらえるのに必死であった。

しかし、たまらない。

まずあきらが大声を出して笑った。

皆、我慢していたが、あきらの笑いが合図となって、関を切ったように爆笑になった。

ロングも、照れ笑いで続いた。

ローザだけは、睨みを和らげなかった。

誠は、皆の笑いが落ち着くのを待って言った。

「皆さん、明日役所に話しに行つてきます。

どうなるか分かりませんが、努力しますので待って下さい。」

誠は笑みを含んで言った。

「誠さん、ありがとう。」

あきらが頭を下げて笑みを返すと、

「誠さん、いったいあなたは何者なんだい？」

「はい？」

あきらは笑みを絶やさずに言った。

「いや、誤解しないでほしいんだが。」

あきらは、仲間を見回して、続けた。

「誠さんが、俺達の見方だという事は分かっている。
しかし俺達は匂いで分かるんだよ。

誠さんには、俺達のような世捨て人には無い、匂いがある…
それは希望なんだよ。」

皆、誠を見つめながら、あいづちを打った。

「誠さん、話してくれないか？」

あきらに、責める気持ちは無かった。

ただ真実が、知りたかった。

それは、皆も一緒であった。

これまで皆が、誠の正体を聞けなかったのは、聞いた時点で誠が居なくなるのでは？と思っていた。

あきらは役人の回し者じゃないか？

また、ただの無責任なボランティアかぶれじゃないか？と疑心が支配したこともあった。

それでも皆には、誠から湧き出ているオーラが、
（もしかしたら、わずかな希望をもたらしてくれるのでは？）
と微かな希望を抱いた。

少しばかりの疑念と、わずかな希望。

その狭間の中で、常に皆の信頼を得ていた。

先程の役人達との誠の態度で、皆の中に信頼という確信が、確固なものとなった。

誠はホームレスで無くても、皆の仲間であると全員が確信したのだ。

誠は、やっと話せる機会が来たことに感謝した。

「皆さん、実は…。」

…話すと長くなります。

明日、僕は役所に行ってきます。

夕方、皆さんが集うこの時間に、結果と一緒にお話します。」

皆、お互い顔を合わせ、笑みと共に大きく頷いた。

誠も笑みを返した。

膨れ上がった入道雲の紅が、紺碧に変わり、天上には一番星が輝いた。

そよ風が、岸边に生わった草花を優しく揺らす。

川向の庁舎から、時刻を告げる鐘の音が響き渡り、天上から、また地上からも、何かを賛美するかのようであった。

六人の男女は、常に試練の中で苦しんでいた。

しかし、投げることはなく、生きた。

ホームレスになっても生きることを選んだ。

ついに人生は、六人に、つまづきへの魂の叫びの先にある、ご褒美を用意仕出した。

市長

誠は、執務室に用意されたスーツに身を装い、役所に向かった。

久しぶりに着るスーツが、営業で交渉事をこなして来た、過去のそれぞれのステージを呼び起こした。

しかし、その緊張したであろう自分の歴史が、今では取るに足りない、子供の遊びであつたように感じられた。

その日、天空は前日までの夏日から豹変し、どんよりとした雨雲が支配していた。

大きなねずみ色の雲の固まりが、強い風に動めき、今にも雲ごと地上に落下して来そうであつた。

風が雲を支配し、起動を目線で確認出来るほど、速く運んでいた。

誠の伸びた髪も、風に乱された。

役所に着くと、身嗜みを整えて、

「橋の下のプレハブの件で」

と総合案内で問い合わせると、すでに打ち合わせが出来ているのだろつ、

「田中誠様でいらつしゃいますね、お待ち申し上げておりました。」

と女子職員は電話で内線を入れた。

待たされることはなく、二階に通じる階段から、昨日の役人と、こちらも小太りで腹が異常に出ている四十歳位の、ふくよかな髪を短くカットした男が現れた。

二人の贅沢な体格に、誠は違和感を覚えた。

久しぶりに見る、脂ぎった顔艶に、誠は一種の軽蔑が沸き上がるのをどうすることも出来なかった。

「田中様、昨日はうちの佐久間が大変失礼をいたしました。

わたくし市長の明池と申します。」

誠は市長と、佐久間という昨日の役人と、名刺を交換した。

市長はまじまじと名刺を見入った後、

「竹崎様の所の室長様とは知らずに、ご無礼のあったこと、お許し下さい。」

というと誠を二階の市長室に案内した。

昨日は慇懃な態度であつた佐久間という男は、今日は打って変わって丁重であつた。

竹崎が誠に、

「この名刺が役立つこともあるだろう。」
と言った理由が分かった。

誠は上座に促されて、市長室にある黒光りした来客用のテーブルに

三人は着席した。

「いやあ、昨日は名刺を頂いて驚きました。サコーズの会長様の室長様でいらしたなんて、腰が抜けそうでしたよ。」

佐久間は演技と分かる、両手を絡ませたぜスチャーで笑いながら答えた。

どうしてこうも柔軟に立場を変えられるんだろうか、誠はその豹変ぶりにあきれた。

「本当に昨日は、佐久間が失礼しました。しかしなぜ、あのような格好で、あなた様みたいな方が、あそこにいらしたのですか？」

市長は言い終わると、体を前のめりにして誠の顔を覗いた。

市長である明池は、温厚な笑顔を見せていたが、明らかに誠の人物を推し量るように、誠の目線の流れを読もうとしていた。

あくまでも濃厚な表情で、観察の触手を誠に伸ばしていた。

「会長の指示で現地調査です。」

誠は動揺しないように、間髪を入れずに応えた。

目線は市長から離さなかった。

「そうでしたか、いや私の選挙の時の公約に、街の美観というもの

がありましたね。

その主旨で佐久間も動いたと思うのですよ。」

「街の美観ですか？」

「はい、これはシークレットですが、来年ヨーロッパの皇室の王子夫妻が、来日するらしいんですよ。

パレードがあるかも知れないので、それまでに建物の整備をしなくちゃいけないと、国からの要望もありまして。」

なるほど！と誠は全貌を理解した。

（所詮、自分のためか！）

人気取りのために、ホームレスを利用しようということか。

竹崎がこの連中を”政治屋”と揶揄する気持ちが理解出来た。

「なるほど、外国メディアがパレードを報道する時に、ホームレスの住むプレハブが街にあると具合が悪いんですね？」

「いや、それは国からの御達示で、僕は言われる前に動きたかっただけです。」

「いや、市長、ホームレスは人の眼に付くところにはいけませんよ、身元がばれるのが嫌なんです。心配はいりませんよ。」

市長は小さい声で笑うと、体をすこしのけ反らせた。

「田中さん、それと治安の問題があります。」

決してホームレスが犯罪を犯しているとは言いませんが、市民の心

情を考えると、やはり野放しにしている訳にはいかないんですよ。」

「いや、市長、今は野放し状態の犬かもしれません…」

誠は市長を睨み返した。

市長は、たじろいだ。

誠はもう緊張は無かった。

そういう気持ちが一程まであった事がバカバカしくもあった。

「あのプレハブに住んでいる人達は、日雇いですが働いていますし、ただ今は世間から幽閉しているだけです。」

立派に市民と変わり無い人達です。

ただ、役所的に、市民権が無いだけです。

それと、選挙権も今はありませんね。

市長は、目線を反らして、顔を下げながら、愛想笑いを作った。

そして、一番聞きたい事を誠に尋ねた。

「田中さんたちは、これから何棟プレハブをお建てになるつもりですか？」

「いえ、今あるプレハブのみで、これから作るつもりはありません。」

また、あれは近くの建築屋さんの要らなくなった物を譲ってもらったという事になっています。」

市長は身を乗り出して来た。

「サコーズの息はかかっている事になっています。

まして会長の竹崎は、引退している状態です。

これからしゃしゃり出て、意見を言うことなどないでしょう。

市長、ご安心して下さい。

市長の動いてこられた事を横取りすることはありませんから。

何だったら、プレハブは、市長からの好意だと言ってもいいですよ。

」

市長の眼に安堵が宿った。

要は、人気取りのためだけにやって来た努力が、知名度のある人間が入って来て、功績を奪われるのが、嫌なだけの話なのである。

主役が市長でなければダメだったのだ。

「田中さん、竹崎会長は伝説の方ですからね。

（みんなが困った時に出てくるから）と言いついて、表舞台から去って行った竹崎会長が、まさか！ここで現れるなどとは思っていませんでした。

誤解の無いように申し上げますと、私は会長のファンなんですよ。」

市長は誠たちが、自分を超越した行動で無いことに、安堵した表情であつたが、その眼には、まだ厳しい探りの思惑があるように感じられた。

「それで田中さんたちは何をしようと計画なされているんですか？」

「はい、竹崎はあの人達をもう一度、再生させられないかと？考えています。」

これはあくまでも、会社レベルの話であつて、決して法人化を目指したものではありません。

ですから市に申請することなどはありませんので、心配無用ですよ。

僕たちは僕たちのやり方で進めて行きます。

しかし市長は市民思いですから、私たちが考える以前に、準市民であるホームレスのために、素晴らしいお考えが、きっとお有りでしょうから。」

誠は不得意な皮肉を言った。

「明地市長の事ですから、プレハブを追い出した後の、ホームレスの処置はお考えでしょうから。」

私たちは影から応援する形になります。」

市長の顔に焦りの表情が微かに過ぎつたのを、誠は見逃さなかった。

誠はすぐにでも市長に問いたかった。

（ところで、プレハブを追い出した後は、ホームレスをどうするん

ですか？
と。

そこは突かれた後の言い訳上手には定評のある政治屋である。

「もちろん！この課題は国がちゃんと考えていると思います。」

「国が？」

ですか！」

誠は語気を高くして言った。

あなたは？

と続けたかったが、止めた。

「まあ、明池市長にも得策がお有りと存じます。」

と言うことで、あのプレハブはサコーズの調査室という事で、取り壊しだけはご勘弁願いたいのですが。」

「もちろんですとも、この件に関しては、私が責任持って取り崩しは致しません。」

ご安心下さい。」

誠は深々と頭を下げ、握手を求めた。

市長もすかさず手を出した。

庁舎の窓を、強くなった風が風声をあげ、揺らしていた。

その風は、激しい雨を大量に運んでいた。

遠くに見える河原の草花を大きくうねらせながら、猛っていた。

誠はプレハブの取り崩しがなくなったので、速くここから出て行きたかった。

速く皆に、次のステップに行く同意を確認したかったが、

「田中さん、折り入って頼みがあります。」

市長は深々と頭を下げた。

そして、素早く顔を上げると、嘆願するように言った。

「ぜひ、会長と協力して、市民のために働きたいと思うのですが、田中様のお口添えでお会いしたいのですが……」

なぜここまでの数秒で計算出来るのだろうか？と思った。

竹崎という強力な後押しがあれば、明地の人気は上がる。

まして竹崎が表には現れないとすれば、総てが市長の手柄になる。

更にホームレスの事など考えていない後々の面倒を、竹崎と手を組めば勝手にやってくれるのである。

誠には、サラリーマン時代と違って”狡猾さには狡猾を持って”という行動を取れるようになっていた。

「そうですね、竹崎には私から今日のご好意も含めて、伝えておきます。」

「そうですか！是非とも一献交わりたい、とお伝えください。」

私は市民のために……」

明地はそれから誠に、選挙カーの上で手を振りかざして怒鳴るような演説をしゃべり出した。

誠は聞いていなかった。

唾が飛び散るのが止まった隙を狙って、

「では、竹崎に一刻も速く、この吉報を伝えたいので、この辺で失礼致します。」

と言って足早に退散した。

誠はいったん、サコーズ本社に戻り、竹崎に電話で報告した。

「誠君、それでいい。」

結局は自分の利害という、損得勘定なんだよ。

それに見合った話だったという事だ。

全員とは言わないが、あいつら政治屋を、心から信じてはいけない。

「

やはり誠は、竹崎は市長達を全く相手にしないと思っていた。

「政治屋だけではないが、一度なりとも裏工作の味を知った者は墮落する。」

例えば大きな災難が起こったとした時に、その中で何人の政治屋が動くか？

ほとんどの政治屋は逃げるだろう。

その時に、結果は出ずとも、共に泣いて行動してくれる人が政治家だ。」

「そうですね、僕もなるべく関わらないようにします。」

「いや、違う。」

竹崎の口調が低くなった。

「向こうから正確なアポイントがあれば、私は出向くつもりだ。

何なら市長の手柄にしてもいいと思う。」

「…は、はい？」

誠は全く意外な言葉に驚いた。

「誠君、ここで考えなければならぬのは、

”誰が助けただ、誰が企画を立てただ”とかいう事ではなく、目的がどこにあるかということだ。」

「はい。」

「主役はホームレスにある。
私たちではない。」

「はい。」

「目的はあの人たちの再生である。これも私たちではない。」

「はい。」

「であれば、変な心の固執など捨てて、目的のために、利用出来るものは利用すればいい。

ここでいう利用とは、善を持って成すこと。

ここが重要である。」

この禅問答的な竹崎との言葉は、誠の心に染み入って行つた。

竹崎が誠に対して、毎日の電話連絡を強いたのは、教育の一貫でもあつた。

誠は知らず知らずの間に、人間としての器が大きくなって行つた。

竹崎が行う教育とは、本人は気づかぬうちに、心の中に善の力を蘇生させるといふ、一時的な効果しかない洗脳とは全く違ふ、大経営者たちが使う”悟しの業”であつた。

「利用といえば、今の世は”おとしいれる”と訳されるが、私がここで言う利用とは”共生”である。」

「共生？ですか？」

「そう！共生！」

竹崎の低い声が、少しばかり大きくなった。

「市長に、ホームレスの人達が、決してなりたくなかった訳じゃない、という事を分かってもらえるだけでも、しめたものだ。」

多分、市長だけでなく、多くの人もそう思っていると思う。

しかし、人生は少しの歯車が狂っただけで、万人がホームレスになる可能性があるという事だ。」

竹崎は誠に、初めてミーティングした時にも話した内容を語った。

「そこで、市長が自らの事から逸脱して、他人にまで及ぶ慈愛が生まれたら、それに越したことはない。」

誠君、政治屋は始めは信念があるものだ。

しかし大部分が途中で挫折する。

でもここでは、出る杭を打つ「党」という軋轢はない。」

竹崎はゆつくりとかみ砕くように言った。

「化けて共生、違う言葉で言えば「助け船」とでも言おうか、要は人間の尊厳に気づいてくれて事だよ。」

その目的が叶えば、利用されたふりをして結果はこっちが利用した事になるからね。」

竹崎は大声をあげて笑った。

そして、

「良い事も、悪い事も紙一重で、どちらにも転ぶ可能性があるという事だね。」

誠は自分に当てはめて考えた。

竹崎と会うまでの不幸と、その後の使命感という幸、竹崎の言葉の深さが痛いほど理解出来た。

その後、誠はいつものように、激励の言葉をもらい電話を終えた。

そして、いつものように、タケザキから届けられた弁当を持って橋を渡って行ったが、以前、竹崎から言われた（新聞紙側）の救済の事が頭を過ぎった。

もう一度、観察してみよう。

誠はプレハブを通り越して、駅の方に向かい、歩道の北口と西口に交差した分岐点を右に曲がった。

誠は着替える事はなく、スーツ姿であった。

そして駅にあるコンビニで、弁当を数個追加した。

右側・新聞紙組み

橋を渡り終えようとした時、とうとう空のネズミ色をした大きな雲たちは破裂して、真夏の熱と強風で水分を吸い上げられていたアスファルトの上に、大粒の雨を叩き付けた。

バシバシっという音を立て、最初はゆっくりであった雨粒の波紋が、数秒もしないうちに涌き水のように、地面を湖のようにした。

視界は昼間なのに、薄暗い空間が支配した。

真夏であるのに、半袖では寒いくらいであった。

人々は体を屈めて、小走りに駅へと雨宿りのために走った。

駅への歩道には一瞬にして人々が溢れた。

しかし、誠が駆け込んだ北口に通じる一角の、歩道と平行する車道には横殴りの雨が、強風と一緒に侵入し、ホームレスの新聞紙をあっという間に濡らした。

たまらずホームレスたちも、虚ろな目をして歩道に移動した。

人々は、運が悪いとでも言わんげに一樣に眉間にシワを寄せ、数センチでも近寄る事が、疫病でも移るかのように気づかれないよう、遠ざかる。

寒さに震えながら、座り込むホームレスたち。

風が精神に異常を持った者達の、排泄物の臭いを充満させていた。

ホームレスたちは、身にかかった寒さという、身体の苦痛に、少しばかりの喜びを感じた。

苦痛は、意識が体に向けられるため、時間を浪費出来る。

ホームレスたちにとって何が地獄か？

それは時間である。

時を浪費出来ない一秒の地獄である。

錯覚の悪魔が、永遠に続くよ！と囁く地獄である。

天はさらに風を使って、雨を回すように地上に落としこんで行った。

風は駅のクリーム色の壁に反射し、雨を天上へと逆流させている。

雨が螺旋の弧を描き、激しくよじれ、その遠心力でどこまでも天に向かって行くようであった。

しかし、それらは直ぐに力無く、地に落ちて行った。

さらに風も手伝って、地に叩き付けて行った。

その同時刻であった。

誠の妻である真由美と、妻の子であるリサは、タクシーで前の夫である、井上祐一が予約したレストランとへ向かっていた。

リサの七歳の誕生日が、近づいていたからである。

井上祐一から、娘の誕生日のお祝いの申し出の電話が掛かってきた時、真由美は、前夫を思いだそうにも、その輪郭すら遠い没却の中に埋もれていて、白黒の写真のように薄れたものであった。

しかし、リサにしてみれば血が繋がった父親である。

心が躍り、体を揺らして、タクシーの中で饒舌に喋っていた。

突然の大雨の前に、タクシーは徐行運転を余儀なくされていた。

リサはその遅さに苛立つて、運転手に催促しようと、前のめりに運転席に手をかけた時、タクシーの横を、駅に向かって駆け抜けて行った男を見た。

「あれ？おじさんだ！ママ！今おじさんが走って行ったよ。あそこ！ヒゲ！モジャモジャになってるよ！」

真由美は我が子の踊るような心に、微笑ましく笑みを投げかけていたが、娘の言葉に驚いて、指差す方を見た。

そこにはスラックスを着た長身の男が、両手にビニール袋を抱え、伸びた髪と揉み上げから大粒の雨足を滴らせているのを、横顔から捕らえた。

真由美には、工場の人事部で働いていると告げていた誠が、ここにいる必然性を見つける事が出来なかった。

まして出張に行つて来る、と出かけてもう一ヶ月以上もたっている。

「リサちゃん、人違いよ。」

「そうかな？」

とリサは大袈裟に首をひねったが、

「運転手のおじちゃん、パパと会ったから、速くしてね。」
と、心は父親に会う喜びの方に戻った。

タクシーの中の親子に気づく事なく、その男は駅に通じる地下道の中に、ゆっくりと姿を消して行った。

タクシーは、駅に通じる繁華街の、飲食店が一階に並ぶビルの前まで来た。

道路の排水溝は、あつという間に、許容範囲を超える雨が湧いていて、タクシーは降りる親子のために、屋根のあるビルの駐車場に車を停めた。

真由美とリサが降りると、父親である祐一が、二人の前に現れた。

祐一は真由美と目線を合わせ、

「今日はありがとう。」

と一言、言つとリサを抱き抱えて、

「リサちゃん、大きくなったね、今日はプレゼント持って来たから

ね。

何歳になりますか？」

リサは真由美の前であるために、甘える事をためらっていた。

「七歳。」

と目線を合わせずに言った。

「二時間ほど借りるよ。」

「十分前に、店の前に待っているわ。」

「元気だったか？」

「心配いらないわ、全て順調よ！」

真由美は腕組みをして、目線を上げて言った。

「そうか、今日は本当にありがとう。」

と祐一は言うつと、レストランの方へリサの手を取って歩いて行った。

店に入ると、リサは真由美から見えなくなったのを確認すると、

「パパ！会いたかったよ！」

と祐一に抱き着いて来た。

祐一は離婚したことで、我が子にも悲しみを与えていたことを悟った。

我が子に対しての愛おしさが倍増した。

店は雨のために、お客は少なかった。

その店は、特にデザートが充実している有名な店であった。

店の選択は、祐一の、現在の妻である亜利沙が選んでくれた。

亜利沙は、我が子のようにリサの好物を祐一から聞き出し、候補に上がった店に電話で確認をしながら、料理まで決めた。

実際に個室に入って出てきた料理に対して、

「パパ！おいしい！ちゃんとリサの好きなものを覚えてくれていたのね！」

と満足した。

祐一は亜利沙に感謝した。

「それだったらプレゼントはこれがいいわ！」

と身重であるのに、祐一と一緒に出かけ、リサのプレゼントまで決めてくれた。

それをリサに渡すと、

「わー！ステキ！パパ！これ前から欲しかったの！ありがとう！」

と言って喜んでくれた。

リサは最高に喜び、心から笑ってくれた。

楽しい時間はあっという間に過ぎて行った。

「さっきね、おじさんを見たんだよ、向こうの駅でヒゲぼうぶう！」

リサは手で口の回りを伸ばすリアクションをしながら、大袈裟に言った。

祐一は、義理の父親である誠の事には触れずにいようとしたが、リサから言ってきた。

「へえ、ヒゲぼうぶうだったんだ。」

「そう、ママは人違いよ！って言ったんだけど、あれはおじさんよ！」

祐一はわざと笑って

「おじさんって、新しいお父さんの事？」
と言った瞬間に祐一は後悔した。

「まずい！多感な少女に、二人の父親の存在を暗示させてしまったか！」

「そう！おじさんはママの旦那さん。
しかしパパ、安心して！おじさんとっても優しいから。

今度の誕生日の日には出張から帰って来るって。」

祐一はリサの気持ちの整理の付け方に、安心した。

またここまで整理するために、どれだけの小さな心を痛めたか、祐一は心でリサに詫びた。

リサにとって父親は祐一。

母親は真由美。

義理の父親は、ママの旦那と決めているのである。

「じゃあ、きつと電車でどこかに行くところだったんだね。」

「たぶんね!」

「ヒゲを剃る暇がないほど忙しいんだよ!」

「おじさんもたいへんよね!」

とリサは可愛く祐一を見て笑った。

程なくしてウェイトレスが入って来て、

「お連れ様がタクシーでお待ちでございます。」

と言って立ち去って言った。

祐一は、次に会う約束をリサとし、不機嫌にタクシーに乗って待っている真由美にリサを渡し、後を見送った。

祐一は、亜利沙と一緒にの職場になった田中誠が、祐一の前妻の再婚

相手とは教えていなかった。

亜利沙が、人のプライバシーの暴露を嫌う女性であったからだ。

また、竹崎真一からも”僕の下で働いてもらうことにしたよ”と言われただけで、仕事の内容までは聞いていなかった。

実直と評判のあの”竹崎真一”の下にいる者が、ヒゲを携えている。

井上祐一はそこが気にかかった。

しかし時には”大胆不適”なところも兼ね備えている”竹崎真一”である。

何を始めているのだろうか？

という期待も同時に抱いた。

真由美は、前夫と娘の食事の間に、近くの喫茶店で、スタッフと打ち合わせを計画していたが、キャンセルして駅に向かった。

娘が”おじさんがいるよ”と言った場所まで行き、地下道へと降りて行った。

突然の大雨を逃れるように、地下道は人々で混雑していた。

しかし、ある区域だけ、ぽっかりと人が遠ざかっている場所があった。

その場所で、先程タクシーから捕らえた横顔の男が、明らかにホームレスであろう一人の人間に、弁当を分け与えようとしていた。

「彼だわ。」

とヒゲが伸びた顔を見て確認した。

真由美の視界には、夫とホームレスの動作が、リアルに入ってきて来た。かなりの説得の後、そのホームレスは、やっと弁当を誠から受け取った。

それまで、誠がホームレスに話しかけても、目は虚ろに宙に浮いていたが、やっと誠と視線を合わせ、弁当を受け取った。

ホームレスの男は弁当を食べた。

人間の正常な表情に戻って、がむしゃらに口の中に入れた。

誠は、満面の笑みになった。

誠は回りにいた別のホームレス達から弁当を奪われないように、そのホームレスの食べ終わるのを待っていた。

「あの人、またクビにでもなったのかしら？」

真由美は呆れた。

「リサには見せられないわ。」

と去ろうとして、後ろを振り向いた時、そこに若い女が乳飲み子を抱いて立っていた。

先程まで真由美が見ていた場面を見て泣いていた。

白いスカートと長袖の青いカーディガンを羽織り、サングラスをして表情を隠していたが、対面した真由美に、明らかにサングラスの向こうから流れている涙が、見て取れた。

真由美は振り返って、ホームレスの男を確認した。

まだ二十代の後半位かしら？

そしてその男を遠巻きに見つめ、涙する女と子供を観察した。

女は二十代前半だわ。

真由美は一つの仮説を立てた。

（若い男はリストラに会い、会社をクビになった。

若い奥さんがいて、子供も生まれたばかり。

夫はクビになった事を告げられないで、借金地獄。

そしてとうとう気が狂って、借金取りから逃げるために、ホームレスになった。）

そんなところかしら。

真由美は

負け犬たち！

と心で吐き捨て、階段を上って行った。

夫に対しては、更に輕蔑の思いが強くなった。

とその時、真由美が女とすれ違った瞬間、抱き抱えていた乳飲み子が突然、真由美を待っていたように泣き出した。

真由美は乳飲み子を見た。

顔が異常に赤く、かつ目が白目を向いているのを確認した。

「あなた、ちょっと。」

と赤ちゃんのおでこに手を当てた。

凄い熱である。

「熱があるわ、病院に行きましょう。」

と真由美はその女から赤ちゃんを取り上げた。

女はその場にしゃがみ込み、膝を抱えて泣き崩れた。

「何をしているの！早く立ちなさい！」

と真由美は女を急かして、先程待たせていたタクシーで病院へと向かった。

車中、真由美は、

「何があるか知らないけど、雨の日に赤ちゃんとおんなところにいるら風邪引くじゃない！」

女は、泣きながら、

「すみません。」

と子供を抱きしめてそういうのが精一杯であった。

真由美は診察の結果が、気温の急激な変化で起こる症状で大差ないということが分かると、

「あなた帰るお金あるの？」

と聞いた。

女は、

「ありがとうございます、お金はありますから。」

「そう？」

と言うと、受付で治療代と三万円余計に支払った。

真由美は親切心でそうした訳ではない。

夫である誠が絡めば、何かしら真由美にも関わりが来るように思ったからだ。

「負け犬達に関わるなんてまっぴらよ！」

このお金が手切れ金。」

真由美は受付の事務員に、

「余った分はあの親子に渡してあげて。」

と言って娘の元へとタクシーを飛ばさせた。

女には、名前を聞く余裕も与えなかった。

誠は、駅のコンコース内にある百貨店で、着替え用の服と手押し用バックを買い、その中に弁当と一緒に詰め込んだ。

北口の通路に足早に戻ると、男は濡れた体を震わせながら、膝を抱えて座っていた。

先程、弁当を頼張っていた時の精気はなく、眼は再び、宙に浮いていた。

少し痩せぎすの体格が、震える姿を余計に哀れに映していた。

ジーパンと半袖シャツは汚れてはなく、まだこの住人になってから、日が浅いのが分かった。

「このバックの中に、着替えと夜分の弁当が入っている。遠慮せずに受け取って下さい。」

男は、宙に浮いた精気のない眼を誠に向けた。

「僕はお金持ってません。」
と、か細く言った。

「いや、いいんだ、さあ早くトイレで着替えて来なさい。
また明日来るからね。」

誠は男に告げると、橋の下にあるプレハブへと向かった。

誠は、先程まで階段から男を見守っていた、子供を抱えた女が居なくなっているのを確認した。

「この男と関係あるはずだが…
惜別の涙だったのだろうか？」

誠はこの男を哀れに思うと同時に、竹崎に感謝した。

「僕にこの使命を与えて下さって、ありがとうございます。」

その頃、もう一人、この光景を、遠巻きに観察していた男がいた。

目は吊り上がり、怒りの表情を誠に射していた。

背が低く、中肉の体格は、標準の男で、雑踏の中では、全く目立たない存在である。

何日も着すぎたスーツが、体裁を下げていた。

しかし、その誠を射る眼光に、それを見た人々は、恐怖を感じ、遠巻きにした。

男は誠の伸びた髪とヒゲを確認して、満足した醜い笑みを作った。

誠が、落ちぶれていることを見届けると、駅のコンコースを足速に駆け上がって行った。

かつて誠を、風評から奈落へと追いやった男であった。

好転

雨は勢いを増し、渦巻く風に乗り、プレハブの壁に向かって、機関銃のように打ち付けていた。

雨粒が弾け、飛沫となり、プレハブ全体を霧のように覆っている。

誠が入ると、

兄妹である、あきらとあけみ。

夫婦である、川夫と川子。

恋人同士である、ロングとローザ。

六人はすでにカーペットの上に、円くなって座っていた。

スーツ姿の誠を見たとき、皆、一瞬後ずさりをする動きをみせた。

「誠さん、雨の中、ご苦労様でしたね。」

あけみがタオルを手にして誠に渡した。

相変わらず、髪で顔半分隠していた。

誠は濡れた髪の毛を拭きながら、

「皆さん、遅くなりました。」

役所で話しが長引いてしまいました。」

「いやいや、大丈夫だよ、皆、仕事を休みにしたからね。」

あきらが言っと、川子とローザがお茶を配りだした。

あきららは、二人が配り終えて座つたのを確認すると、重い口調で言った。

「役所では、お話にならなかったでしょう？」

六人はじつと誠の視線を伺った。

雨音が会話を遮るように、うるさかった。

誠は万遍の笑みを称えて、皆の眼を見ながら言った。

「いえ、このプレハブは対象外で、取り崩す事はしないと、市長の了解を得ました。」

言つと一同、お互いに眼を合わせ、

「おう、良かった！」

と手を合わせ、あきららはため息を吐き、川夫とロングは「やったぜ！」と手の平を叩いて、強く握った。

女達は「良かったわ！」「本当ね！」と抱き合い、歡喜に涙を拭いた。

その姿を誠は、微笑みながら見ていた。

皆、誠に握手を求めた。

しばらくは、市長との会話の内容を伝え、皆で弁当を食べた。

外は時と共に、暴風雨の強さを増して、猛って行った。

暗さも増して来たが、プレハブの中には希望の光が充満していた。

「ところで誠さん。」

あきらが発すると、皆、あきらを見つめ、悲しい表情になった。

「誠さんが来る前に、皆と話していたんだが、誠さんの役目はこれで終わりかい？」

「は、はい？」

「いやね、誠さんが我々のような世捨て人じゃないって事は分かっている。」

「はい、すみませんでした。」

「やっぱりか！」

雰囲気がいっぺんに、暴風雨の外界と同調するように暗くなった。

「誠さんには、あの浮浪者のたまり場から、ここに誘導してもらった。」

本当に感謝している。」

「そして今日も、役所に直談判してくれて、ここを守ってもらったし……」

川夫が続けて言った。

「本当にそう、感謝しているわ。」

川子も続いた。

「本当にそうだね、おまけに誠さんって、ハンサムだし。」
ローザが言うと、

「えっ……」

とローザと目線を合わせてロングが言うと……

次の瞬間、ローザはロングの後頭部を平手打ちした。

変わらずに、バシー！という音がした。

「ロングちゃん、話しの流れでしょう……」
とロングの頭を撫で回した。

ロングは涙目である。

一同、笑った。

しかし笑い声は、暴風雨の音で、掻き消された。

「皆さん、僕は皆さんの元から離れません。」

「本当か！」

「本当ですか！」

一同、矢継ぎ早に言葉を発した。

「もちろんです。」

それどころか、一段上の場所に戻りましょう。」

「一段上の場所？」

一同は、理解出来るはずも無かった。

「皆さんには、今まで黙っていて、申し訳ございませんでした。」

皆、誠の眼に集中した。

「僕は、タケザキという会社で、人材スカウトの仕事をしています。名前は田中誠と申します。」

「人材スカウト？なぜそんな方が、浮浪者の中にいるの？」

あきらが間髪入れずに言った。

「はい、皆さんが、わが社の人材の、対象だからです。」

「対象って言われても、浮浪者だよ！」

俺達は！

皆の顔に少しばかりの不信が入るのを、誠は認めた。

「我社の社長の、竹崎真一の考えるところです。」

「竹崎真一？どこかで聞いた名前だな？」

元、中小の社長である、あきらが首を傾げながら言った。

「はい、竹崎が行っている事業は、皆さんのように、逆境の中で、懸命に生き抜いているレベルの方々でないと、完全に理解出来ない

「いつものです。」

「誠さん、逆境？」

「逆境とは逆さの境目だよね？」

「今の俺達は世捨て人だよ！すでに死んでいるも同然！」

「戸籍も捨てたし、名前もこの世には無い。」

「国も、すでに死亡者として登録したはずさ！」

「元には戻れないんだ。」

「今の俺達の境遇は、屍しかばねの境目だ！」

「あきらめは言い終えると、ため息をついてうなだれた。」

「それはどのような仕事なの？」

「川子が尋ねた。」

「はい、人の思いやりを、お伝えする仕事です。」

「思いやり？誠さん、よく分からないけど、それってタコ部屋だったりして？」

「ロングは言った後に、しまった！とばかりに頭を防御するようにして、恐る恐るローザを見た。」

「ローザは頷いていた。」

「いえいえ、まず、すぐに働けるようにアパートを用意しております。」

雇用形態は正社員、給与は月給制です。

賞与は年二回、もちろん雇用保険もあります。

ご事情は千差万別ですので、リセットする法的な手段は、会社が完全にバックアップ致します。」

皆の眼が輝いて行くのが分かった。

「よろしければ、これから実際に会社を見て頂いて、ご判断願えればと存じます。」

今日は社長の竹崎が在社していますので、詳細を聞いて頂いて、もし”自分には向いていない”と判断なされたなら、その時にはきっぱりとお断り下さい。」

言い終わると、俯いていたあきらが、熟考したように口を開いた。

「誠さん、執こいようだけど、俺達は世捨て人だよ。」

いくら社長の竹崎さんがお人よしだとしても、俺達を採用してくれる訳はないよ。」

雨は小降りになり、風も弱まっていた。

「そうね、しかし久しぶりに夢を見させてもらったわ。」

あけみが立ち上がって、少しだけ、窓を開けた。

プレハブに充満していた空気を、少しひんやりとした風が一新して行った。

「そうね、しかし誠さんの話しは夢があるわ、頑張って下さいね。」

ローザも付け足した。

誠は、皆の顔を微笑みながら、見つめた。

そして一度、深呼吸をして言った。

「採用の権限は僕にあります。」

皆、顔を上げた。

そして、少し語尾を上げて誠は続けた。

「皆さんを採用致します。
面接は合格です。」

皆、口を開けた。

皆、誠の迫力に圧された。

続けて誠は、魂から湧いて来る言葉を発した。

「現実を、より良い高みに上げるのは、皆さんの決断次第です！」

皆、沈黙した。

その時、スーツに忍ばせていた携帯が鳴った。

竹崎からであつた。

誠が持参している携帯は、竹崎との連絡用だけの物であり、決して竹崎からは掛けないという決め事になっていた。

慌てて、皆に失礼を詫び、携帯に出た。

「はい、はい？はい！」

それだけ言うと誠は通話を断った。

「ところで…」

皆さん…」

誠は、また皆の眼を見て言った。

「ご決断は…」

いかがですか？」

皆、お互いを見回した。

そして、あきらが…

「皆、聞くだけ聞くか？」

と言うと、一同深く頷いた。

「ありがとうございます。」

誠は、ここへ来て初めて、安堵の気持ちを噛み締めた。

これで六人の魂が、救われた。

込み上げて来るものを、誠は懸命に堪えた。

「今、社長から言付けがありまして、皆さんを案内するために、これからマイクロバスでここに来るそうです。」

「えっ！社長自らですか！」

あけみが言つと、皆も恐縮したようである。

「ところで誠さん、竹崎っていう社長さんなんだけど、怖い人？」

ロングが言つた。

誠は笑つて

「心配しなくて大丈夫ですよ。

夏の暑さよりも、心が篤い方ですから。」

ロングは誠に親指を突き出して、

「オッケー！」と合図した。

誠も同じ仕草をした。

「あと、皆さんはサコーズって会社ご存知ですか？」

誠は尋ねた。

「サコーズ？」

ローザが言った。

「あのサコーズ？」

川子が続いた。

「一流企業の、あのサコーズ？かい？」

川夫も続いた。

「誠さん、浮浪者だって知ってますよ、サコーズ！」

あけみも続けた。

「誠さん、サコーズは誰でも知っているけど、それがどうしたの？」
あきらが質問してきた。

「いえいえ、それじゃ手っ取り早いです。」

竹崎真一は、サコーズの会長でもありますから。」

六人は腰を抜かすように、その場で硬直した。

「ま、まことさん！あのカリスマ社長だった竹崎社長かね！」

あきらが驚いていうと、

「やはりご存知でしたか。」

はいその竹崎です。」

「おい！ロング！その人は、超が着くほどの恐い人だ！」

「え？えっ！」

ロングはローザに抱き着いた。

ローザもロングにしがみついている。

「しかし、本物の人物だ、俺が唯一尊敬している人でもある。」
あきらが、しみじみと言葉を確認するように言った。

「ロングさん、竹崎は政治家とマスコミには噛み付きませんが、弱い立場の人には、神様のように優しい人ですよ。」

言うとかップルは、お互い背中をさすりながら、安堵の表情で見つめ合った。

「マスコミが、新社長の就任会見の凄んでいる写真を、使いまくりましたからね。」

あきらは大きく頷いた。

そして誠に対して、

「誠さん、決めました。」

俺はタケザキにお世話になる。
いつから働けるかな？」

「分かりました。」

今日からアパートに住めるように、直ぐに手配します。」

「誠さん、二つお願いします。」

間を置かずに、川夫が告げた。

「了解しました。」

と誠は携帯を取り出して、経理の亜利沙に連絡を取った。

通信音が流れている間に、ロングが

「誠さん。」

亜利沙に告げる部屋数が決まった。

抱き合っていたロングとローザが、まるで記念写真でも撮るように、Vサインでなく、指を三本突き出していた。

誠は、親指を立てて、二人に合図した。

二人も同じポーズをした。

「亜利沙さん、三部屋お願いします。」

亜利沙は、機転が利く女である。

アパートの手配だけでなく、電気、ガス、水道の手配はもちろん、寝具用具のとりあえずのレンタル、かつ生活準備品を買ったために、竹崎に、途中で買い物に寄るようをお願いした。

また雑貨一覧のコピーまでも、竹崎に渡したという。

皆にその事を告げ、先程、駅ビルで下ろしたお金を、封筒に入れて三組の男女に渡した。

「これは会社からの、入社祝いです。これに必要な物を買って下さい。」

とそれぞれの女性陣に渡した。

予期せぬ事に、皆、恐縮して中身を確認して皆、驚愕した。

「ご！五十万！」

「はい、竹崎の好意です。ちょうど、これから竹崎に会えますから、礼が遅れなくて良かったですね。」

三組の男女は、お互い顔を見合わせた。そして皆、手を繋ぎあった。

しばらくの時間、下を向いていた。

カーペットに、12個の瞳から流れ落ちる涙も、しばらく続いた。

久しぶりに味わう、人からの好意が嬉しかったのだ。

誠は、皆に背を向け、時が経つのを待った。

先程、僕は、

「面接は合格です。」
と皆に言った。

「あの日、竹崎から言われた事を、そのまま言ってたな。」

誠は笑ってしまった。

「師匠に似てきたか！」

思えば、あれから俺の人生は変わった。

次はこの人達の番だ。」

と独白していた所に、ポンと肩を叩かれた。

「誠さん、社長は何時頃、到着するのかな？」

あきらが、今まで見たことはない、晴れやかな表情で言った。

「そうですね？一時間はかかるでしょうか？」

それまで、皆さんは荷物の整理ですね。」

皆、一同に晴れやかな表情である。

「これから私達は、社長さんや、誠さん、先程の優しい経理の方達
がいるタケザキの為に、身を粉にして働くわよ！

このご恩に応えなくっちゃ！」

あけみは、いつものように顔面神経痛の顔半分を髪で隠し、

両手を前に出して、掌を合わせた。

いつも笑顔は出さない人ではあるが、この日、初めて笑顔が誠に見えた気がした。

と、

その時、

開けられた窓から、清々しい一陣の風が、

あけみの、

いつも顔を隠している髪を、
持ち上げた。

風は、

透明な指の形となって、

最初にあけみの頬を撫でて、
髪を外側からなぞった。

そして、

内側へと

スーッと抜けて行き、

波打ってから、

ゆっくりと、

顔に

優しく収まった。

それは一瞬であったため、誠のいる位置からしか見届けられなかった。

誠は、息が詰まるほどの感動を受けた。

「奇跡だ！顔面神経痛が治っている！」

誠は窓辺から、外を眺めた。

しばらく、あけみが投げかけた笑顔の美しさに感動していた。

誠は、心を落ち着かせ、この奇跡を、早く兄であるあきらに知らせようと振り向いた時、そこは、狂騒が始まっていた。

「さあ、皆、社長に嫌われないように！まずは体を拭こう！」

あきらは皆にいう。

「下着は洗ったのが、それぞれのカゴに入っているわ！」
あけみが続く。

「あー！口紅、赤色買っとけはよかった！」

川子が焦りながら言う。

「誠さん！ヒゲは剃ったほうがいいかな？」

川夫が言う。

「川夫さん、ロングも一緒に外でヒゲを剃ろう！」
あきらは男性陣を促した。

「そうして下さい！私たち女性陣は中で、体を拭くから！」
川子が言う。

「ロング！覗くんじゃないわよ！」

とローザがロングに凄むと、誠を含む男性陣は苦笑いとともに、こそそとプレハブを出た。

球のような大きな雲は、変わらずに天上で動めいていたが、今、雨は小降りであった。

ゆつくりと身支度をする機会を与えているように感じられた。

風も休止していた。

皆、一様に、持っているもので、最高の正装をした。

片付けが終わり、各々、荷物を袋やカバンに納めた。

プレハブの中は何も無くなった。

各々、プレハブの中を、別れを惜しむように、隅々まで記憶の中に刻むように見渡した。

ローザが突然、体を回転させて歌いだした。

クラシックバレエを過去に習っていた事が、あきらであるような、品の作りと艶やかさであった。

歌は、驚くほど、上手かった。

これも誰かに着いて、習得したであろう、プロ級の澄み渡る声であった。

ローザも、どうしても抜け出せない環境から一転して、ここから飛び越えられるかもしれない希望の前で、自ずと歌が出てきたと思う。それは魂から湧き出た歌であつた。

ロングが歌に合わせて、手でギターを弾く真似をして、擬音で伴奏した。

バラードであつた。

夢を持って行きましょう。

悲しい時こそ、微笑み忘れずに、

胸に希望の明かりを灯し、あきらめないで、今を生きましょう

く たとえ嘆きの谷を歩んでもく 道は峠を必ず超えますからく

皆に、その美声と歌詞が心に沁みて行つた。

皆、泣いていた。

歌い終えたローザは、最後にバシッとロングの後頭部を叩いた。

笑いと共に、拍手で二人を称えた。

「ローザちゃん！ありがとう！」

川子が目頭を押さえながら言つと、

「ブラボー！」

とあけみが両手を上げて、歓声をあげた時に、垂れた髪も一緒に持

ち上がった。

あけみの顔があらわになった。

「あけみさん！顔が治っているわ！」

川子が、あけみに抱き着いた。

あけみは慌てて顔を覆った。

「うそでしょ！」

「あけみねえさん！本当よ！これを見て！」

ローザが鏡を、あけみに渡した。

あけみは、下を向いた。

恐る恐る、手を顔から離し、ローザから渡された鏡を、手にした。

鏡は震えながら、あけみの顔を写した。

鏡に涙がいつぺんに滴っていった。

あけみは、ゆつくりと顔を上げ、あきらを探した。

あきらは泣いていた。

あきらは、あけみを抱きしめた。

「妹よ！今まで、苦勞を掛けたね、ごめんな！」

皆、二人に拍手を送った。

浮浪者という、”決して浮かび上がることがない”、という強迫観念から逃れた今、病も引いて行った。

皆、プレハブに一例して、外に出た時に、土手から、草をザワザワと音を起てて、下りて来る人がいた。

竹崎である。

「やあ！皆さん！」

小走りに駆け降りて来て、

「皆さん！遅くなりました！
私が竹崎です！」

竹崎は作業服のままで、額には汗を流して皆と握手した。

六人はそのスピードというか、せっかちというか、竹崎のバイタリティの前で、面食らった表情である。

「今回は、私どものために、手を貸して頂けるという事で、本当に感謝致します。」

まあ、自己紹介は車の中ですという事で…
荷物はこれですか？」

と、次には竹崎は、皆の袋とカバンを奪うように手にした。

「さあ！行きますか！

途中で買い物もありますからね！

」

「はっ！はい！」

皆は、圧倒されながらマイクロバスへ促された。

誠はニコニコと事を眺めていた。

「誠君、後はよろしく！」

あと、井上祐一君が会社に訪ねて来てて、一緒に来たんだよ。

まあ、積もる話もあるだろうから、後はよろしく！」

と土手の上を見ると、祐一が微笑み、片手を上げて立っていた。

誠は予期せぬ、祐一の来訪に心臓が破裂しそうであった。

キュルキュル！と音を出して、マイクロバスは発進して行った。

竹崎が現れて、車が発するまで、五分と掛かっていない。

絶滅から、期待へ、そして好転へ向かって行く過程で、幸運の女神は、感傷すら与えない程のスピードで召し抱えて行った。

誠は、素早く、祐一をプレハブに招き入れると、お茶の用意のため、残して置いた紙コップを手にした。

「誠君、再開を祝ってこれにしよう。」

と祐一は手にしていたコンビニ袋から、缶ビールを取り出した。

「祐一さん、ご無沙汰いたしておりました。

祐一さん、色々ありがとうございます。」

と誠は、竹崎を紹介して頂いた事と、それに尽力してくれた祐一の慈愛に、心からお礼を言った。

「堅苦しい事はいって！

それよりも、早く乾杯しよう。」

二人は一気に、ビールを飲み干した。

一仕事を終えた誠の喉を、冷たいビールが爽やかに流れて行く。

湿気があるといっても夏である。

冷たいビールは、やり遂げた充足感の心に、至極の憂いを与えた。

祐一も「ふっ！美味い！」

と言つて、昔の接待の時に、誠とグラスを傾けあつた頃を思い出していた。

とその時、外は灰色の雲の固まりが、耐え切れなくなった膨張を止めることなく、大粒の固まりを地に向けて、叩き付けた。

風も辛抱していたように、吹き荒れた。

プレハブの壁に、浮力で回転させながら、また機関銃の如く、打ち込まれて行った。

六人の再出発の儀式の時だけは、情けをかけて、止んであげていた、という切り替わりであった。

祐一は久しぶりに見る、誠に対して、

（礼儀正さからくる、優しさは変わらずだな、前よりも痩せたが、遅くなったな！）と祐一は思った。

動作の機敏さは、竹崎に似てきたな、とも感じた。

祐一にとって、誠は更に好感度を増して行った。

「竹崎さんに掛かったら、プレハブ生活との別れのセンチな気持ちも、あったもんじゃないね。」

祐一は誠のコップにビールを注ぎながら言った。

誠は恐縮しながら、祐一に返杯をして、

「社長はひたすらに、次しかありませんから。」

笑いながら二人は、先ほどの竹崎のせわしなさと、その迫力に驚いた六人の表情を思いだし、大声を出して笑った。

「しかし、誠君、大変な仕事に就いたね。
順調かい？という一般的な挨拶も慮^{おもんば}るけど。」

祐一は、誠に微笑んで、少し申し訳なさそうに言った。

「いえいえ、祐一さんには感謝しています。

社長いわく、これは仕事ではなく使命だ、という貴重な役目を頂きました。

何だか分かりませんが、ここに知らない間に導かれた、と感じるんです。

感謝しています。」

誠は祐一に、再度、頭を下げた。

二人は、二本目の缶ビールをお互い注ぎ合った。

暗いプレハブを一瞬、輝かせる稲光が走った。

祐一は、今、誠が言った「導き」という言葉に敏感になった。

それまで祐一の心で確信していた観念を、誠が代弁したように思った。

（導きか！まさしくその通りだ！今、俺は亜利沙という最愛の伴侶を得た。

それは俺にとっては導きであつた。

しかし、その過程で誠君！君に真由美という貧乏くじを引かせてしまった。

誠君！すまん！）

祐一は心で、誠に頭を下げた。

「誠君、何日くらい、家に帰ってないんだい？」

「そうですね？」

誠は祐一に今日の日付を聞いた。

「二ヶ月ですね。」

「そうか。」

仕事が忙しいのは分かるが、たまにはリサ孝行もしてあげてよ。」

誠は、はいと言うと、照れ笑いを浮かべた。

（奥さんの手料理で栄養付けて。）

と祐一は言おうとしたが、止めた。

「今日は、リサの誕生日だよ。」

誠は「あー！」と唸った。

祐一は誠の肩をポンツと軽く叩き、大声で笑った。

二人は三本目の缶ビールを開けた。
そして祐一は、

「ところで誠君の、前の会社なんだが。」
と、誠には、触れてほしくない領域に話を移した。

そして祐一は、驚く言葉をもって切り出した。

「誠君、最近、変な男に後を付け回されたりしていないか？」

「祐一さん、いえ、そういった事はありません。
浮浪者を追い回す人間は、いないでしょう？」

「そうか、それならいいんだ。」

「何かあつたんですか？」

稲光が、回数を徐々に増し、強烈な音を外界に轟かせ始めた。

光りは二人の顔を、フラッシュバックさせ、青白い光りの中に時折、鮮明に浮かび上がらせた。

「君を風評被害に遭わせた、同期の田下部長だが…」

祐一の顔が、一瞬光り、今までの優しい表情が、次のフラッシュバックの時に、鬼の血相になった。

光りは青白く、誠の眼の奥にある、心眼に焼き付いて行った。

「田下部長は、失脚したよ。」

この言葉が終わったと思った瞬間、地に落ちたであろう、稲妻の爆音がした。

「…田下が…失脚…ですか…？」

「うん！懲戒解雇だ。」

その上司の浮佐専務は平部長に降格だ。」

この言葉が終わった後の祐一は、いつも通りの、温和な顔をフラッシュバックの光りに映していた。

そのいきさつを、祐一は誠に語り出した。

その頃、流れる川の上流では、大雨警報が発令された。

橋の下にあるプレハブではあるが、川そのものからは、かなりの距離を有していて、上流から大きい鉄砲水が来ても、浸水しないという、国が試算した場所であった。

第三章・因果応報

「それでは、これにて会議を終了いたします。」

祐一は、常務取締役役に昇進し、社内の取締役会議では、新たな進行役の任を与えられていた。

その日は、月初めの営業報告の定例会であつた。

慣れない進行役を無事に終えて、資料を整えて会議室を出て行くとした時に、秋山専務が、資料に眼を向けたまま、祐一に声をかけた。

秋山は、祐一の元上司であり、歳は50である。

営業部長という現場上がりの秋山の言動は、卓上の理論しか考えられないデスク組の役員達には、煙たがれる存在ではあつたが、秋山という人間は決して部下を見捨てたり、社員教育を放棄することなく、常に優しく見守ってくれる役員であつた。よつて彼を尊敬の念で見る者は多い。

「井上常務、ちょっといいかな？」

「は、はい。」

祐一も、末端ではあるが、役員となり、秋山とは表面上は、上司と部下ではないが、祐一には唯一の尊敬出来る、会社での先輩である。

秋山から、「井上常務」と言われる事は、正直言って、こそばゆい心境であつた。

祐一は、秋山の横に座つた。

円卓テーブルには、二人以外は、誰もいなくなつた。

秋山は資料から眼を離し、祐一以外、誰も居ないことを確認すると、祐一の横にピッタリとくつついて、小声で言つた。

「実はね、ダイアリ堂の、田中誠君だが……会社を辞めたのは、知っているかい？」

祐一は驚いた。
初耳だつたからだ。

「本当ですか！」

「うん、実は、一昨日、会社に退社の挨拶に来たらしい。
一昨日は、あいにく僕も君もシンポジウムで出張だつたじゃないか。
その時は課長の春山君が対応したんだが、「お世話になりました、
皆さんによりしくお伝えください。」とだけ言つて、足早に出て行
つたらしいんだ。」

「退社の理由は何なんですか！」

「うん……それなんだ。
で、対応した春山君に、
彼は理由は何と話したか？」

と聞いてみたんだが、驚いた事実が分かったんだ。」

「驚いた事実とは？」

「うん、彼は春山君には、＜自己都合＞と言っただけなんだが、その言葉が出て来る時には、必ずいかなんがたい理由があるものだ。」

祐一は、誠が何者かの罫に嵌^はまったと直感した。

「このような事は、我々、取締役の耳にまで届くのはいつも遅いものだが、春山君に、詳しく問いただしてみると、春山君以下の社員達に、『ダイアリ堂の田中誠は、社内不倫をしている。』と噂を立てられていたらしい。」

「えっ！そんな馬鹿な！」

「おうよ！俺も君も、彼とは何年もの付き合いだ。彼の人となりは知っている。」

でだ井上君、更に春山君に、事の内容を聞いてみたところ、ダイアリ堂の、田下部長が、我社だけではなく、他の取引先にも吹聴したらしいんだ。」

祐一は怒りが込み上げて来た。手に持っていた資料が、手の平の中でクシャクシャになった。

「ダイアリ堂も派閥が複雑だ。」

田下部長は、浮作専務のブレーンだ。

その線で、田中誠君をリストラに追い込んだと思う。

何故、確信があるかというと、ダイアリ堂の荒井副社長とは、俺と大学が一緒で、旧知の仲だ。

「秋山専務、であれば荒井副社長は、なぜに田中誠君を救済できなかったのですか？」

「そこなんだ、問題は。」

秋山は、一つため息をついた。
で、言葉を続けた。

「会社の金を、女のために使い込んだという、でっちあげを田下と浮作は作って、社長に進言したらしい。
それも証拠となる改ざん書と、二人の密会写真を携えてだ。
とすれば、副社長も田中君を引き留めることは出来ない。」

祐一は秋山に懇願した。

「秋山専務、我社も彼の会社も、田中君の力があって、お互いが相乗効果を生み、業績が上がりました。
彼の細かい気配りで、一緒に同行した会社と、ほとんど取引を成功させて来ました。」

我が社の第一の協力企業のダイアリ堂を、ここまで押し上げたのは、田中君の陰の力があつたはずです。」

「それは俺も認めている。」

「なんとかありませんか？」

祐一の懇願は、秋山の良心に深く染み込んで行った。

「井上君、何せ協力企業だとしても、他社の中での事だ。俺達には介入する資格が無い。」

祐一の手の平の中にあつた資料が、バリバリと音を立て、さらにクシャクシャになった。

それまで、腕組みをして、目をつむっていた秋山が、目を開き、祐一を見つめて言った。

「大体、今の社会全体が、臭いものにはフタをして、フタをしたものの勝ちになっている。」

こういう事が、まかり通るってのが、シャクに障るわな！」

正義感から来る、言動と行動力で、人望のある、秋山の胆力が唸った。

「井上君、俺はある女に会おうと思っている。」

「女ですか？」

「そう、田下の元愛人で、里美という女だ。」

この女が総てを知っている。

ダイアリ堂の社長も、マスコミに嗅ぎ付けられるのを恐れているのか知らんが、事なかれを貫いている。

我々は、介入は出来ないが、ダイアリ堂側に、事の真相を知らせてあげても、バチは当たらんだろう。」

秋山は自分に言い聞かせるように、大きく頷いた。

実は、昨日、ダイアリ堂の荒井副社長と会って、話を聞いて来た

んだ。

それによると、

田下は、経理主任の里美と深い仲になり、里美を使って領収書の巧妙な改ざんをしていたみたいなんだ。

共犯とされる里美は、田下のそうした行動に対して、関係を断ち切るべく、田中誠君に相談するようになった。

その相談現場を、田下は見たんじゃないかな？

田下は、自分の不正を田中誠君のせいにした。」

「罣を掛けるに至る原因は、嫉妬ですか？」

「多分な？」

まあ、人間が罪を犯すときは単純な動機つてのが多いからね！
で、田下は半ば里美を脅すように、手切れ金を渡して、直ぐに里美に退職をさせた。」

「しかし里美という女は、逆に田下を訴えなかったんですか？」

「ははは！」

と秋山は笑って、

「そこでご上司様の、浮佐専務の登場だ。

浮佐は、田中君の力を知っていたんだよ。

おまけに副社長が、田中君を買っている。

ようは、近い将来、自分の地位が危ないと思っただろう。

浮佐の自分の地位の為の保身と、田下の嫉妬の怨みと不正を免れる為の思惑が一致した企みだな。」

祐一は、何故か、低俗な推理小説を読まされている感覚に落ちていた。

こつも人間とは、小狡いものか、また現実にはこのような事が起こったことに、怒りが起こった。

会議室はビルの最上階にあり、春の心地好い風と、陽光に包まれていた。

『人を蹴落とす人間に対しても、また善良な人間に対しても、何故、平等に風は優しく包み、陽光は降り注ぐのか？』

祐一はそんな事を、新たな発見のように思った。

「浮佐と田下は、改ざんされた領収書一式のコピーと、田中誠と、里美の密会の写真を、副社長を飛び越えて、社長に渡して、さも温情ある判断を、という言葉で、詰め寄った。

その時には、すでに真相を知る里美は、退社してしていない。

社長は、田中君に真相を問うたが、田中君が、やりましたと言っわけがない。

『社長から、真相を問われるとは思ってもおりませんでした。』

と田中君は、辞表を出したらしい。

しかし、もうその時には、浮佐と田下が、社内外にて、吹聴していたから、もう田中君は居づらかったと思うが。」

「秋山専務、その里美という女には、僕に会わせて下さい。」
と祐一は秋山に言った。

「君がか？」

「はい、実は僕の一人娘のリサにとって、田中誠君は、義理の父親であります。」

「…はあ？」

「実は、田中君の再婚した相手は、僕の前の妻の真由美です。」

「…えっ？」

ちよつと待つてね…

…そうだったのか！

「

秋山は、驚いた風であつたが、祐一の肩をポンツと叩いて、

「君達も、ごちゃごちゃしているね！」

秋山は笑つた。

祐一も頭に手をやり、笑つた。

秋山は、

「しかし、最悪な事を考えると、真相次第では、田下と浮佐は会社をクビになるかも知れない。

その時に恐いのが、報復だ。

君を巻き添えにはしたくない。」

秋山は、豪放に見えて、実は緻密な思考をする男である。最悪なる事も、回路にすでにインプットされていた。

「秋山専務、もう聞いてしまった以上は戻れません。

しかし、ここで秋山専務と、僕のどちらに、天秤をかけて、事にあらなければならぬかと言いますと、僕の方でしょう。

田中君を守るという事は、愛娘のリサを守るという事ですから。」

秋山は真剣な眼差しから、一つ笑みを浮かべた後に、

「報復が遂行されたとして心配なのは君の、今の奥さんの事だよ。」

「彼女は身籠っています。実家に帰します。実家にはご両親が付いていますから。」

「…うむ！」

秋山は腕組みをしていた。

「秋山専務、考え過ぎですよ。

そのような姑息な男に、そのような勇氣はありませんから。」

「まあ、杞憂であればいいのだが…」

「ところで、里美と会う手配ですか？」

「うん、里美という女とて、バカではあるまい。

問題を元に戻すようなアポイントには、耳にも貸さないだろう。そこで、これは俺の勘なんだが…」

「…はい？」

「俺はその里美という女は、田中誠君に好意を抱いたんじゃないかと思うんだ。」

「相談したということは、そうでしょうね。」

「であれば、案外、田中君の事で…
と言えば、会ってくれそうに思うんだ。」

時間軸を考えると、里美が退職した後に、田中誠君は辞表を提出した。

里美が辞めて、二週間後である。
退社後の色々な手続きには、約一ヶ月くらいの時間が必要で、その間に田中誠の退職は耳に入ってきて来ているはずである。

「里美という女が、どんなに阿婆擦れ（アバズレ）であっても、一度は好意を示した男の事は気になっていると思う。
少しでも、女としての情があるなら、近況ぐらいは知りたい、と思うはずだ。」

祐一は大きく頷いた。

「事の進行は慎重にしよう。」

秋山は手帳を開き、メモ書きを祐一に渡した。

そこには、今、里美が住んでいる住所と、電話番号が記されていた。

「これは個人情報だから、慎重に！」

秋山と祐一は会議室を、わざと別々に出た。

祐一は会議室の窓を閉めようと、窓辺へ歩きかけると、カーテンをなびかせるほどの、晩春の風が少し汗ばむ肌に、心地好い清涼を与えた。

「この風は、悪人にも吹くんだよな。」

言い尽くせない不平等に、怒りが沸いて来た。

しかし、その矛先がどこに向けて良いのか分からないもどかしさが、なおさら怒りに歯車をかけた。

祐一は数回、深く深呼吸をして、心を平常にして、遅れて会議室を出た。

里美

祐一の会社から数本道路を隔てた、人目に付きやすい喫茶店で、祐一は里美を待っていた。

時間は夕刻にした。

この時間は、取り引き先の、ダイアリ堂の人間は、夕方のミーティングがあるため、一人として、会社には来ないこと。

わざとウィンドウ側のテーブルを選んだのは、例え祐一の会社の人間に見られようと、怪しい会合ではないということをアピールするためであった。

里美にしても、住んでいる家の近くでないことは、ありがたい事である。

祐一にコーヒーが運ばれて来たときに、里美が現れた。

席に着き、サングラスと帽子を脱いだ素顔からは、“愛人”という、到底、後ろめたい”場所”に居た女には見えなかった。

歳は二十代半ばの、どこにでもいる”お嬢さん”であった。

電話で里美は、大体の”真実”を誠に打ち明けていた。

もちろん最初から、祐一に心を開いた訳ではなかった。

「田中誠さんはご存知ですね？」

と電話口で話してから、里美は一転した。

「私の為に犠牲になっただんですか？」

というなり、嗚咽して、電話を続ける事が困難になってしまった。

「僕は、貴方と田中誠さんの味方です。」

と待ち合わせを一方的に決めた感じで、今、こうして約束した場所で、二人は対座している。

里美はココアを注文した。

里美の、まだ女にはなりきれていない、歳の割には童顔の表情に、ココアはあっていると祐一は思った。

祐一は名刺を渡すと、

「田中さんに、相談した時に、井上祐一さんの話題が、二回ほど出たんですよ。」

と里美はまるで少女のように笑った。

祐一も微笑みを返した。

誠が、祐一の事に関して、あらかじめ処方箋を張ってくれていたおかげで、里美の祐一に対する警戒心は、あっという間に取れた。

多少の沈黙の後、里美は関を切ったように、喋り出した。

「この間は、上手く喋れませんでした、今日は証拠も用意しまし

た。」

「証拠？」

「はい、改ざんする前の領収書と、改ざんに使用した報告書の捏造前のものと、捏造した後のもののコピーを持って来ました。

それと、田下部長が、私に指示した日時と時間も、思い出せる限りの記録帳も入っています。」

先ほどまではココアを、そのあどけない口元へ運んでいた少女が、今、凜とした口調で語りはじめた様は、まさしく恋人の仇を、これから打つ、という凄みに変わった。

昨日まで、純粹な夢を見ていた少女が、理不尽がまかり通る大人の世界を、短期間で経験したのだ。

心の苦しみが化けた怨念は、今、静かに復讐へと向かって行った。

糊の効いた、白いワイシャツが、仇討ちの装束のように潔く感じた。

二日前の電話では、涙で話しも出来なかった少女が、今は美しい凜とした凄みで、祐一の前に対座している。

「これが証拠です。」

里美はB4版の封書を、祐一に渡した。

そして、あどけない少女は祐一の眼を見つめ、二時間、言葉と自らの心を確認しながら語った。

祐一もそれに応えた。

メモを取る以外は、優しく里美の眼を見て、聞いた。

話を聞いて行くうちに、里美に対して哀れを感じて行った。

今、この年代の女性であるなら、怨みを口にするのではなく、対座しているのが恋人であったり、女友達であり、話題は趣味の話しや、今観てきた映画の話題であるべきである。

しかし、この里美に与えられた運命は、変な男に捕まって、女性の人生の中で一番輝く年代を、グチャグチャにされた、その怨み節であつた。

里美は、

「私は田下部長の事を、二人の時は、敦さんと呼んでいました。私には初めての年上の恋人でした。」から始まつた。

愛人関係とばかり思っていた祐一は、かなり驚いたが、感情を殺して、平素を装つた。

里美が語つた二時間ばかりの話を要約すると次の次第である。

里美は退職するまで、三年間経理部に所属した。

経理部は、当初十人の大所帯であつたが、田中誠と、田下敦が同時に部長に昇進すると、担当社員、各二人づつの割り当てで、個別の部屋をもらった。

会社側は二人を競争させる事で、会社に活気を与える計算だつた。

これにより、田下は、表面上では、功績がすでにある誠に対して敬したが、心では、蹴落とす対象として、常に、ぎらつく刃を胸にしまっていた。

誠は田下を良き同僚として、認めていた。

田下が、そのような気持ちでいるなどとは思ってもいなかった。

それぞれの部屋には、正社員が各一人と、派遣社員が各一人という配属であったが、誠の部屋からは、常に笑い声が溢れ、担当者には辞めなかった。

しかし、田下の部屋は笑い声など無く、従業員もすぐに辞めて行った。

上司の人間力が、顕著に表れていた。

そしてとうとう里美が、田下の担当経理に回された。

里美にとっての、不幸の始まりであった。

里美は、仕事の呑み込みが早かった。

商品を把握することよりも、経理という仕事の広義な基本を早くに会得したため、どこの部署に配属されても、そつなくこなす技を持っていた。

経理部は女性で占めていた。

里美は痩せてもなく、太ってもいなかった。

ウエストは細く、胸は適度に膨らみ、スカートから伸びた長い脚は、その中の女性達にはない美しさを持っていた。特に里美の笑い声は、回りにいる同僚の心を和ませた。

会社に入入りしていた人間からも、噂になるほど愛くるしい笑い声は評判であつた。

よつて里美は、数人の先輩から疎まれた。

田下の部署に配属になってからは、笑い声は聞かなくなっていた。

里美に付いていた派遣会社の女子も、里美の性格と美貌に、一種の憧憬はあつたが、先輩女子に睨まれるのを嫌い、敬遠した。

里美は次第に孤独になつて行つた。

更に、そこに田下が、彼の”癖”をもつて里美に近付いて来た。

里美に対する、数人の先輩女子からの疎外感は、勢いを増して激しくなつて行つた。

田下の”癖”とは、眼球から入る視界の映像とは別に、彼の肉体から離れた場所にある、＜陶酔＞を映すカメラがあることだった。

田下は、背徳の中で”いけない男”を演じる事に＜陶酔＞を覚えた。

そのシーンは、パターンがあり、まず大人の雰囲気ジャズが流れるバーで、悩みを聞き、若い女性の良い理解者を演じる。

相手が知らないカクテルを注文してやり、徹底的に”大人の男”を

演じるのだ。

そして、演技のクライマックスの仕上げは、ベッドの上で、官能な声を出させる事で、自らの＜陶醉＞の極みに持って行く事だった。

肉体から離れた場所にある、カメラから覗く彼自身は＜大人の魅力を称えた、愁いのあるいい男＞であった。

愛のない営みは、性欲しかない男にとっては、ここで完結される。

こうして田下は、派遣会社の若い女性と共演し、欲求が満足されると、直ぐに飽きるのが常であった。

目的が完遂した後の行動は、噂の発覚がないように、手切れ金を渡して退職させるのを常とした。

里美は純粋な気持ちから、愛されていると思っていたが、演技は作り物の”虚像”を露呈するのに、時間はかからなかった。

里美も、少女という経験値の無さから、田下の演技に騙され、肌を許してしまった事を後悔した。

里美は、例え一時でも田下に好意を寄せた自分の未熟さを恥じた。

田下の唇がはい回った身体を、不潔な物とさえ思った。

田下は、自己満足に付き合わせた女達への、手切れ金の算出に困り、里美を利用する事を、思いついた。

田下の思惑は、いくら経験が浅いといえ、女性の感を凌駕することは出来ない。

里美は、田下から頼まれた稟議書の変更と、領収書の差し替えが、まさか不正であったとは夢にも思わなかった。

田下に問い詰めて判った時には、もう手遅れであった。

そして里美は、勇気を出して、人徳のある田中誠に相談した。

しかし、運悪く、この密会の場所の喫茶店から出て来た二人を、田下が目撃したのだ。

田下のく陶醉>が打ち崩され、ライバルの田中誠に対するく嫉妬>へと変わり、寝返ったと勘違いした”大人の男”であるべき包容力のある主役は”いけない男”となり、本性を現した心は、里美と誠に対する、報復心にすり替えられた。

田下は、里美に不正を告げた。

そしてすぐに、自らの隠蔽工作に動いた。

里美の口止めとして、同罪であると主張して脅した。

更に田下は、里美に携帯の画面を見せた。

そこに映っていたものは、田下との営みの時の、官能に悶える里美の全裸の映像であった。

里美は絶句した。

「卑怯者！」

と言って、携帯を取り上げるべく向かって行っただが、田下の平手が

鋭く頬に当たり、里美は鼻血を出し、床に崩れ落ちた。

田下は薄ら笑いを浮かべ、

「里美さん、俺達は同罪だ、この画像は高く売れるだろうな！」

里美は我慢していたが、悔し涙を止める程の強さは無かった。

「浮いた金の半分をあげるから、会社を辞めるんだ。

辞表を提出した時に、この画像のメモリーは渡すよ。」

泣き寝入りの強要であつた。

次に田下は、里美と誠のツーショットの写真を携帯で撮つた。

二人が喫茶店から出て来た時に、爽やかに片手を上げて微笑む誠と、それに対して微笑み返しを送る、里美のツーショットの写真である。

里美が、事のすべてを田中誠に話したとしたら、正義感の強い男を味方に付けた事になる。

田下は、その写真を大きくコピーした物を携えて、浮佐専務の所に走つた。

「専務：

実は、田中部長なのですが、内の山下里美君にちよっかいを出しているみたいなんですよ…」

いや、こういう事を進言するのは気が引けて…」

後ろめたく、専務の所で口止めして頂きたいんですが…」

田下は、例の写真を浮佐の前に出した。

浮佐は、薄ら笑いを浮かべた。

田下も、静かに同調の薄ら笑いを返した。

ここに、浮佐の地位を危ぶませる、田中誠への失脚へと導く思惑と、田下の不正の隠蔽と、ライバルを陥れるという二人の思惑が位置した。

悪のシナリオは何も苦労は無く、整った。

後は、噂を広め、里美に辞表を提出させれば、全てが上手く行く。

改ざんした書類を田中誠のせいにすれば、完全だ。

ある改ざんした領収書は、誠と田下の部署の合同プロジェクトのものであった。田中誠にも関連がある。

浮佐と田下の薄ら笑いが、専務室の豪華なテーブルの上で交差し、濁った都会の空気と同調して行った。

里美は、田下に対する、怨念の吐露が終わると、ふーと表情が、明るくなった。

俯いて、ココアに唇を近づける口元には、少女の憂いうつつむが宿っていた。

「話してくれてありがとう。辛かったね。」

「すっきりしました。」

と言って、里美は祐一の眼を見て、大声で笑った。

何者かに、取り付かれたような怨念の表情は、完全に浄化されたようであった。

「後、私の心配は田中部長の事だけです…」

「私は、逃げるようにして退職しましたが…」

田中部長が、お辞めになったと…聞いた時に…私、田下の策略だとピンと来ました…」

と里美は言った後に、付け足した。

「決して誤解の無いように、言いますけど、私と田中部長は決してやましい事は何一つありませんでした…」

ただ、田中部長とはお話しするだけで、心が洗われました。

田下に話してみる、という田中部長を止めたんですが…」

「やはり田中部長は、田下と話したと？」

「はい、『終わったことは眼をつぶる、ただこれからは過ちは犯すな！山下里美を巻き込むな！』と進言してくれたそうです。」

「なるほど。」

祐一は里美から渡された、B4版の封書を手に取ると、

「決して悪いようにはしませんからね。あと、田中誠さんは、たくさんの実績がありますから、再就職は心配なさらないで下さい。里美さん、あなたですよ。」

祐一は、里美に、

「万が一の事があるかもしれません。」

と祐一の携帯の番号と、妻の亜利沙の名前を教えた。

「万が一とは？」

里美が聞いた。

「田下の報復です。」

里美は、意外な言葉に笑った。

「いや！それは大丈夫だと思います。」

祐一も笑った。

二人が喫茶店を出たころには、もう暗くなっていた。

祐一は、タクシーで里美を見送ると、秋山専務に報告のために電話をした。

「おう、そうか！これからダイアリ堂の、荒井副社長と会う予定だが、君も来たまえ！」

と、祐一は繁華街の方へ足を進めた。

祐一は、繁華街の通りにある中華料理店に入ると、秋山専務と、ダイアリ堂の荒井副社長のいる個室に入った。

祐一と、ダイアリ堂の荒井副社長とは、もちろんお互いに協力会社同士であり、すでに顔見知りである。

ダイアリ堂は、森社長と、この荒井副社長と二人で創業した、会社であった。

はっきり言ってしまうと、この荒井副社長が、実質のダイアリ堂の最高権限者であった。

森社長は、身体が弱かった。特に二年前に、がんが早期発見で見つかったからは、不安という病も同時に巣作ってしまった。

森は荒井副社長に、信頼を寄せ、全てを任せた。

荒井も森社長の身体を気遣い、社長の権限を守りながら、会社を切り盛りしていた。

そのような中で、今回の田中誠に対する処遇に対して、浮佐という新任の専務が、副社長を飛び越えた超越行為は、一種の造反に近い行為である。

元々、浮佐は、荒井副社長から仕事の一から十までを、教えてもらった男である。

その浮佐を専務に昇格させたのも、荒井副社長であった。

専務に成り立ての浮佐は、功績という名目が欲しいが為に、独走したのだ。

功績は、「この件は荒井副社長が決めたのではなく、私こと、浮佐が決めた英断である。」

という事で良かったのだ。

中華料理店の室は、完全な個室になっていて、声が漏れる事は無かった。

一通り食事を終わると、祐一は先程まで、里美から聞いた事の一部始終を、ダイアリ堂の荒井副社長と、祐一の上司にあたる鈴木専務に話した。

二人は、口の大きい湯呑み茶碗に手をかけ、静かに聞いていた。

徐々に、二人は前屈みになり、眼は祐一から逸らすことはなかった。

明らかに、祐一の話が進むに連れて、二人の表情に、怒りが現れて来るのを、祐一は感じ取った。

「という事で、これがその証拠となるものです。」

と荒井副社長に、里美から預かったB4版の封書を手渡した。

荒井は、その中身を確認し、深いため息をついた。

「どうだい？証拠として十二分かい？」

大学の時の、友達同士である鈴木専務が、荒井副社長に言った。

「ああ、決定的だ。」

荒井は資料を封書にしまい込むと、お茶をひとくち、口に含んだ。そして眼を天に向け、すぐに下に移し、考えこんだ。

「なあ、決断は、すぐがいいぞ。

悪は早く、経ち消さねばならない。

ここで変な優しさを出したら、なおさら悪を助長させる事になる。」

鈴木は諭すように言った。

「ああ、分かっている。」

荒井の頭の中は、浮佐と田下の処遇のことはもう終わっていて、辞めた田中誠と、山下里美の事に移っていた。

「荒井副社長、俺達はいくまでも外野だ。

決めるのはそちら側だからね。」

鈴木は超越しない事を示した。

「まあ、処遇に関しては、サコーズの竹崎流で行くさ。」

荒井は快活に笑って応えた。

「おう、竹崎さんの後任社長選出の時の、英断ね!」

鈴木も手を打って、その言葉に満足した。

祐一はびつくりした。

サコーズの竹崎といえば、日本はともかく、海外の著名人からも、その仁徳の厚さで慕われている経済人である。

祐一も、もちろん知ってはいる。

おまけに大学の先輩でもある。

常に世界の将来の論調には必ず指名されて、有名雑誌には載る大学の先輩に対して、羨望の眼差しで眺めるだけの人である。

あまりにも掛け離れた、雲の上の人物であつた。

また、日本では竹崎の事を、「怖い人物」と思っている人が多い。それは、後任社長会見の時に撮られた写真が、あまりに凄みを効かせたものであつたからだ。

祐一も、そう思っていた。

「お二人とも、竹崎さんをご存知なんですか？」

「いや、そんなに親しくはないけど…」

一度だけ、竹崎さんがまだ社長の時に、異業種交流会で竹崎さんの講演を、俺達二人は聞いたことがあつたんだ。」

鈴木が言うと、

「その講演の後に、聞きたい事があつて、喫茶店で三人で話しを聞いてもらった。」

その頃も竹崎さんは、かなり忙しい身であつたと思うけど、二時間、真剣に話しをしてもええなな。」

荒井が懐かしそうに言うと、

「竹崎さんの笑顔には引き込まれたな！」

鈴木の言葉に、二人は深く頷いた。

そのあと、荒井は祐一に質問して来た。

井上君、田中誠君と山下里美さんを、もう一度ダイアリ堂に復帰させたいのだが…

名案はないですかね？」

祐一は言葉に詰まった。

冷静に考えても、”人間の口”の仕業である。

業界内の末端の、それも隅々までに、風評被害をばらまかれている現状で、例え潔白が証明された今でも、二人が復帰したとして、平常心で働ける環境は作れないだろう。

田中誠なら、まだともかく、山下里美に至っては、会社の近くを歩く事すら嫌悪するであろう。

祐一は、荒井副社長の問いに言葉が見つからなかった。

「井上君、すまん。」

と、荒井は言った。

そして、深い思慮を巡らした後、頭を祐一に下げ、懇願した。

「井上君、サコーズの竹崎さんに、田中君の再就職をお願いしてももらえないだろうか？」

もちろん、僕からも竹崎さんをお願いしようと思う。

君と大学が一緒ということで、話しはしてもらえと思う。」

祐一は今の荒井の言葉を、最初は理解出来なかったが、頭で、文脈

をなぞると、一瞬に辺りが明るくなった錯覚に落ちていった。

「田中誠君は正直で素直だ。

まあ、それが過ぎて今回は罨に嵌まったが、彼の人柄は皆に好かれる。

彼の良いところを、ダイアリ堂では活かせなかった。」

荒井は再び、頭を下げた。それは祐一に対してではなく、田中誠に對してであった。

「僕では役不足であった。

しかし、竹崎さんの元でなら、業界も違うし、田中君のような、誠実な男は生きると思う。」

荒井は再び、祐一に対して頭を下げた。

祐一は心で叫んでいた。

（その手があったか！）

そして言葉に出して言った。

「それは名案です！ぜひ！話させてください！」

鈴木も、

「おう！それはいい！」

と、三人はお互いに眼をやり、大声で笑った。

「どうなるかは分らんが、決まったら凄いい前進だな！」

と言った鈴木の上葉は、三人を感動させた。

「山下里美さんも、本人の意向を聞きながら、最善を尽くさなきゃ！」

荒井は独り言のように言ってから、二人に向かって言った。

「良いことも、悪いことも、加速が付くと一瞬だね。」

「まさしく因果応報の結果だな。」

鈴木のこの一言には、凄みがあった。

三人は、紹興酒で乾杯して解散した。

それから三日後、田下が、祐一に挨拶に来た。

もちろん、退社の挨拶であった。

常務室の応接テーブルに、普段から身体を少し退け反らして座る癖のある田下は、その日も、普段の打ち合わせの時のように、何ら変わらずに腰掛けた。

田下は、男にしては背が低く、また痩せていて華奢であった。

その身体的な劣等感をカバーするように、彼は清潔感で補っていた。

その日も変わらず、清潔に整髪された髪型、形崩れの全くないスーツからワイシャツなど、身嗜みも完璧であった。

田下は、まるで他人事のように、今日で退職する事を祐一に告げた。

田下は告げた後、祐一の目線を凝視していた。

今日、田下が変わっているものといえば、その目つきである。

祐一も田下と目線を合わせた。

祐一は、田下の眼差しの奥に、もう一つ、何者かの人格が入っているかのように感じた。

今、祐一を凝視している田下は、薄ら笑いを浮かべている。普段のニヒルさを装う彼には、考えられない事である。

祐一が退職の理由を尋ねると、

「辞める理由ですか？」

と大きな声で言って、小声で笑った。

別人格が、濃厚さを漂わせ始めた。

祐一は対座した上座の場所から、逃げ出したい気持ちにかられた。

「社内でちょっとした事がありましたね！」

初めて聞く、凄んだトーンに、別人格の、ニタニタした表情が重なって行く。

田下は、スーツの胸に刺していたボールペンを手に取り、そして芯の先を出して、祐一に向けて言った。

「僕がやったことになりまして…

罨にかかりました。」

と笑いながら言ったが、その間も視線は祐一から逸らさなかった。

「罨にかかった？」

「はい！ハメられました。」

ボールペンの芯先は、祐一の眼に向けられていた。

祐一は殺気を覚えて、外の景色を観る風を装って、席を離れた。

窓を開けると、風も無く、陽光も雲に隠れていて、雲のモノクロの色彩が、田下の退社の象徴のように感じられた。

祐一はソファーには座らずに、ドアの前に立った。

田下のスーツの黒と、シャツの白が、鮮明に祐一の脳裏に焼き付いた。

「田下君、君はまだ若い、やり直しはきく、元気でやってくれ、希望は捨てずに。」

祐一は握手をしようと思ったが、田下の殺気がそれを拒んだ。

「いったい誰なんでしょうね？僕をハメたのは？」

田下はニタニタと笑っていたが、言葉は凄みがあった。

祐一にも怒りが湧いて来た。

「田下君、因果応報だ！」

君が人にした災いが、自分に返って来ただけの話だ！
反省して次に活かさない！」

祐一は声を荒げる事なく、諭すように静かに言った。

「因果応報だと！」

田下は立ち上がり、声を荒げた。

ニタニタした人格が、本性を出して、鬼の表情で睨んで来た。

祐一はドアを開けて、田下の退出を促した。

「反省をして、やり直しなさい。」

田下の眉が吊り上がった。

「あなたですね？」

「そうだ！」

田下は悲しい表情になり、肩を落とした。

田下に取り付いた何者かが、出て行つたと祐一は思った。

田下は下を向いてむせび泣いた。

そして田下は、右手を祐一に伸ばした。

むせび泣く肩が揺れていた。

祐一は差し出された手を握った。

と！次の瞬間！

田下は手に力を入れて、顔を上げ、祐一を凝視した。

田下の顔に涙の筋は一つも無かった。

むせび泣きでは無く、笑っていたのだ。

田下は祐一の顔を見上げるようにして、近づけた。

取り付いたものは健在であった。

片手に持っていたボールペンを振り上げた。

祐一は刺されるものと覚悟した。

しかし、そのボールペンの軌道は、ゆっくりと田下のスーツに収まった。

「井上さん、今まではお世話になりました。」

田下は深々と頭を下げた。

「これからの付き合いは、別の形になりそうですね。
鈴木専務にもよろしくお伝えください。」

と、ニタニタと笑いながら、決心を固めた深い頷きをして、出て行った。

祐一はすぐに妻の亜利沙に電話をし、動揺しない理由を作り、しばらく実家に帰るように指示した。

それから、今回の最大の犠牲者である山下里美にも、事の内容を電話で知らせた。

祐一は急いで、鈴木専務の部屋に行った。

何か言いようもない不安が祐一を襲っていた。

その不安は、徐々に大きくなって、鼓動の響きが増していった。

祐一は、専務室の壁を強くノックした。

「はい、どうぞ。」

と中からは、何時もと変わらないトーンと振幅の、鈴木の落ち着いた声がした。

祐一が中に入ると、鈴木は執務椅子に腰掛けていて、腕組みをしていた。

「おう、どうした？慌てて？」

「今、田下が来ませんでしたか？」

「いや、来てないが？」

それよりも今、ダイアリ堂の荒井副社長から電話があつて、田下君は懲戒解雇、上司の浮佐は、専務から平部長に降格させたらしい。これでダイアリ堂も、新たな出発だな。」

祐一は一礼して、田下が来社したこと、鈴木に対して礼を持って辞したことを伝えた。

祐一は思った。

<因果応報という法則は、確かに生きており、ここにおいて悪は善に勝てない。>

と心は、少しばかり晴れやかになった。

これらの事を、祐一は回想しながら誠に話した。

プレハブの外は変わらず、嵐であつた。

リサの誕生日

誠は、祐一が語る一言一言を、静かに聞いていた。

外の荒れた風、雨、稲妻などを、誠の感覚は完全に遮断して、意識が身体を中心辺りにある場所に、”平安”という温かいものを充満させて行った。

その”平安”という温かいものは、荒井副社長、井上祐一、竹崎真一、鈴木専務などの協力者たちに感謝を述べた。

また田下、浮佐たちに、”許す”という気持ちを与えた。

「誠君、タクシーで家まで送るよ。」

今日はリサの誕生日だ、楽しんでくれよ、さあ！行こう。」

駅ビルに入っている百貨店で、リサのプレゼントを買い、祐一と誠はタクシーを拾い、誠の家へと向かった。

二ヶ月ぶりの家は、窓から温かい明かりが溢れていた。

誠は祐一にお礼を言って、タクシーから降りた。

二人は固く握手をして別れた。

誠はプレゼントが濡れないように、スーツで覆って、静かに家へ入って行った。

チャイムの音と一緒に、リビングのドアが開けられ、廊下を小さな歩幅で音を立てながらリサが現れた。

誠は、スーツ姿は変わらなかったが、ヒゲが伸び、髪も首元まで伸びている。

リサが誠と判るまでには、少しの時間がかかった。

「おじちゃん？」

リサは顔を斜めにして、問いかけた。

誠は頷いて笑みを返し、後ろ手に隠していた花束をリサにかざして、
「リサちゃん、誕生日おめでとう！」

というや、

「おじちゃん！」

と言って、抱き着いて来た。

「ママ！おじちゃんが帰って来たよ！」

と奥にいるであろう真由美に大声で言った。

「リサちゃん、ずいぶん帰ってこれなくてごめんね、いい子にしていたかな？」

「うん！」

と言うと、リサは誠の顔に手をやり、

「ワアオー！ヒゲばうばう！」

とヒゲを掴んだ。

誠はリサに、ほお擦りすると、

「うわぁ！くすぐったい！」

と身体をのけ反らせて笑った。

誠も大声を出して笑い、久しぶりの義理ではあるが、娘との再会に満足した。

「この前リサね、おじちゃんを駅で見たんだよ。」

誠は、少し驚いた。

その時、リビングのドアが開き、少しだけ真由美が頭を出して、

「リサちゃん、お待たせ！さあ、誕生会始めましょう。」

とリサに笑みで言った後、

「あなたも掛けて。」

と素っ気なく言った。

「ありがとう。」

と誠は言ってリビングに入って行った。

久しぶりの家族団欒である。

誠と真由美は、お互いに直接話しかける事はしなかった。

今日の主役である、リサを介して間接的に会話するということを感じてあった。

それでも誠は、例えばこちなくても団欒という現実には満足した。

誠は、その時代に一番人気のある、アニメのキャラクター人形をプレゼントした。

それは、小学生の低学年のリサとおんなじ大きさの人形であった。

「うわぁ！これ前から欲しかったの！」

リサは人形を抱きしめて喜んだ。

「名前は何にしようかなあ？」

と頭を傾け、腕組みをした後に、誠のヒゲを触りながら、

「ヒゲツパーにする。」

「ヒゲツパー？」

誠が名前の由来を尋ねると、

「そう、だっておじちゃんは、いつも帰ってこれないでしょう。」

リサは真由美にも聞こえるように声を大きくして続けた。

「だから、これをおじちゃんだと思って、毎日話しかけるからね！」

誠の心は熱くなった。

しかし、真由美の顔は曇った。

真由美はその時、誠との離婚を考えていたからである。

つい先程まで、多くの学校の友達が来ていて、楽しくリサのための誕生会をしていたらしく、リサに対するプレゼントが、沢山ダイニングに並べられていた。

真由美は、かなりの数になった皿を洗いながらだが、リサが投げかける喜びの返答には応えていた。

団欒という明るさが、外の嵐を完全に遮断していた。

リサが、興奮の疲れから、うたた寝を始めたのをきっかけにリサの誕生会も一通りの進行を終えざるを得なかった。

誠はリサと一緒に風呂に入り、そしてリサをベッドに寝かせた。

リサが命名してくれた”ヒゲツパー”をリサの横に忍ばせてあげた。

誠はリサの顔を眺め、優しく成長しているのを確認して頬にキスをして、部屋を出た。

ダイニングに戻ると、真由美がテーブルに座ってワインを飲んでいった。

もちろん、誠のグラスは用意されていなかった。

誠は冷蔵庫を開け、缶ビールがあるのを確認すると、「いただくよ。」

と言って六人掛けの、ダイニングテーブルの椅子に着いた。

真由美から一番遠い位置であった。

風呂上がりのビールは、渴いた誠の喉を刺激するはずであったが、全くと言っていいほどに、その場の雰囲気、凄涼感をせき止めてしまった。

長い沈黙があった。

嫌悪感が、時間を長く感じさせた。

真由美の最近の態度からして、先に話しかけて来ることはないと思っただけだ。

まして、今さら共に空気を共有する場所に真由美がいる事自体が、不思議であつた。

「貴方は、いったい？」

何のお仕事を？」

なさっていらつしやるの？」

不意打ちの、真由美の言葉に一瞬、誠はたじろいだが…

「…ああ、人事の仕事さ。」

「そのヒゲの生わつた、髪の長い姿で？」

「そうだよ、特殊なスカウトの仕事だからね。」

真由美は”特殊”という言葉の意味を知りたかつた。

誠がこの前、家を出た後に、すぐに通帳に一千万円近くの大金が振り込まれた事実。

目の前の、みすばらしい格好。

駅で見たホームレスの介抱の姿。

どこで、これらの現象が結び付くのか？
知りたかった。

「この間、偶然あなたを駅で見かけたの。
あなたはホームレスを介護していたわ。」

誠の動揺は消えていた。

そして恥じることなく、真由美の言葉を聞くことが出来た。

真由美は迷惑だと言わんばかりに、眉に力を込めて言った。

「ホームレスと何の関係がおりなの？」

誠は、これが一般の妻の意見だと思った。

確かにお互いの夫婦関係において、会話が無く、誤解が生じているのは拒めない。

会話をすることすら拒んで来た妻を責める気持ちを抑えて、誠は語った。

「その通りだ、ホームレスの人達を会社に送り込むスカウトだ、彼らの人生の再生をお手伝いしている。」

「ホームレスの…再生の…お手伝い…？」

真由美は声を上げて笑った。

「あの人は人生の敗北者よ！好きでホームレスをやっているのよ！生きる気力もない人達に、人生の再生なんてないわ！」

誠はビールを一口、喉に運んだ。

話しのフィールドが今誠の傾注している事であるため、ビールの凄涼感が、今度は五臓に染みて行った。

「もちろんそういう人達もいるのは確かだよ。

しかし、彼らと生活していると分かるんだが、時代に翻弄されてホームレスにならざるをえない人もいるんだよ。

生きる気力がある人達は、確かにいるんだ。

ただ再生するそのきっかけが、一般の人達より厳しい。」

真由美は普段から酒は飲まない。

しかしこの日は、またワインを注いで、口に運んだ。

誠は諭すように、真由美に続けた。

「一度、人間は挫折すると中々立ち上がるのには、時間ときっかけが必要じゃないか。それは君も経験あるだろう？」

人が想像もつかない現実で、ホームレスになっっている人達もいるん

だ。」

誠は、少しは真由美が理解してくれたと思った。

「それであなたは、少しはましなホームレスを探しているって訳ですの？」

「ああ、そうだよ。やみくもにすべてウェルカムって訳にはいかな
いからね。」

スカウトは、その人となりを見るのが仕事だからね。」

「それであなたはホームレスになっている訳ですか？」

「そうだよ。」

真由美に沈黙があつた。

誠は少し理解されたと思った。

しかし、次に真由美から出て来た言葉に絶句した。

それは誠には考えてもいなかった当たり前前の事であつた。

「リサが可哀相です！」

リサのパパはホームレスって知られたらあの子が可哀相です！」

誠は一瞬にして、絶望感に苛さいまれた。。

（そうだな！）

返す言葉が無かった。

真由美の言葉は、真実であつた。

誠は逃れられない”現実”に、彼の与えられた人生の皮肉を、怨んだ。

（所詮、俺は愛すべき人と、引き裂かれる運命か！）

今さらホームレスの人達と、縁を切る事は出来ない。

かといって、血は繋がっていなくても、愛するリサと別れたくはない。

今は心が離れている妻に対しても、（根気よく話して行けば、必ず分かり合える。）

と思つていたからだ。

（家族だから！）

この思いは変わることは無かった。

微かに聞こえる暴風雨が、夜の闇と同化し、誠の気持ちを萎えさせ無言にした。

真由美は自らの言葉で、頭を垂れた夫に対して、軽蔑の眼で俯瞰していた。

誠は財布に閉まっていたネックレスを取り出した。

真由美との再婚以来、封印していた思いを、そつと取り出した。

亡き前妻の形見の品である。

（ごめんね。）

誠はネックレスを握りしめた。

（リサは必ず大人になった時に、今の自分の事を理解してくれるはずだ。

しかし人の痛みが解る人間に成長したとしても、今、この七歳という年齢でこの事を知ったら、人の痛みを知る前に、親を恨む原因になりかない。）

誠は決断した。

とその時、「ドカーン！」という轟きが地に響き、電気が切れた。

真由美は「キャー！」という叫び声とともに椅子から転げ落ち、フロアーに崩れ落ちた。

誠は冷蔵庫にある誕生日ケーキのロウソクをガスで点けて、リサの部屋に一目散に急いだ。

リサは一瞬、目を開けたが、誠が背中を優しくさすると、寝返りを打ってまた眠りに着いた。

リサの隣の「ヒゲツパー」が優しい眼差しで見つめていた。

誠も微笑みを返し、愛おしむように、リサの頬を撫でた。

手にしていたネックレスを、リサの首にかけた。

（どうか！この子を守って下さい！）

心で万感の涙を拭い、しばらくリサを眺め、そして静かに誠はドアを閉めた。

リビングに戻り、残りのロウソクをテーブルに燈した。

誠は、まだフロアに頭を抱えて、崩れ落ちている真由美の手を取り、優しく抱えて席に着かせた。

誠は倒れているグラスを新しいのに変えてやり、ワインを注いであげた。

真由美はいくらか落ち着きをみせた。

「君の好きなようにすればよい。

君からしたら、僕も含め、彼らはクズかもしれない。

しかし、どのような境遇でも人間は、ちよつとしたきっかけで変わるはずだ。

僕はそう信じる。

君は君の道を歩めばいい、地位もあるし、経済力もある。

僕は僕の道を歩くよ。」

言い終わると、誠はスーツに着替えた。

そして下着から上着と、カバンに詰められるだけ詰めた。

「彼は大丈夫だろうか？」

誠がおもむろに呟いた一言を、真由美は聞き取った。

（この間、介抱されていた男だね。
ちよつと待って！

あの男には、奥さんと子供がいたわ！）

誠は嵐の吹き荒む中、家を出て行った。

時計は夜の十一時を回っていた。

駅のコンコースが閉まる、一時間前だった。

閉まる前に、嵐から逃れられる場所を確保しなければ、大変な事になる時間になっていた。

第四章・誘いの旅

プレハブから、心の準備もままならない間に、勢いよく走り出した車の中で、あきらとあけみ兄妹、川夫と川子夫婦、ロングとローザの恋人カップルの六人は、体がガチガチになっていた。

それもそうである。

つい先ほどまで、

「貧乏ジジイ！腐れババア！」

と揶揄され、人目を恐れて、ただ生きるためだけに生活していた裏の環境から、一瞬にして過去に居た、表の世界に戻ろうとしている現実。

またそのような彼らをわざわざ迎えに来てくれているのが、天下のサコーズの竹崎会長であるからだ。

六人はいまある現実を実感出来ないでいた。

しかし車が走って三十分も過ぎない内に、車内は笑い声に溢れていた。

途中で買い物に寄った店では、もうすでに竹崎と六人は、まるで旧知の友人のようになっていた。

「あきらさん！これこれ！これ絶対に必要だよ！へえ！こんな便利なものがあるんだ！」

竹崎は一人で店内を見回して、子供のように叫んでいた。

「おねえさん！これどうやって使うの？」

と呼び止められた若い女子店員が、ピタツと横に着いて説明を聞く”子供のようないやさん”に笑いをこらえながら説明をしていると、

釣られて回りの客も説明を聞くといい、ちょっとした”実演販売”
となっていく。

「ひえー！これは凄い！」

回りの人達も頷く。

「あきらさん！これいいですよね！
だめ？だめですかね？」

「いや、会長、いいですね。」

「でしょ！買いましょう！」

と言って、あきらのカートに入れてしまう。

この騒々しい”子供のようなおジサン”に釣られて皆もかってしま
う。

「おー！皆さんもいい買い物しましたな！」

そこにいた全員が笑い声をあげる。

竹崎のオーラは常に、人を笑顔にするのであった。

「川子かあちゃん！こっち来て！」

と回りが失笑するほどのはしゃぎぶりは続いた。

「ロング君、これローザちゃんから身を守るために必要じゃないか
？」

と必要のないバイク用ヘルメットを指差した。

竹崎が軽くヘルメットを叩くと、
「ポーン」

という音が、店内にこだました。

六人は大声で笑った。

回りにいた人達も、堪えられずに笑った。

会計はすべて竹崎が済ませ、車に乗り込むと、予約していたステーキ店へと車を走らせた。

店は、格式ある高級店であった。

主に著名人が利用する店として有名な店であったがため、その日も、外は嵐であったが、世間に名の知れた人達が来客していて、満席に近かった。

竹崎は、皆を予約していた個室に案内すると、知り合いに挨拶をした後、遅れて部屋に入った。

竹崎は店を選ぶ時に、それぞれの好みなど聞いていなかった。

そうする必要はないということを、竹崎は知っていたのだ。

長く”食”という”欲求”を捨ててきた人間は、好き嫌いの趣向は消えているのである。

受け付けない”食材”があること自体が贅沢なのである。

「正式な皆さんの入社式は後として、とりあえず皆さんを歓迎して！乾杯！」

竹崎の音頭で、祝宴は始まった。

竹崎のグラスに、順番に合わせて行き、皆、感極まる気持ちを押さえるように、礼を述べて行った。

男達とローザはシャンパンに顔を赤らめて、

「アルコールなんて何年ぶりだろう。」

とあきらと川夫は顔を合わせ、竹崎にお礼を言った。

笑顔で応えた竹崎は、あけみと川子とジュースを飲みながら談笑した。

「お肉を用意しましたが、肉が苦手な人は肉と思わずに食べて下さい。食べてみれば納得しますからね。」

と全員、紙エプロンを付けて待った。

クラシックが流れていた。

竹崎はあえて会話を少なくした。

寡黙に食事を待つ事も、期待感を増す要因である。

「会長？」

ローザが恥ずかしそうに問いかけた。

「あのう、ビール頂いてよろしいかしら？」

「あっ！気づかなくてごめんなさい。」

と、竹崎は生ビールを、男性とローザの分を注文した。

ローザはジョッキを両手で支え、一気に口に運んだ。

最初は控えめに飲んだ。

しかし、両手が首の位置から、顔、頭と上がっていくにつれ、ビールはローザの喉を心地好く通り抜け、

「ふー！」

という感嘆の言葉を吐いて、飲み干した。

その飲みっぷりに全員、釘付けになった。

「お見事！」

竹崎は大声で笑い、拍手をした。

全員、それに続いた。

「ローザちゃん、飲み過ぎないでね。」
とロングが言ったとたんに、

バシー！

と後頭部に平手が飛んだ。

頭を抱えるロング。

睨むローザ。

全員が大声で笑った。

個室の外にも笑い声が漏れた。

良識ある他の客達も、和やかな個室を祝福するように、連れ達と目配せをして微笑んでいた。

いよいよ料理が、二人の給仕によって運ばれて来た。

竹崎は、よく知るこの店のオーナー兼シェフに、

「大切なお客様を連れてくるから、最上級の肉を用意して下さ
い。」

とお願いしていた。

シェフは松坂肉でも最上級とされる、但馬を取り寄せた。

さらに、その但馬の部位でも、成牛一頭から、一キロ取れればいとされる、脊椎の回りにある「イクツキ」という肉を取り寄せた。

この「イクツキ」は市販されていない部位で、生産と解体を同時に営んでいる業者からしか回ってこない部位である。

さらにこの部位を、サイコロステーキに使用したのが、この店のオーナーシェフである神崎である。

神崎と、その弟子達にしか業者も卸さない、貴重な肉であった。

また神崎も、この肉を誰にでも提供することはなかった。

神崎が本物と認めた人しか、「イクツキ」を食することは出来なかった。

神崎雄二

知る人ぞ知る、料理界のカリスマである。

料理が、調理場から運ばれて来る段階から、鉄板の上で踊る肉の香りが、店内を魅了した。

どの料理よりも、優れて香ばしい、ほとばしる香りに、客達は手を休め、注目した。

「イクツキ」の焼き加減は、ミディアムと決まっていた。

その理由は、元来、肉自体が菌が入り込む隙間のない密度の高い部位であり、なんらかの処置をするような事もせずに、生で食べられる場所であるからだ。

皆の前に鉄板が、順番に置かれて行った。

目の前で踊る肉の表面は、うつすらと赤みと焦げ色が、規則正しく配列されている。

香りが、もう食事は始まっている、とばかりにアピールしてくる。

給仕は、また順番に、特製タレを掛けていく。

クラシックの音色が、「ジュージュー」という音に消され、肉のアップールは絶頂を迎え、皆を迎えた。

「お待たせ致しました。」

と竹崎が微笑んで、食事を促した。

皆、強くナイフを入れたが、拍子抜けする程に、肉は軟らかい。

表面はまるでマグロのように赤いが、血を連想させない、きめ細やかな表質である。

一口目を口に入れた。

口の中に、ジュワつとした旨味が広がる感覚に堕ちる。

喉を過ぎると、胃の中だけでなく、全身に旨味が拡がって行く、という感覚になる。

もうそれは、肉を食べているという感覚ではなく、この世の中の、最高食材を食べている、という感覚である。

個室の外で、中から聞こえてくるナイフとフォークの重なり合う音が、見事に調和していた。

外にいる客達は、手を止めて聴き入った。

あまりの美味しそうなフォークとナイフの音に、客達は、小さく、

拍手を個室に向けて捧げた。

三組の男女は、それぞれの相方を氣遣っていた。

このご馳走の前では氣兼ねなく、自らの欲を満たしたいはずであるうが、ステーキの量が半分位になりかけたところで女性陣は、相方の皿に、自分のステーキを乗せて行った。

ローザにおいては、

「ヒロ君、良かったね！お肉好きやもんね！私の分までお食べね！私はビールで充分や。」

と言って、一口食べただけで、後はロングのために、自らのご馳走を分け与えた。

ローザも肉は大好物であったが、相方への慈愛が自らの欲を凌駕していた。

竹崎は、それらの姿に感銘し、個室を出て調理場に向かうとした時に、オーナーが調理場から出てきて、竹崎に向かって深々と頭を下げた。

竹崎もさらに頭を深く下げ、指を六本、オーナーシェフにかざした。

オーナーシェフは、

「かしこまりました。」と言って、調理場に入って行った。

竹崎は、オーナーシェフの背中に深々と再度、頭を下げた。

お互いに、心で相手の”粹”を称えあつた。

「皆さん、今、出てきた分は半人前ですからね。あと一皿づつ出てきますから。私はお腹一杯で、私の分はキャンセルして来ました。年取ると食も細くなりますわな。」
と言つて大声で笑つた。

食事が終わり、六人は土下座をするのではないか？

と言わんばかりに、頭を深々と下げ、竹崎に感謝の言葉を伝えた。

「会長、本当にこんな私たちのために、ありがとうございました。こんな美味しい食べ物初めて食べました。」

六人は涙がこぼれないように、懸命に堪えていた。

「いえいえ、これから私たちは仲間です。」

協力してやって行きましょう！」

と全員でがっちり握手をした。

それぞれが、再び席に着くと、竹崎は皆に向かって言った。

「皆さんにご提案があります。」

「はい、なんでもございましょう？」

川夫が応えた。

「もちろん、これは強制ではありません。」

誠は、一人一人の目を見つめ、微笑みに言葉の意味を乗せて、優しく問いかけた。

「過去に旅に出ませんか？」

「過去に旅……？」

あけみが頭を横に傾けた。

「……ですか？」

川子が言葉を繋いだ。

「はい、誘いの旅。」

もう一度、竹崎は皆を優しく見つめた。

竹崎は、鞆から二つの商品を取り出して、皆に説明した。

「これから皆さんには、この商品を生産して、宣伝し、また必要なる人に届けて頂きます。」

と言って、それぞれの特徴と、竹崎の製品に注ぐ意味合いと、意義を説明した。

竹崎の静かな口調の奥に漂う情熱が、六人の心の中に投入されて行った。

「これを皆さんに置き換えるならば……」

竹崎は皆を優しく見つめた。

「皆さんがホームレスになった理由は、私らには想像もつかない、様々の理由があったと思います。」

六人は俯いた。

「しかし、それはもう過去の話しで、これから未来に向かって歩かねばなりません。」

皆、決心したように竹崎を見つめた。

「そこで、明日の午後から、それぞれの”過去”への決別の旅に出てみませんか？」

六人は、ポカンとした表情をした。

「この商品に、皆さんの”思い”を吹き込んで送ってあげませんか？」

なんでも良いんです。

”許し” ”償い” ”生存” など…

また誰でも良いんです。

”大切な人” ”謝りたい人” など…」

六人は、また下を向いた。

「いや、こつそりです。」

対面などする必要はないんです。」

六人は、顔を上げて竹崎をまじまじと見た。

「人の許容範囲は様々で、それは相手の気持ち次第でいいと思うんです。」

ただ、過去に対して、一度けじめを付けること。

行動を起こすことが、肝心だと思うんです。

こうして皆さんと私は出会いました。

しかし、偶然に出会ったわけではありません。

皆さんの「どんな事があっても生き抜く！」という信念が、ラッキ―を引き寄せたのです。

皆さんはもう十二分、償いはクリアしたんですから。」

この言葉は六人に、勇気を与えた。

内側から、感謝という実感が、さらに湧きだして来た。

「この儀式を、私は”誘いの旅”と呼んでいます。」

過去を今一度認め、そしてそこから決別し、未来の夢に自らを誘うこと。

新しい“再生”への旅です。」

六人は見つめ合い、しばらくの沈黙の後、同時に頷いた。

あきらが言った。

「会長、その旅行かせて下さい。」

六人は深々と頭を下げ、決行が決まった。

「それでは、明日の一時にアパートの前で待っています。」

今日一日考えて、思いの丈を吹き込んで下さい。」

「わかりました。」

と一同が声を合わせ、店を後にした。

車が、これから生活するアパートの前に着いたのは、夜の十一時であつた。

それぞれの住む号室の前には、すでに仮名の表札が飾られてあつた。

「ここが皆さんの生活するアパートです。」

すでに寝具は中に収められています。

水道も電気も直ぐに使えますので。」

と竹崎が言つた時に、凄まじいカミナリが三回続けて起こつた。

天上から地に向けて、空間を割るような閃光が走つた。

竹崎は身体を九の字に曲げ、女達は相方に抱き着いた。

雨が更に加速するように、地面にのめり込んでいくようであつた。

「あきらさん、プレハブには他に誰も出入りはしませんよね。」

「はい、誰もいません。」

カギは私達以外は持つていませんので。」

竹崎は安心した後、言葉を続けた。

「誠君は、今日は来客があるから、あそこには居ないはずだから…」

「会長、何か？」

あきららは妹の背中をさすりながら、問い返した。

「いや、この雨ですからね、万が一があるといけませんから。」

誰もいなければ安心ですね。

まあ、今日は皆さんお疲れ様でした。

ゆっくりとお風呂に浸かって疲れを取って下さい。」

六人は、満面の笑みを称えている竹崎に対して、手を取り感謝を述べ、竹崎は車を走らせた。

皆、車が見えなくなるまで頭を下げていた。

狂気

誠は駅に通じる地下道を通り、突き当たりの北口と西口の分かれ目を左に折れた。

そして俗に言う”新聞紙組”のホームレス達を捜した。

その一帯は、地下道が短く、すぐに地上へと繋がるため、強風に乗った雨が入り込んでいて、終電が終わった後にシャッターが降り、西口と違って雨風を防げない場所であった。

誠は先日の青年をはじめ、誰も居ない事に安堵した。

ここの住人になって間もない青年に対して、先住の仲間が、それを教えてくれたに違いない。

誠はそう思った。

しかし、よく目を凝らしていると、柱の凹凸から一人の人間の両脚が投げ出されているのを確認した。

そこは雨は凌いでいるが、強風が吹き付けている場所であった。

かろうじて強風も、その柱で凌いでいた。

その強風は、一度座り込んだら、動く勇気を削ぐ執拗さがあった。

誠は急いで駆けつけた。

やはりそこに居たのは、例の青年であった。

「誰も助言すらしなかったのか！」

誠は怒りが沸き起こった。

そして、寒に打ちひしがれて震えている青年を見て、怒りの感情が悲しさに変わった。

青年のズボンは濡れていて、震えながら目をつむっていた。

「さあ、トイレで着替えよう。」

誠を確かめた青年は、青くなった唇から息を吸い込み、誠にすぎるように両手を預けてきた。

誠は青年を抱え、トイレへと向かった。

その痩せた体から伝わる振動が、吊るされた人形のようにカクカクと青年を揺らした。

強風が更にその振幅を強くするように、前方を塞いだ。

トイレの個室で、青年が一人で着替えを済ますまでかなりの時間がかかった。

もう安全な西口のシャッターが閉まる時間は過ぎていた。

「とりあえずプレハブに連れて行こう。」

竹崎の下に連れて行くには、生きる気力が弱い、とりあえず後々考えよう。」

誠は自らを納得させ、青年に温かい缶のお茶を手渡し、歩みを進めた。

その時、おぼつかない二人の足跡と同調するように、コーン、コーンと後ろから足音が近づき、明らかに二人を観察するかのようにしてやがて止まった。

「田中、久しぶりだな。」

誠は、殺気と共に振り返った。

そこには濡れた長い前髪で、顔を隠したスーツ姿の男が立っていた。男は歩調を進め、二人の前まで来ると、振り返り、片手で髪をかき上げた。

なんとその男は、田下であった。

顔が青白く光っているように思えた。

「田下か？ 何をしている！」

田下は薄ら笑いを返した。

久しぶりに見る田下は、明らかに人相が変わっていた。

目尻が上がり、顔の上部は怒りに満ち、口元だけが笑っていた。顔に二つの人格が入っているように感じた。

「落ちぶれたな。」

田下は大声を出して笑った。

誠は無言で青年を抱えながら、歩を進めた。

「今日はいいい光景を見せてもらったよ。
元気でいてくれ！」

「気を遣ってくれてありがとうよ！」

誠は構わず歩調を進めながら言った。

「そうさ、昔のお仲間さんだ。
気は遣いますよ。」

田下は大声で笑いながら、二人の背後に言葉を吐き続けた。

「そう、いつまでも元気で長生きして・・・
生きて苦しみの時間を、多く持つて欲しいだけさ！」

何度も田下は笑った後、靴音が遠くなるのを誠は後ろに聞いていた。

ブレハブに、やっとのことで辿り着くと、誠は青年に温かい飲み物
と弁当を差し出した。

青年はゆっくりと吟味するように食べた。
しまつてあつた布団を出して寝床を整えて上げた。

誠は一旦、外に出て祐一に電話をした。

川の雨量が、防波堤ぎりぎりまで来ているが、まだ二三メートルは

余裕があるのを確認した。

誠は、田下の異様さを、祐一に報告し、逆恨みのターゲットから誠が離れた事、次は祐一に集中する予感を話した。

「分かった！ありがとうございます。」

すでに女房の亜利沙は実家に移してあるし、亜利沙の計らいで里美さんも一緒にいるんだ。」

誠はその言葉を聞いて安堵した。

くれぐれも護身に注意して下さい。
と電話を切ってプレハブに戻ると、青年は震えが止まっています、

「本当にありがとうございました。」

と言って頭を深々と下げた。

まだ、頭までには来てないな。と誠は安堵した。

「ここは僕の寢床だから、遠慮はいらないよ。
さあ、今日はもう遅いから寝よう。」

と言うと、青年は涙を隠すように今一度、深々と頭を垂れ、布団の中で身体を丸くして入って行った。

雨風は変わらず強く吹き荒れて、一台の車の灯すヘッドライトの先にある、川岸のススキの密集を吹き荒らしていた。

その一台の車には、寝入った少女を乗せた一人の女が運転している

車であつた。

その女は、二人の男がプレハブに入って行く様を確認していた。

誠の妻である真由美であつた。

あきら兄妹の旅

その日も空は、灰色の雲が風を味方につけて、厚くうねりながら全面を覆っていた。

強風に乗って地面を叩きつける大粒の雨が、太陽に勝ったと祝杯をあげているように傲慢な狂騒をあげていた。

六人はその狂騒に怯えるように、約束の時間前にはアパートで待機していたが、すぐに竹崎がマイクロバスに乗って、手をふりながら現れた。

竹崎は六人の表情を確認すると、直ぐにアパートから車で五、六分の距離の会社に急いだ。

そして直ぐに、事務から順番にオペレーター、調理場、工場へと、それぞれの場所で六人を従業員に紹介して行った。

もちろんどの場所でも、「笑顔」「激励」「拍手」「握手」などで迎えられた。

竹崎はその都度、六人が皆と一緒にの環境であったことや、それぞれのカプルの関係などを補足していった。

工場では、八十人の従業員の前で

「これから皆さんも出かけた”誘いの旅”に行ってきます！」

と壇上でコブシを振り上げた。

この時、歓声と共に外の雨音を消し去る程の、力強い拍手が長く続いた。

六人の表情から、怯えが消え、勇気という熱い気持ち が全身に湧き上がった。

その表情を竹崎は確認した。

竹崎は内心、安堵した。

竹崎と六人は、社長室に移った。

竹崎はあきらに向かつて言った。

「年功序列でいきましようか。」

場所はどちらにしますか？」

「はい。S市に行つて頂けますか。」

「はい、わかりました。近くですね。車だと一時間ちよつとで行けますね。さあ、出発しましょう。」

竹崎は六人を乗せた車の中で考えていた。

普通、身を隠す場所として、なるべく生活した場所から遠くに身を置くのが心情である。

しかしS市はあきら達が生活していたプレハブからだ、明らかに通勤圏である。

そのような事を思いながら、竹崎は冗談を言つて一人で笑つていた。六人は愛想笑いを浮かべながら、前方を凝視していた。

時々、息を吐きながら逃げたい気持ち打消しているようだった。

竹崎は決して場所の理由を聞くような、失礼はしなかった。すると、あきらが静かに語りだした。

「私はS市で、ネジ生産工場の社長をとりました。あけみはそこで役員として、事務を手伝ってもらつてました。」

竹崎の斜め後ろから、ゆっくりと低い声が車内に響いた。

あきららは全員を見渡し、相づちをうつた。

他の者もそれに応えた。

あけみはうつ向いていた。

「あきらさん、どんな聖人も叩けば一つぐらいはホコリが出ます。話さなくても大丈夫ですよ。」

竹崎は笑顔で運転席から言った。

「いえ、もう逃も隠れもしません。竹崎社長と皆には聞いて欲しいんです。仲間ですから。」

あけみはハンカチをまぶたに当て、うつ向いたまま大きくうなずいた。

竹崎は前を向いたまま、その時代に駆け抜けた、グローバル化の波に吞まれた話を黙って聞いた。

フロントガラスを跳ね除けるワイパーの音が、強く響き続いた。

あきらの本名、川上晃はS市の郊外の工業団地内に、五年前まで、敷地300坪の川上ネジ工業株式会社という会社を経営していた。その妹である間下明美は、役員として創業十五年の会社を経理で助けていた。

川上晃は現場上がりの社長であった。

決してワンマンでなく、従業員思いの社長であった。

全盛期には、年商二十億あり、従業員は五十人、製造機械稼動も八台と順風であった。

創業から十年目の川上晃四十歳の時、最初の試練が訪れた。

時代はクローバル化の時代に入り、メーカー側の海外進出に伴う大幅な値下げ勧告がなされた。

メーカー側は人件費コストの安い東南アジアでの生産に旨みを覚え、当時の日本の下請け企業に一種の脅迫に近い無理難題を言ってきたのだ。

川上晃は吞んで耐えた。

ネジの種類を半分に抑え、メーカーからリースしている機械も半分にした。

自ずと従業員の数も半分に減った。

最初は持ちこたえられるかと思った。

しかし、更に三年後、メーカー側の更なる値下げ勧告があった。

川上ネジ工業の赤字へと転落する限界利益は、八千万円である。

その頃には毎日がその境界線を行ったり来たりしている状態であった。

川上晃はメーカーに噛み付いた。

しかし、そこで言われた言葉は使用ネジの廃番通告であった。

退行する運は止まらなかった。

それでも川上晃は諦めなかった。

新たなメーカーを探すため、全国を奔走した。

廃番終了まで時間がなかった。

その中で、川上晃の目の回りに出来た”クマ”

に心を動かされた企業があった。

機械を変えれば、製造出来るネジである。

川上晃は希望に燃えた。

「これで従業員が救える！」

喜びを伴い、銀行に融資を申し込んだ。

しかし、返って来た返事が地獄の宣告をした。

銀行側が（事業の将来性に限界あり）という判断のもと、支店長ではなく今年学校を出て来たばかりの青年に冷たく、

「審査に落ちましたので融資は出来ません。」

と言わせた。

それでも諦めなかった。

現場上がりの川上晃は、手作業で新しい取引先のネジを作った。しかし、その努力に人生は好転の機会を与えなかった。

やがて二回目の不渡りを出し、破産管財人が入って来て、川上ネジ工業株式会社は倒産した。
十五年前の出来事であった。

この大まかな出来事を、あきらは外の景色とオーバーラップさせながらゆつくりと噛みしめるように、皆に語った。

あけみは手を顔に当てながらむせび泣いていた。

「僕は現場上がりでしたので、自分の技術力に過信していたんです。だから既存の技術力に溺れ、新しい革新の時代が来ることを読めなかった。

環境変化の対応が出来なかったんです。業界情報が分かってさえいれば……」

その後、言葉にならず嗚咽した。

皆、あきらの顔を見れなかった。

竹崎は何も言わず車を走らせていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2524y/>

ラセン

2012年1月8日21時54分発行